長野県飯山市

田草川尻遺跡

II

1978

飯山市教育委員会

長野県飯山市

田草川尻遺跡

II

1978

飯山市教育委員会

序

飯山市田草川尻遺跡は縄文前期、弥生後期、土師器後期の永き期間の集落址として当地方で重要な遺跡です。今回遺跡内において工場敷地造成が行われる事になり、造成に先立ち緊急発掘調査を実施し記録保存をするものであります。位置は国道117号線静間バイパス路線の建設に際し実施された第1次調査地区の南東にあたり国道と千曲川に狭まれた約1300㎡の範囲であります。発掘調査にあたっては、飯山北高等学校教諭高橋桂先生に団長をお願いして調査団を編成いたしました。23日間にわたるこの調査は高橋団長はじめ調査員各位並びに作業員の皆様方の献身的な努力によって竪穴住居址をはじめ貴重な資料が出土し、当地方の古代文化解明にとって朗報であり誠に同慶の念に耐えないところであります。また発掘調査に御協力いただいた地元関係者、及び御指導いただいた県教育委員会の先生方に対して厚く御礼申しあげます。最後に本報告書が埋蔵文化財に対する理解を一層深める上で役立つことを祈念して序といたします。

昭和53年2月

飯山市教育委員会

例　言

1．本書は、長野県飯山市大字蓮字北原地籍に所在する田草川尻遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、工場用地造成工事に伴う緊急発掘調査であり、国庫補助事業として飯山市教育委員会が事業主体となって行なったものである。

3．現地調査は、昭和52年4月15日より5月8日まで行なった。

4．本書の作成は大原を中心に金井・太田・望月が行ない、高橋が全体をとりまとめた。

執筆分担

高橋　桂　第Ⅴ章

大原正義　第Ⅲ章3・4

金井正三　第Ⅲ章1・第Ⅳ章1

太田文雄　第Ⅲ章2・第Ⅳ章2

望月静雄　第Ⅰ章・第Ⅱ章2・第Ⅳ章4

5．本遺跡は昭和47年にバイパス建設に伴う発掘調査が行なわれており、本書では今回の調査を第二次調査報告として取り扱う。したがって、本書中における住居址番号は第一次調査からの通し番号を付すことにした。

6．出土遺物は飯山市教育委員会が保管している。

目　次

序
例言

第Ⅰ章　遺跡とその環境……1
　1．　遺跡の位置……1
　2．　周辺遺跡……3
第Ⅱ章　調査……5
　1．　調査に至るまでの経過……5
　2．　調査経過……7
第Ⅲ章　遺構と遺物……9
　1．　縄文時代の遺物……9
　2．　弥生時代の遺構と遺物……17
　3．　古墳時代の遺構と遺物……37
　4．　歴史時代の遺構と遺物……47
第Ⅳ章　各期の様相……58
　1．　縄文前期土器について……58
　2．　弥生後期の土器様相について……59
　3．　古墳時代……67
　4．　歴史時代……67
第Ⅴ章　まとめ……69

挿図目次

第1図　遺跡位置図
第2図　周辺遺跡分布図
第3図　遺構全体図
第4図　縄文時代の土器(1)
第5図　縄文時代の土器(2)
第6図　縄文時代の土器(3)
第7図　縄文時代の土器(4)

第８図　Ｙ－１号住居址実測図
第９図　Ｙ－１号住居址出土遺物
第10図　Ｙ－２号住居址実測図
第11図　Ｙ－２号住居址出土遺物(1)
第12図　Ｙ－２号住居址出土遺物(2)
第13図　Ｙ－２号住居址出土遺物(3)
第14図　Ｙ－２号住居址出土遺物(4)
第15図　Ｙ－３号住居址実測図
第16図　Ｙ－３号住居址出土遺物(1)
第17図　Ｙ－３号住居址出土遺物(2)
第18図　Ｙ－４号住居址実測図
第19図　Ｙ－４号住居址出土遺物
第20図　Ｈ－４号住居址実測図
第21図　Ｈ－４号住居址出土遺物
第22図　Ｈ－５号住居址実測図
第23図　Ｈ－５号住居址出土遺物
第24図　Ｈ－６号住居址実測図
第25図　Ｈ－６号住居址出土遺物
第26図　Ｈ－７号住居址実測図
第27図　Ｈ－７号住居址出土遺物
第28図　Ｈ－８号住居址実測図
第29図　Ｈ－９号住居址実測図
第30図　Ｈ－９号住居址出土遺物
第31図　Ｈ－10号住居址実測図
第32図　Ｈ－10号住居址出土遺物
第33図　Ｈ－11号住居址出土遺物
第34図　Ｈ－11号住居址実測図
第35図　Ｈ－12号住居址実測図
第36図　Ｈ－13号住居址実測図
第37図　Ｈ－14号住居址実測図
第38図　Ｈ－14号住居址出土遺物
第39図　Ｈ－15号住居址出土遺物

第40図　H－16号住居址実測図
第41図　H －17号住居址実測図
第42図　H－18号住居址実測図

図版目次

図版 1　遺跡近景
図版 2　地鎮祭風景・試掘風景
図版 3　調査風景
図版 4　調査風景・測量風景
図版 5　Y－2号住居址全景・遺物出土状況
図版 6　同遺物出土状況
図版 7　Y－3号住居址遺物出土状況
図版 8　H－4号・H－5号・H－13号住居址全景
図版 9　H－6号住居址全景
図版10　H－7号・H－8号住居址全景
図版11　H－5号・H－7号住居址遺物出土状況
図版12　H－11号住居址・カマド全景
図版13　H－12号・H－15号住居址全景
図版14　H－18号住居全景・土拡検出状況
図版15　縄文原体の製作工程と横位回転(1)
図版16　縄文原体の製作工程と横位回転(2)
図版17　縄文式土器(1)
図版18　縄文式土器(2)
図版19　弥生式土器(1)
図版20　弥生式土器(2)
図版21　古墳時代の土器(1)
図版22　古墳時代の土器(2)
図版23　古墳時代の土器(3)
図版24　古墳時代の土器(4)
図版25　古墳・歴史時代の土器

第Ⅰ章　遺跡とその環境

1　遺跡の位置

田草川尻遺跡は、長野県飯山市大字蓮字北原地籍に所在する（第１図）。旧行政区画では下水内郡秋津村であり、昭和29年飯山市となっている。

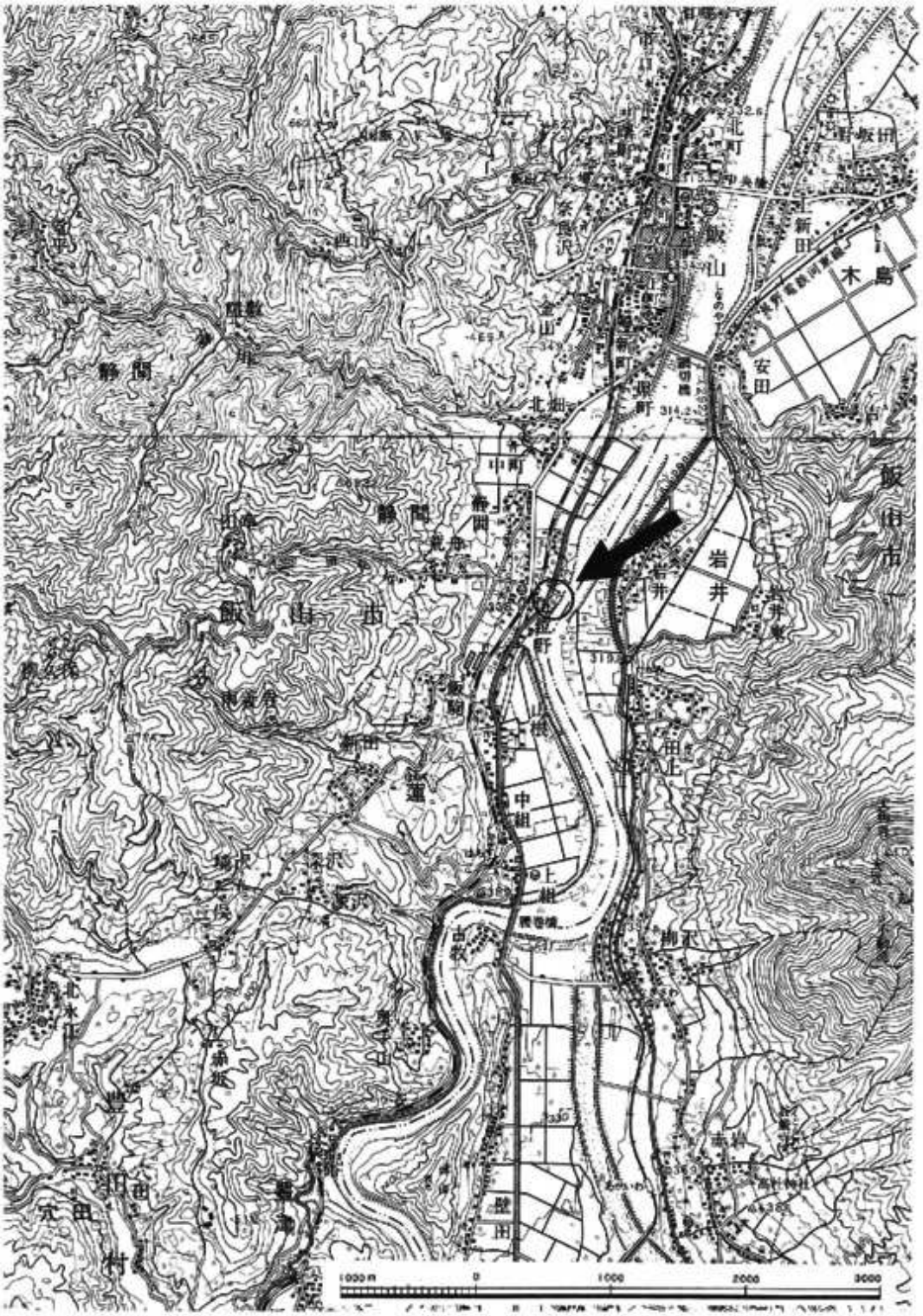
甲信国境に源を発する千曲川は、佐久、上田盆地を流下し、長野市川中島付近で犀川を合わせ肥沃な善光寺平を形成する。善光寺平東縁に至ると東側の長丘丘陵、西側の斑尾山麓の隆起地帯を穿入蛇行する。そして、中野市古牧地区の長丘丘陵北端に至ると再び流域を広げ信濃に最後の平を残す。これが飯山盆地である。飯山盆地を過ぎると信越国境の山岳地帯を再度穿入蛇行し越後へと流れ去る。

田草川尻遺跡は飯山盆地が展開する最初の地点に位置する。東側に高社山が聳えているために比較的狭長な沖積地を千曲川が流れ、善光寺平と飯山盆地との回廊口的な地点となっている。飯山盆地の西縁は上境～鬼坂断層線によって画されているために急傾斜をもって平地と接している。そのため山地から流出する河川は急流をなし、斜面の急な小扇状地を形成している。田草川尻遺跡の位置する秋津地区でも三つの扇状地が発達している。すなわち、清川、田草川、宮沢川による扇状地である。

田草川尻遺跡は、このうち田草川扇状地扇端部に位置する。南側は宮沢川の小扇状地と千曲川沖積地に接しており、北側は清川扇状地との間の低湿地帯に接している。また東側は千曲川が扇状地扇端部を抉るように（攻撃斜面）流れており、その比高差は現河床面より５ｍ前後である。比高差はあまりないけれども、千曲川氾濫に際しても対岸の中野市岩井地区が大きな低湿地帯を形成しているために遺跡地への冠水はなかったと考えられる。

田草川尻遺跡の範囲は、田草川扇状地扇端部全域と北側の低湿地帯、さらに清川扇状地南扇にまで及ぶものであろう。今回の調査区は、第１次調査区の東側で千曲川に面する地区である。北側は田草川が流れているが、流路が土木工事により一定するまでにはかなり変遷があったことがうかがえる。現河川北側地区の土層は１ｍ以上に及ぶ混礫黒色土層が堆積しており、氾濫原として考えられるところである。

なお、今回の調査区は30～50cmの腐植土の下は混礫ローム層（二次堆積）であった。遺構はこの層を掘り下げて構築される。



第１図　遺跡位置図（1：50000）

2　周辺遺跡

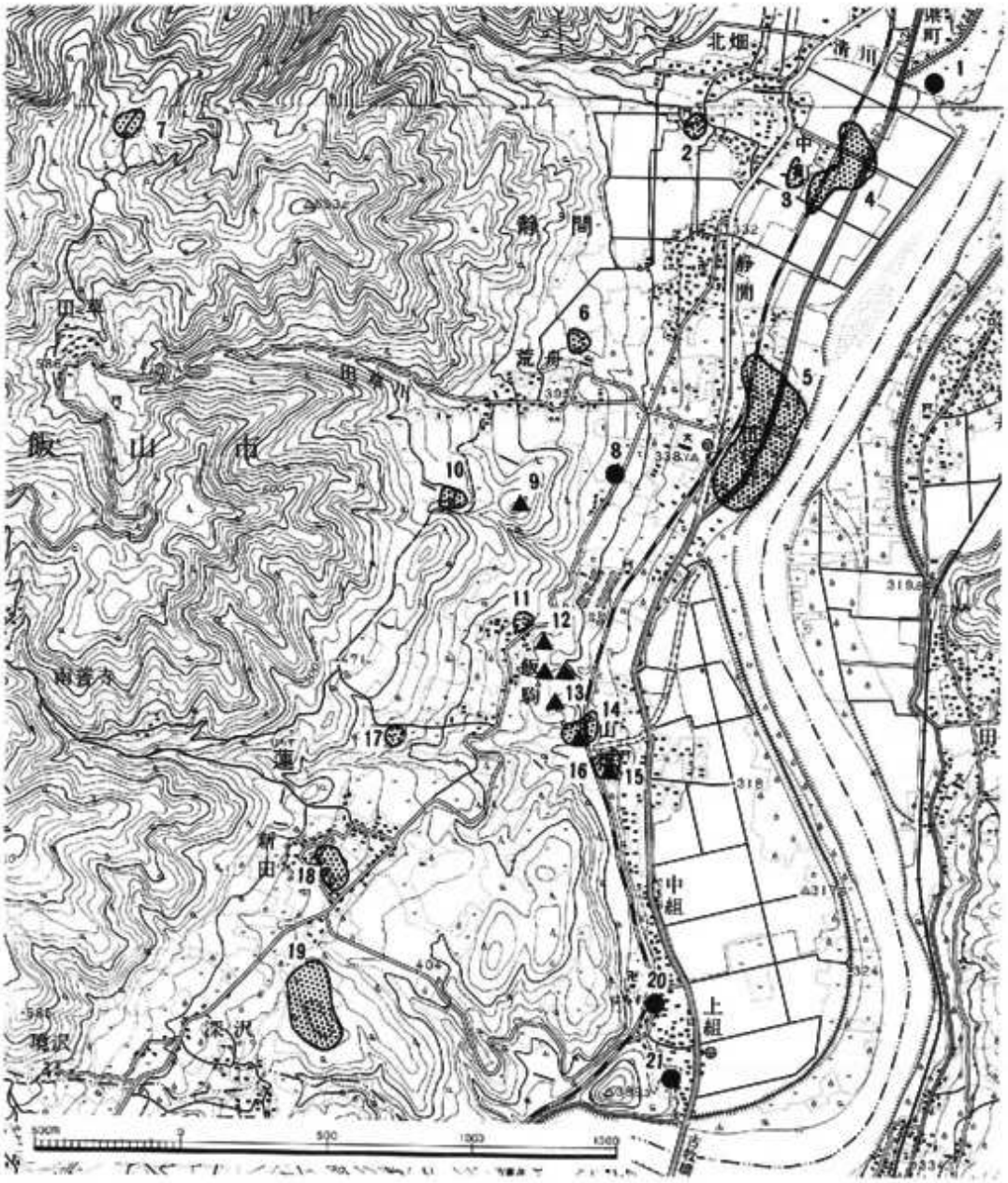
田草川尻遺跡が立地する田草川扇状地並びに北側の清川扇状地一帯にはすでに幾つかの遺跡が知られている（第２図）。

先土器時代の遺跡は現在までのところ発見されていない。

縄文時代に入ると各地でその痕跡が認められる。特に著名な遺跡としては、中期前葉～中葉に比定される土器群及び40数点の土偶が出土した深沢遺跡が挙げられる。また、晩期の山ノ神遺跡は田草川扇状地の扇頂部に立地している。昭和47年に緊急発掘調査が行なわれ、魚形線刻画を有する土器片をはじめとする佐野Ⅰ、Ⅱ式土器群が出土している。

弥生時代では田草川尻遺跡のほか、北畑、上組、静間神社境内の各遺跡より太型蛤刃石斧等が採集されているがもうひとつ判然としていない。弥生時代の立地性を考慮すれば、むしろ本地区において大集落を形成せしめるような好適地は田草川尻遺跡付近のみであったと考えた方が妥当であろう。古墳時代およびそれ以降についても、本遺跡を中心として（北側の中町遺跡も同様な規模を持つようであり）一大遺跡群として発展していったものと思われる。

なお、山間地においても小規模な遺跡が点在している。田草オヤチ、駒立等の遺跡であり、これら小規模遺跡についても注意されるところである。



第2図　周辺遺跡分布図（1：25000）

1．小屋解　2．静間神社南　3．京ノ町　4．中町　5．田草川尻　6．山ノ神　7．田草オヤチ　8．上伍位野　9．勧介山古墳　10．荒船　11．道源沢　12．道源沢古墳　13．五里久保古墳群　14．五里久保　15．山根　16．山根古墳　17．駒立　18．茂衛門新田　19．深沢　20．上組　21．蓮

第II章　調　査

1．発掘調査に至るまでの経過

昭和51年の秋、市内のA、Bの二つの企業が遺跡（田草川尻・清川尻）の所在地（117号線添）に工場用地造成のために農地を宅地に申請した。その際、市の担当課が同地が遺跡であるかどうかについて充分に教育委員会と話し合いを持たないまま手続きを済した。そのため、緊急に発掘調査を行なう必要に迫られたのである。以下発掘調査に至るまでの経過を日数を追って述ることにする。

12月1日　県文化課樋口指導主事が現場を視察し、視察後教育委員会事務局に於て経費等の見積りをしていただく。

12月14日　小林教育長、上松係長、本木県議が国庫補助の件について県知事に陳情。

2月28日　飯山市教育委員会は文化財専門委員会を開き、田草川尻・清川尻両遺跡発掘について協議した結果、4月中旬～5月初旬にかけて発掘を行なう事に決定。また、発掘調査事業は、飯山市田草川尻遺跡・清川尻遺跡調査会を結成し、調査会が事業主体となって行なうことに決定した。

3月20日　飯山市文化財専門委員が調査会結成準備委員となり、飯山市田草川尻遺跡・清川尻遺跡調査準備会を開き、会長に飯山市教育長が就任。その他調査会の規約、調査団員のメンバーの編成を協議する。調査団長に飯山北高教諭高橋桂氏、調査主任に松沢芳宏氏を決定。

4月1日　飯山市人事移動により、上松社会教育係長が同和教育係長に転任し、服部書記が総務課へ、新に青木（前議会事務局主査）が教育委員会に発令される。

4月7日　調査会役員会、同員合同会議開く。事務局より「飯山市田草川尻遺跡・清川尻遺跡調査規約」を説明する。協議に入り、結団式は4月14日市役所において行なう事に決定。発掘調査は4月15日～5月6日の間に行なう事を目標にするという事で合意する。

4月10日　高橋団長、松沢主任、金井・望月両調査員、関都市開発課長等の立ち合いのもとに㈱信濃測量社員4名が地形測量を行なう。

4月11日　高橋団長、望月調査員、事務局で発掘時の器材等の細部の打ち合わせを行なう。

4月12日～13日　発掘器材の準備。前係の服部書記も手伝う。

4月13日　団長、調査員立ち合いのもとに田草川尻遺跡のブルドーザ・・による表土剥ぎ。

4月14日　同じく清川尻遺跡の表土剝ぎ。両遺跡にそれぞれテント設営。発掘器材の運搬。午後2時より調査役員会を開き、最後の細部打ち合わせを行なう。3時より結団式。調査会役員と調査員代表の高橋団長が出席して、小林調査会長の音頭で明日からの発掘調査の万全を期して乾盃する。

飯山市田草川尻遺跡調査会（組織）

会長	小林忠一	飯山市教育委員会教育長
副会長	荒井博美	飯山市教育委員会教育次長
顧問	春日佳一	飯山市長
〃	上原信重	飯山市議会議長
〃	坪井宮永	飯山市公民館秋津分館長
理事	佐藤政男	飯山市文化財専門委員
	斉藤二六	〃
	弓削春穏	〃
	上原幸夫	〃
	高橋桂	〃
監事	宮沢忠志	飯山市収入役
〃	松沢定男	飯山市監査委員
事務局	青木剛	飯山市教育委員会社会教育係長
指導	丸山敏一郎	長野県文化課指導主事
	関孝一	〃
	桐原健	長野西高等学校教諭

調査団

団長	高橋桂	飯山北高等学校教諭
主任	松沢芳宏	日伸精機株式会社
調査員	大原正義	千葉県文化財センター
	金井正二	須坂市教育委員会
	太田文雄	国学院大学学生
	望月静雄	立正大学学生
	西沢隆治	立正大学学生

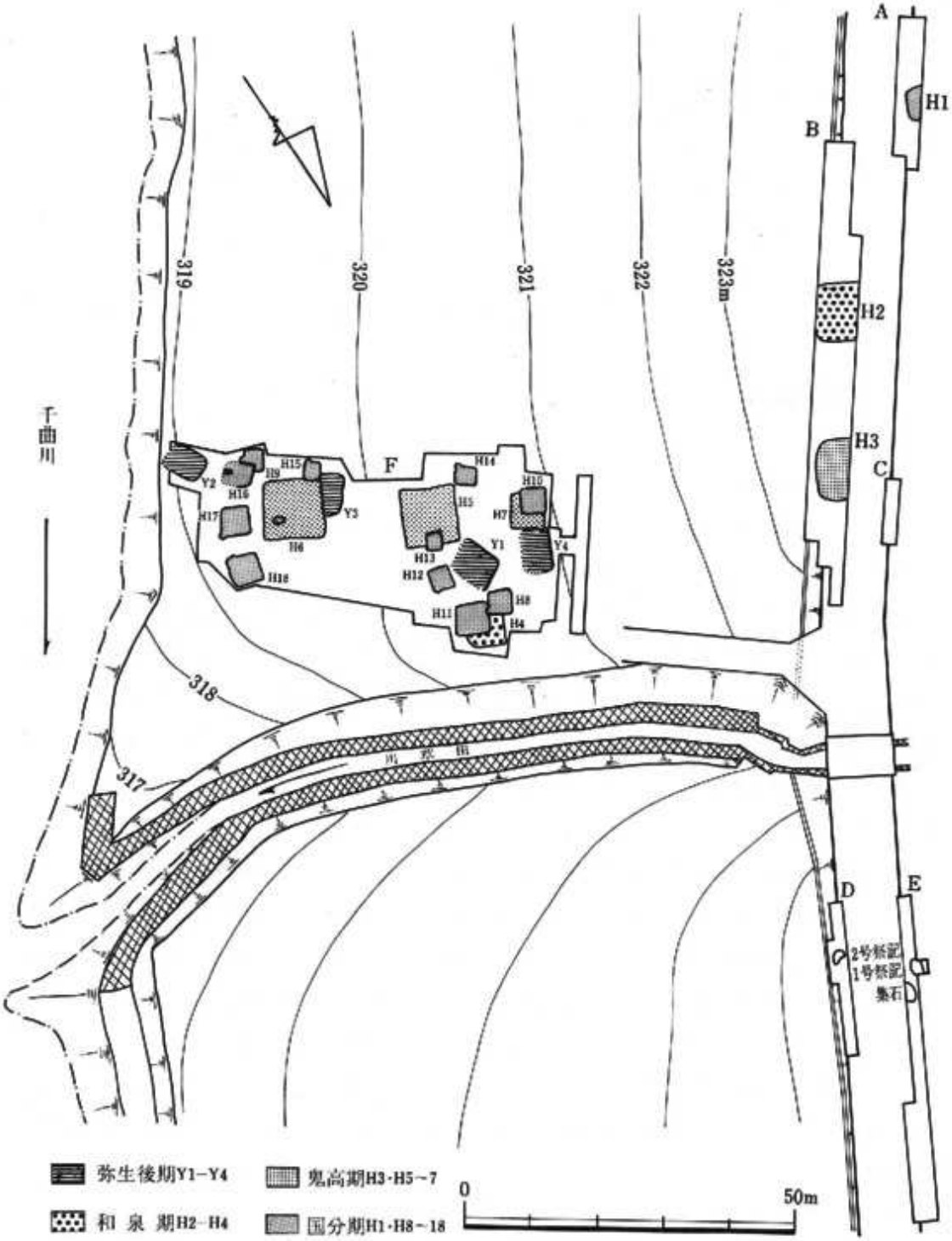
今井正文　立正大学学生
菊地　実　国学院大学学生
野沢則幸　立正大学学生
西井幸雄　立正大学学生
補助員　松沢伸一
調査協力者　中島庄一、熊川英子、黒沢晴美、広瀬昭弘
飯山南高等学校考古学クラブ

（飯山市教育委員会　社会教育係長　青木　剛）

2．調査経過

発掘調査は、昭和52年4月15日より開始した。約2,000m²の面積を全面発掘を目的としグリットを設定した。なお、14日において調査区東半分を表土が厚いため重機により除去している。このため便宜的に西側をA地区とし、東側をB地区と呼称した。

調査はA地区より着手した。当初より弥生後期、土師器の出土をみたが、縄文前期土器片も混在して出土した。不順な天候のため中断もあったが、19日までにはA地区の全体を遺構確認面まで掘り下げることが出来た。この結果、21日までに8軒の住居址が確認できた。Y－1・Y－3・H－7・H－8・H－10～13である。このうち、Y－4号址は上部における攪乱が著しく、床面より立ち上がりを追求する方法を採ったが、壁はほとんど不明確であった。22日より各住居址の掘り下げに入った。方法は、原則として十字にセクション帯を残してすべての遺物を図化・記録することとした。24日にはB地区に入り遺構検出作業にとりかかる。その結果、Y－3・H－6・H－15号址が確認される。特にY－3号址はH－6号址に切られているが壁が明確であり、遺物は床面直上の土器も多く遺存状態の最も良好な住居址であった。調査を進めて行くうちにA地区でさらに2軒（H－4・14）確認され、B地区でも4軒（H－9・16・17・18）新に確認されたため時間的にかなり急がされる。また5月6日になって、千曲川河岸に接っして弥生後期の土器片が出土したため拡張した。現千曲川の河岸にまでプランが続いており、千曲川によってかなり浸食されていることが証明された。この弥生期の住居址（Y－2）の調査に2日間かかり、8日に全体測量等を行ないようやく完了することができた。なお、最終日の8日、午後4時より現地説明会を行ない、地元民大勢が参加した。



A〜E区第1次調査(1972)　F区第2次調査(1977)

第3図　遺跡全体図（1/1000）

第Ⅲ章　遺構と遺物

田草川遺跡の今次調査によって検出された遺構、遺物は、縄文時代前期から歴史時代に至るものである。縄文時代においては、遺構は認められなかったが、前期前半を主体とする土器片が、弥生時代以降の住居址を中心として散在的に検出された。弥生時代の住居址は、4軒検出され、いずれも弥生時代後期に帰属する。古墳時代の住居址は、4軒検出され、和泉期1軒、鬼高期3軒である。歴史時代の住居址は11軒である。以下、各時代別に遺構・遺物について述べたい。

1．縄文時代の遺物

今回の調査では縄文時代の遺構がまったく検出されなかったこともあって、完形土器はなく、接合できるものもきわめて少なかった。そしてこれらの縄文式土器は弥生時代以降の遺構の覆土からも多く出土しており、2次的に移動したものが多いと思われる（恐らく田草川の氾濫によるものと思われる）。

このような状況であるので、地点別には分けないで、すべてを一括して扱うことにした。以下分類に従って説明する訳であるが、その前に本遺跡出土土器に使用されている縄文原体について若干触れておきたい。

(1)　縄文原体について

縄文式土器の縄目施文原体については、モースの大森貝塚発掘以来、多くの学者によりいろいろな説が出された。中でも、最も長期にわたり広範囲からの出土をみる単節斜縄文については、布や編物の圧痕であるとか、籠や袋のようなものの圧痕である等種々の説が出された。にもかかわらず、昭和初期までの半世紀間というもの説得力のある答えは出なかった。

そのような中で山内清男氏は大正12、3年頃から縄文式土器の縄文施文原体を解明すべく研究を行なっていたが、偶然昭和6年に斜縄文は縄を回転押捺したものであることを発見された。これにより、縄文式土器の文様は原体の回転によるものが多いことが判明した。こうして山内氏の文様施文原体の研究は急速に進み、多種多様な縄文式土器の文様は細かく分類され、現在も貴重な研究成果として参考に供されている。

さて縄文は縄文式土器の発生以来弥生式土器まで、7～8,000年もの長い間、その間に消長はあるものの、連綿として使われた文様である。しかもいろいろな変化のある原体が作り出され、世

界的にもまれにみる発展をとげた。特に縄文時代の前期前半の中部地方から東北地方にかけての地域で用いられた各種の縄文はまさに縄の手品を見ているようである。

以下に記す縄文原体についての説明は、多様な縄文原体のうち、今回出土した土器に施文されているもののみをとりあげた。

斜縄文（図版15、1）

一般的には縄文というとこの斜縄文をさす。単純に2段撚りしたものを横位あるいは縦位に回転押捺したものである。1つ1つの粒子には繊維の筋がみえる。

この斜縄文はもっとも広範囲で長期にわたって多用された。

ループ文（図版15、2）

ループ文は1段撚りの縄を半分に折って2段撚りにする際に、折る部分の末端に環を作ったものである。これを回転押捺すると蕨手状の文様が現われるのである。ループの部分のみ充填させるものや撚りの逆のものを交互に施文するもの等いろいろある。

このループ文は縄文時代前期前半、関東地方でいうと花積下層式に出現し、次の関山式において最も盛行した手法である。その分布は関東の関山式、中部山岳の神ノ木式を中心として、東北北部の円筒下層式まで広がった。しかし関山式以後はほとんど使われていない。

縄の束（図版15、3）

撚りが逆な1段撚りの2本の縄を両方共2つに折り、これを合わせて細い繊維で束ねた原体である。これを横位回転すると条が垂直に走る。縄の束には、合わせ方と数で5種類ほどある。

縄の束の文様は中部山岳の神ノ木式に発達し、東北地方の大木1式・室浜式まで広がった。

丸組紐（図版15、4）

丸組紐は0段か1段の縄を4本用い、2本づつ交互に編んだ原体である。これを横位回転すると条はわずかに斜行する。節は交互に入り組み八の字を描く。綱代の1段超え1段潜り1本送りと同じ文様を描く。

丸組紐は関東地方の関山式、中部山岳の神ノ木式を中心に、東北地方の一部に分布したのみであり、しかもこの縄文前期前半の一時期にだけ出現した文様である。

異条斜縄文（図版16、5）

異条斜縄文は1段あるいは2段の異なった縄（右撚りと左撚り）を撚り合わせた原体を横位回転したものである。この撚り合わせをすると、片方は撚りがほどけて2本の細縄となってからまり、もう片方はふつうに撚り合わさる。これを横位回転すると、節の大きい条と細い2本の条が交互に施文される。この異条斜縄文は撚り合わせ方から4種類あることがわかっているが、ここではもっとも基本的なものをあげた。

異条斜縄文はやはり関東地方の関山式及びその併行形式である中部山岳の神の木式を中心に発

達した。

附加条縄文（図版16、６）

附加条縄文は軸縄に他の細い縄を１本または２本からげたものである。これには軸の条の方向と同じ方向にからげるもの、また逆方向にからげるもの、あるいは両方向にからげるもの等がある。ここに紹介したのは、軸の条と逆方向にからげたものである。

この附加条縄文は関東・中部・東北の縄文前期前半（花積下層式～黒浜式併行）に出現した。

撚糸文（図版16、７～９）

撚糸文は竹管等の棒状のものに縄を巻き付け、それを回転押捺した文様である。これには単に１本の縄を巻き付けただけのもの（７）から木目状撚糸文（８）、網目状撚糸文（９）と呼んでいるもの等種類は多い。

撚糸文はその種類により異なるが、縄文時代早期から後期にかけて使われた。その中でも前期には、北陸地方から中部・東北地方にかけての地域で、木目状撚糸文・網目状撚糸文等複雑な原体が考案された。

以上が本遺跡から出土した縄文式土器に施文されている各種の縄文原体の製作工程と時代的・地域的特性についての説明である。以下に記す土器の分類はこの文様を中心に行なった。

(2)　土器の分類

①　前期前半の土器

第１類土器（第４図、図版17）

ａ種（１）

文様が縄文のみのものである。１片のみである。比較的薄いが繊維の混入量は多い。縄文は右撚りの単節斜縄文で、末端の変化はない。

ｂ種（２～10）

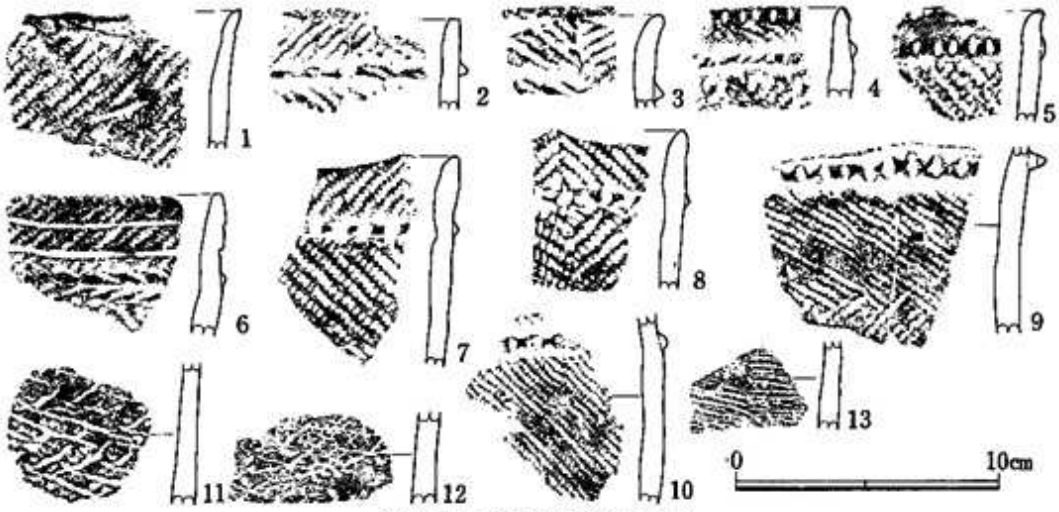
浮線文土器を一括した。器形はほとんどが深鉢形をとるものと思われる。口縁部は平縁のもの（２・４・６）と低い波状を呈するもの（３・５・７・８）とがある。器壁は概して薄いが、繊維が多く含有されている色調は暗褐色から黒色を呈する。

地文には器全面に縄文（羽状）を施文しているが、この縄文は浮線を貼付した後に施文されている。浮線は口縁部に水平に一条貼付されており、その上には必らず刻目を施こしている。刻目は斜めのもの（２～６、６）とほぼ垂直のもの（５、７～10）とがある。また口唇部にも刻目を有するもの（４～５）がある。２～３は口唇部に縄文を施こしている。６は口縁部に平行して沈線が２条横走している。

c種（11～13）

撚糸文土器を一括した。

破片が小さく、量的にも少ないために器形はわからない。胎土には繊維を含有するが、あまり多くはない。



第4図　縄文時代の遺物(1)

第2類土器（第5～7図、図版17・18）

a種（1～12）

縄文のみのものを一括した。

器形は平縁の深鉢形を呈するものと思われる。色調は暗茶色から黒色を呈する。繊維は多く含有しているものの、焼成・整形共に良好である。しかし中には内面が荒れているものもある。

1～4は口縁部である。2は口唇部にも縄文を施こし、3は若干無文帯を残している。4は口縁が強く外反している。

5～8は胴部である。5は多条縄文、7は縄文原体末端の結束圧痕、8は結節である。

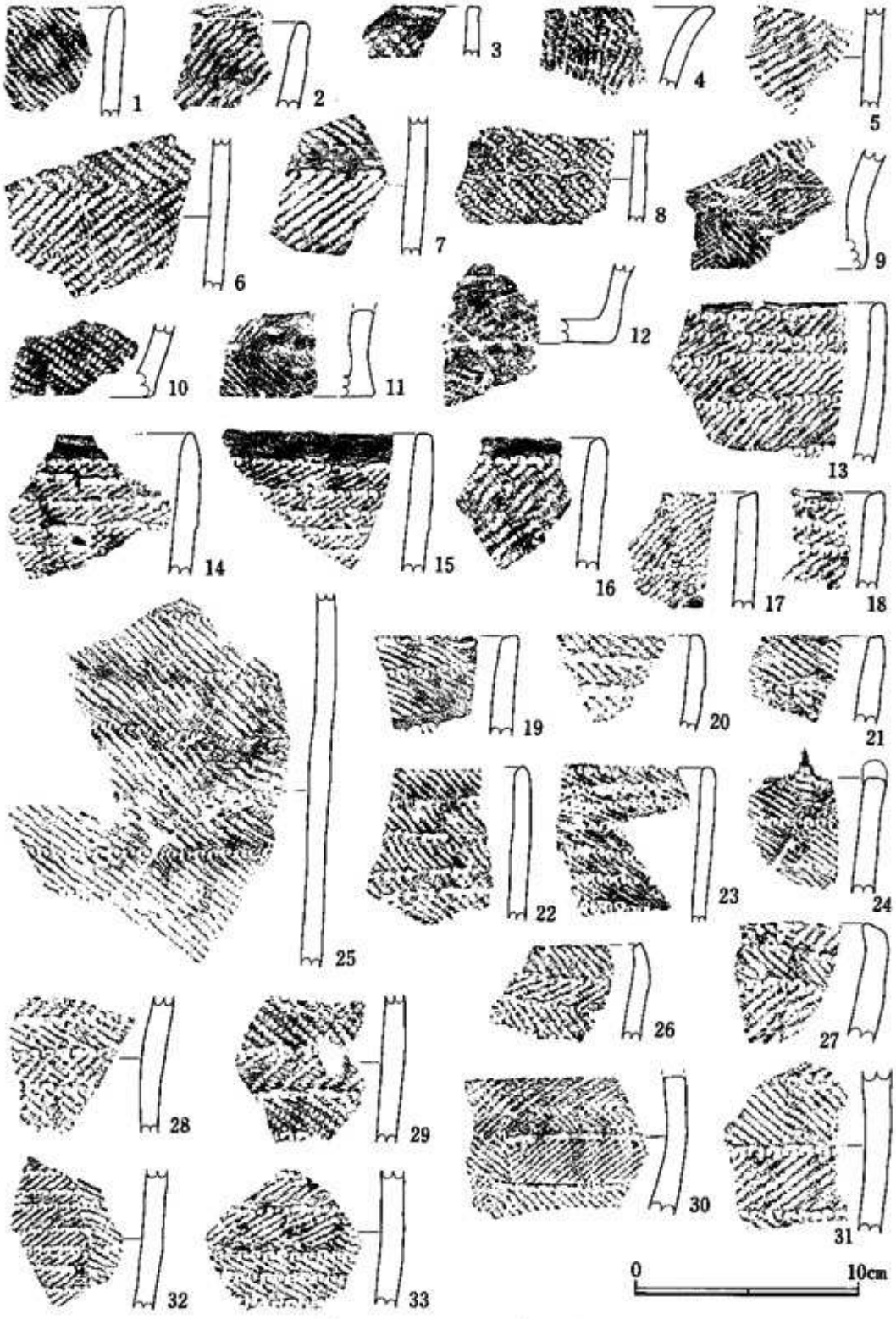
9～12はいずれも平底の底部片である。9・11は若干張り出し底である。12は底裏にも縄文が施文されている。

b種（13～33）

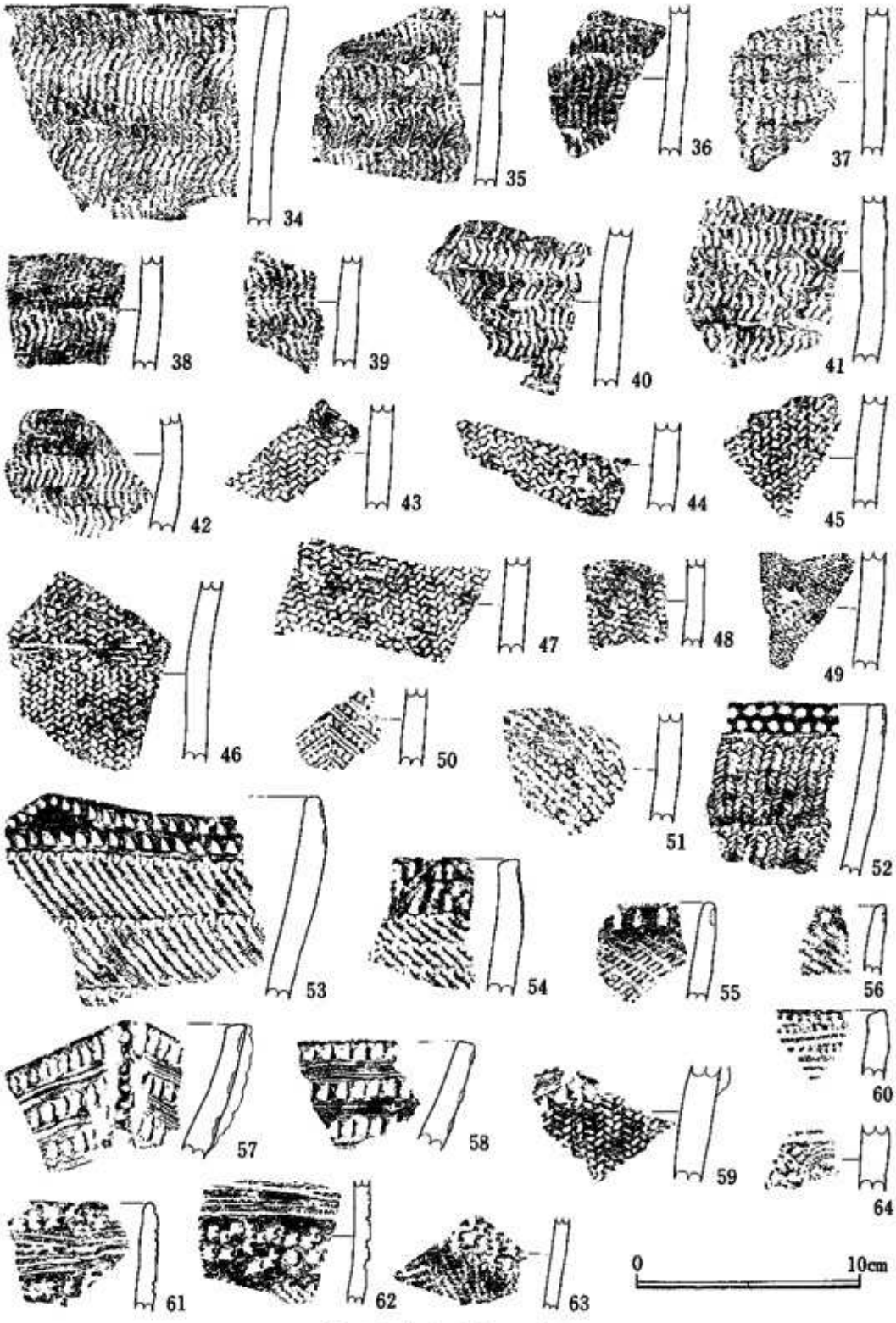
ループ文のものを一括した。

器形は単純な平縁の深鉢形がほとんどであるが、24のみは口唇部に突起が貼付されている。すべて胎土には繊維を含有しているが、含有量はそれほど多くはない。また焼成・整形は非常に良好である。色調は灰褐色あるいは褐色の明るいものから、黒色を呈するものまでさまざまである。

文様のループ文は器全面に間断なく施文されるものが多いが、14～16のごとく口縁部に無文帯を残すものもある。施文方法は左傾の縄文のみを層状に充填させるもの（13～18）と右傾の縄文



第５図　縄文時代の遺物(2)



第6図　縄文時代の遺物(3)

のみを同じく層状に充填させるもの(19～25)、および前2者を交互に施文して羽状縄文にするもの（26～31）とがある。また32のように横位区画をして、図のように左に左傾を使い右に右傾を使うもの、あるいは33のように縦位区画をして、図のように上に左傾を使い、下に右傾を使うものもある。

c種（34～42）

縄の束の文様のものを一括した。

器形は、口縁部が図示した1片のみで底部辺がないために確実なところは不明であるが、前の2種と同じく単純な平縁の深鉢形をとるものと思われる。本種土器は繊維の含有量がきわめて少なく、焼成・整形が非常によく堅致である。色調は茶色あるいは淡褐色を呈する。

文様である縄の束は前にも述べたように、一段撚りの撚りが逆な2本の縄を半分に折って合わせて4本にし、細い繊維で束ねて横位回転したものである。本種土器の文様はすべてこの手法である。原体の長さは2～4 cmで、開いた末端近くの1ヶ所をゆわえている。

本種土器は後述する刺突文土器の胴部になるものもあるようである。

d種（43～49）

丸組紐文のものを一括した。

口縁部片や底部片がないので詳しい器形はわからないが、深鉢形をとることは間違いなかろう。後述する波状口縁の深鉢形をとる刺突文土器の胴部になるものもある。

胎土には繊維を含有するが、それほど多くはなく、焼成・整形共によく堅致である。色調は茶色あるいは褐色を呈する。

縄文原体である丸組紐は0段の縄4本で編んだものである。これを横位回転すると、八の字を描いたようになる。49を除いてすべてこの手法である。なお49は1段の縄を使用しているが、他は全く同じである。

e種（50～51）

特殊な縄文を一括した。

50は異条斜縄文である。1片のみである。胎土中の繊維の含有量はあまり多くないが、ややもろい。

51は複節すなわち3段撚りの斜縄文である。色調は暗茶色を呈し、胎土には繊維を含んでいる。

f種（52～59）

刺突文土器を一括した。

器形は口縁部がやや外反する深鉢形であり、口縁は平縁のもの（52、54～55）と低い波状を呈するもの（53、57）がある。

本種土器は胎土・焼成・整形はきわめて良好で、繊維の含有量は少ない。

地文は多様で、縄の束（52）、ループ文（53・54・56）、附加条縄文（55）、組紐文（59）がある。

主文様である刺突文は円形のもの（52・56）、爪形文様のもの（53）、太い刷毛目状のもの（54・55，57～59）がある。この刺突文の文様帯は比較的狭く、刺突文を1～3条繞らせているのみである。57～59は同一個体で、刺突文と同一原体で刷毛目文を描いている。なお57・59の口縁波頂部には隆帯が垂直に貼付されており、その上には刻目が施こされている。

g種（60～63）

爪形文土器を一括した。

いずれも平行沈線文が併用されている。

60は胎土・焼成・整形がきわめて良く、繊維の含有量は少ない。文様は爪形文と平行沈線文が交互に施文されている。

61～63は同一個体である。器形は口縁部がほぼ垂直に立ち上る平縁の深鉢形と思われる。整形はやや不良で、繊維を含有する。

口縁部文様帯は上下に2条づつの爪形文をめぐらし、その爪形文帯間に平行沈線を2条横走させている。胴部は羽状縄文である。

h種（64）

平行沈線文土器で、図示した1片のみである。胎土には砂を多く含み、繊維の混入量も多いのでもろい。

文様は、地文は縄文でその上に平行沈線で円が2つ描かれている。

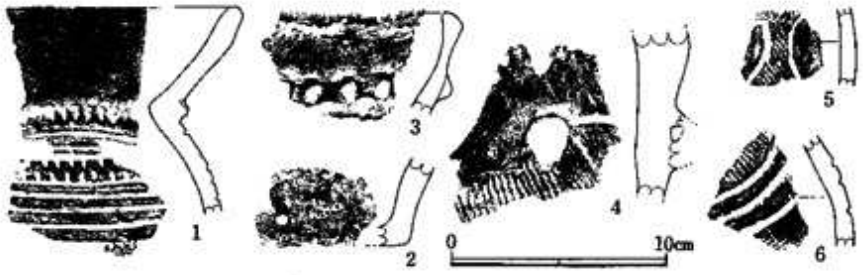
② 中期以降の土器

中期の土器（第7図1～4、図版18）

1・2は同一個体である。この他にも同じ個体の土器がまとまって出土した。これは胴部が円く張り口縁部が強く外反する深鉢形である。色調は茶色を呈し、胎土には砂を多く含みややもろい。整形は良好。口縁部は無文頸部に隆帯がめぐる。頸部以下は刺突文と沈線文である。3は口縁部に隆帯を一条めぐらせ、その上に指頭圧痕文を施す。4は口縁部に付く把手である。

後期の土器（第7図5～6、図版18）

図示した2片のみで、いずれも磨消縄文土器の胴部である。胎土・焼成・整形は良好である。

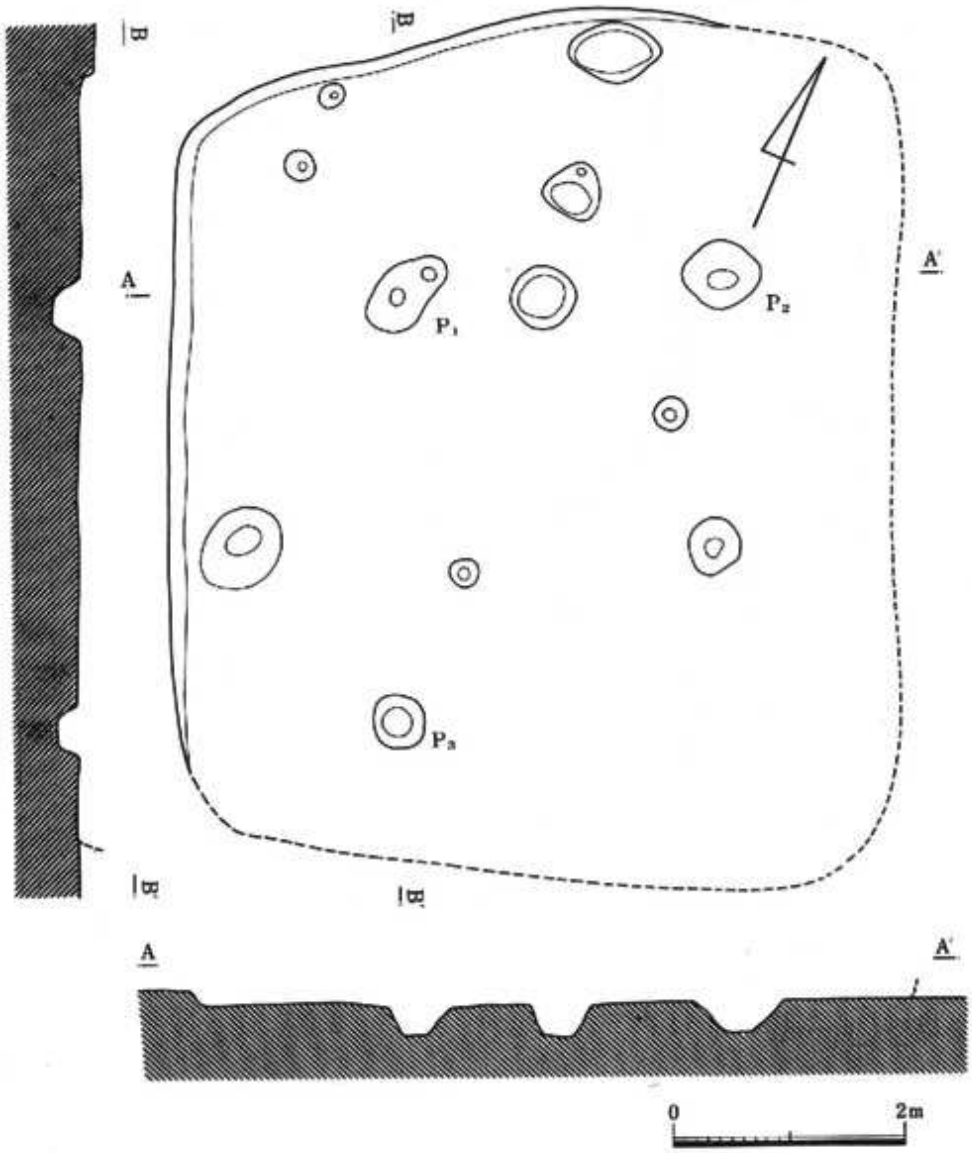


第7図　縄文時代の遺物(4)

2．弥生時代の遺構と遺物

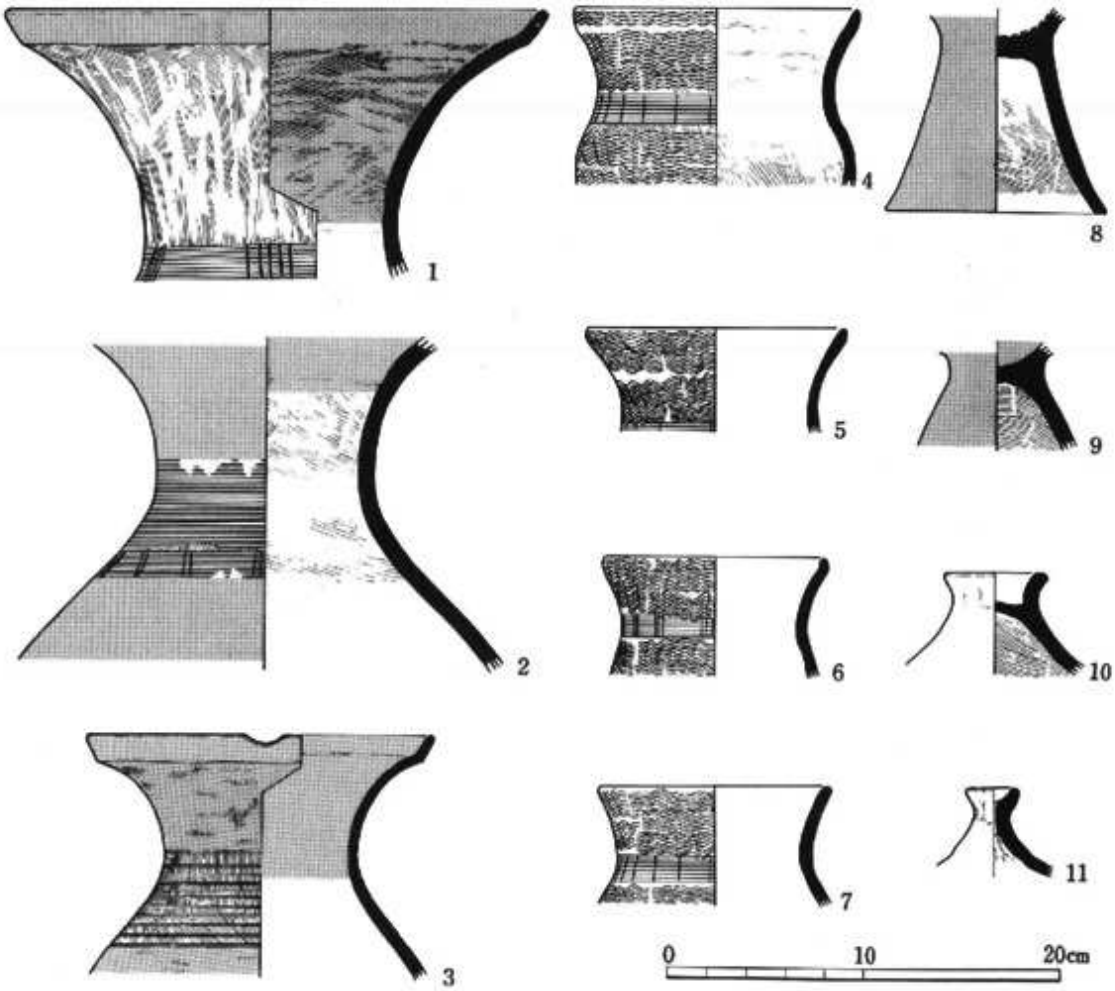
弥生時代の遺構としては、住居址4軒が調査範囲に散在的に検出された。遺存状態は、いずれも不良であり、遺物を投棄されたものが主体で、弥生時代後期の資料である。

Y-1号住居址（第8・9図）



第8図　Y－1号住居址実測図（1/60）

調査範囲の北部中央に検出された。遺存状態は不良であり、北壁および西壁は確認されたが、東壁および南壁は確認できなかった。軸長は推定6.6×5.4 mを測り、プランは隅丸長方形を呈するものと推測される。壁高は西壁の最もしっかりした部分で15 cm前後を測る。主柱穴は、(P_1(径80×48 cm・深さ25 cm)・P_2(径72×60 cm・深さ29 cm)・P_3(径48×50 cm・深さ17 cm)が検出された。炉址は検出されなかった。遺物は、多量の礫とともに混在する状態で検出された。



第9図　Y－1号住居址出土遺物

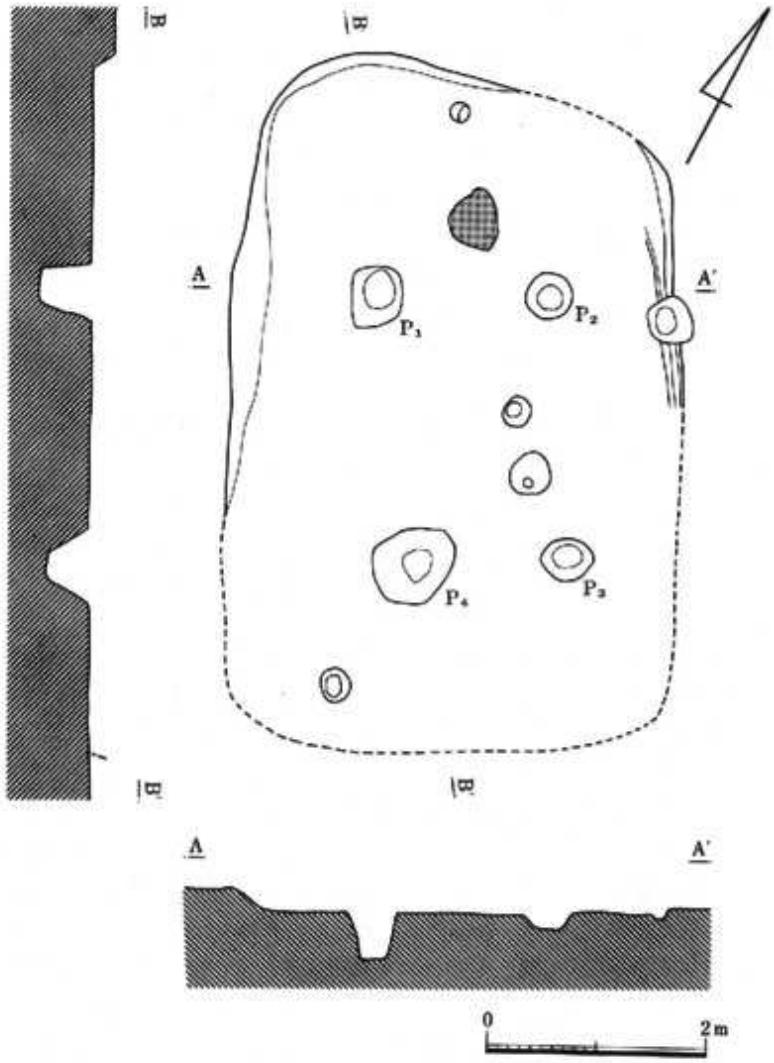
Y-1号住居址出土遺物

1	壺	①. 口縁部全周。口縁部径29.6 cm、頸部径13.0 cm、残存高14.0 cm。　②. 大形な壺である。大きく開口して翼状を呈す口縁はスムーズに収約して頸部に至る。　③. 器表面は刷毛目調整ののち頸部に櫛描直線文を回周し、同部には5ヶ所に5条刻みの篦切T字文を施こす。口縁から頸部にかけては粗いミガキを加える。器内面は刷毛目調整ののち粗いミガキ。翼状口縁帯はヨコナデ。器表面の翼状口縁帯及び口縁内面は赤色塗彩される。

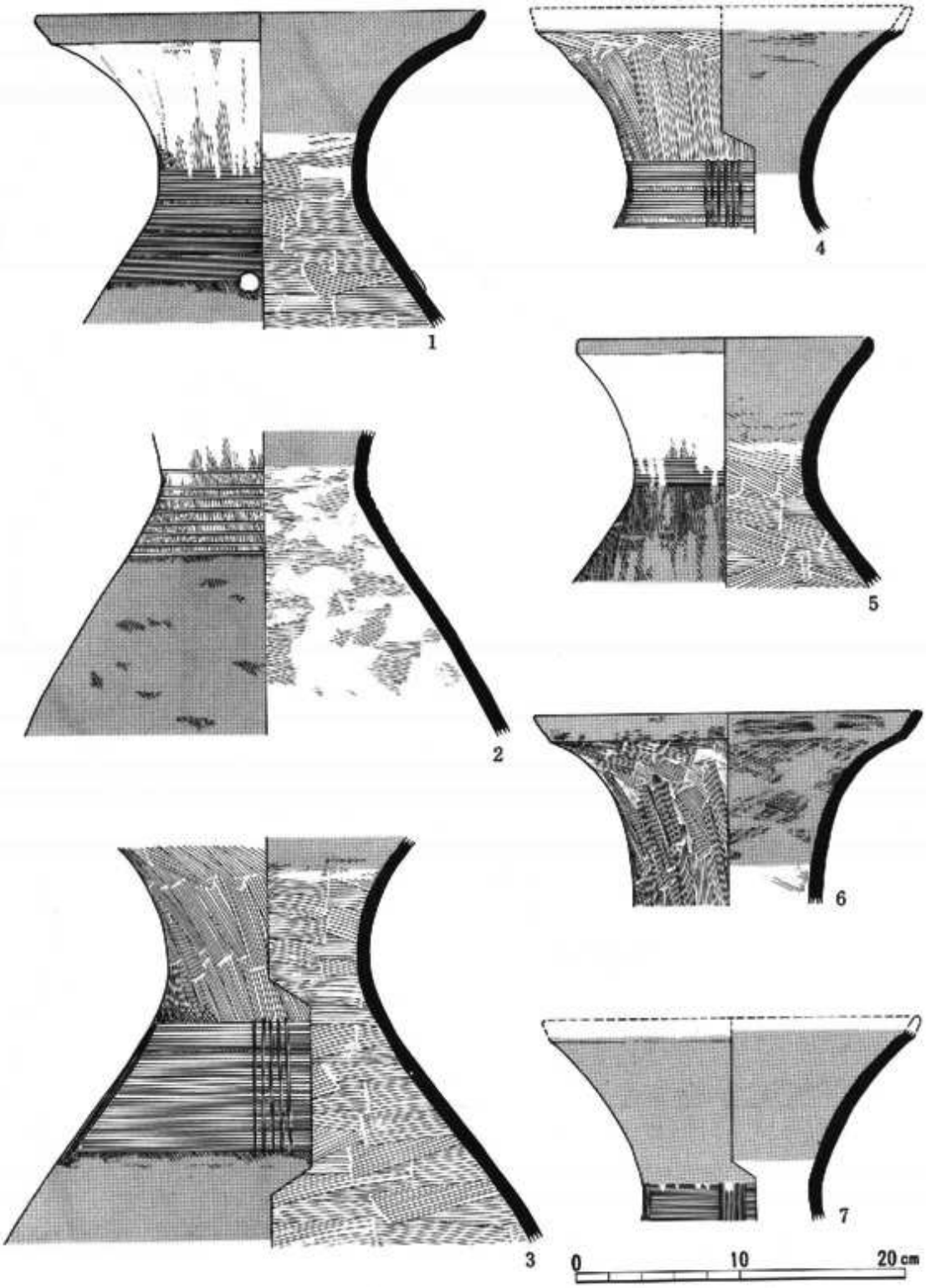
2	壺	①. 胴上位から口縁2/3周。頸部径11.1 cm、残存高16.8 cm。 ②. 大きく開口する口縁は頸部で若干筒状を呈し、強く弯曲して胴部へ移行する。胴部はかなり肩に張りをもたせているようである。 ③. 器表面は頸部に3条の櫛描直線文を回周し、さらに1条2回刻みの簾状文を施こす。簾状文を施こすために櫛描直線文下位を刷毛目の再調整を加えている。口縁、胴部はミガキを加える。器内面は刷毛目調整ののちに口縁にミガキを加える。器表面の口縁、胴部及び口縁内面に赤色塗彩される。
3	壺	①. 口縁から胴上半2/3周。口縁部径17.6 cm、頸部径9.8 cm、残存高12.4 cm。 ②. やや小形な優美な壺。翼状を呈す口縁はスムーズなカーブを描いて頸部に収約し、しだいに開いて丸味のある胴上部へ移行する。 ③. 器表面は刷毛調整ののち頸部に11条の細沈線を横走する。口縁、胴部にはミガキを加えるが、頸部の文様帯内には刷毛目が残る。器内面はナデののち口縁をミガキ。器表面の口縁、胴部、口縁内面には赤色塗彩を施こす。口縁の一カ所に片口状の削り出しが焼成後加えられる。 ④. 焼成、胎土とも良好で器壁はうすい。胴部内面に剥落が認められる。Y-2号住居址出土の口縁部破片が接合。
4	甕	①. 胴上半1/2周。口縁部径14.6 cm、頸部径12.0 cm、胴最大径14.2 cm、残存高9.0 cm。 ②. 若干内弯気味に立ち上る口縁はゆるやかなカーブを描いて頸部に収約し、やや肩の張る胴上半へと移行する。 ③. 器表面は刷毛目調整ののち頸部に1条連続の簾状文を回周する。口縁から胴部にかけては比較的整った波状文を充塡している。器内面は刷毛目調整ののち口縁にミガキを加える。
5	甕	①. 口縁部1/4周。口縁部径13.2 cm、頸部径9.8 cm、残存高5.3 cm。 ②. 大きく外弯する口縁形態を示す。 ③. 器表面は1条1回刻みの簾状文を頸部に回周し、口縁に波状文を施こす。器内面はナデ。
6	甕	①. 胴上半1/2周。口縁部径11,4 cm、頸部径9.3 cm、残存高6.1 cm。 ②. 若干内弯気味に立ち上る口縁は頸部で屈曲しゆるやかなカーブを描いて胴上半へ移行する。 ③. 器表面は頸部に1条3回刻みの簾状文を回周し、口縁から胴部にやや乱れた波状文を充塡する。器内面は丁寧なミガキを加え光沢を見せる。
7	甕	①. 胴上半1/3周。口縁部径11.9 cm、頸部径9.8 cm、残存高6.1 cm。 ②. 外反する口縁は頸部で屈曲して胴部へ移行する。 ③. 器表面は頸部に1条連続の簾状文を回周し、口縁、胴部には重なり合う波状文を充塡する。器内面は丁寧なミガキを加え光沢を見せている。
8	高坏	①. 脚部2/3周。接合部径5.6 cm、脚縁部径11.3 cm、残存高10.3 cm。 ②. 「ハ」の字状に開口する丈の割に径の広い脚。 ③. 器表面は丁寧なミガキ。器内面は刷毛目調整、縁部はヨコナデ。器表面は赤色塗彩される。 ④. 接合部は坏部がそのまま破損しており、脚の天井部に坏をのせる成形方法がとられていることをうかがえる。
9	高坏	①. 接合部全周。接合部径4.7 cm、残存高5.4 cm。 ②. ややふくらみのある脚形態を示す。 ③. 器表面及び坏内面はミガキを加え赤色塗彩される。脚内面は刷毛目調整。
10	蓋	①. つまみ部全周。つまみ部径6.3 cm、残存高5.3 cm。 ②. 短かく外弯するつまみが笠状の体部に付す。 ③. 器表面は指頭によるナデ。つまみ部内表面に指頭圧痕を残す。内面は刷毛目調整。 ④. 器内面に多量の煤が付着、特につまみ部は黒光りする。
11	蓋	①. つまみ部から体上部全周。つまみ部径2.8 cm、残存高4.6 cm。 ②. 若干内弯気味に開くつまみが大きく開口する体部に付す。 ③. 手づくねによる成形。体部内面にしぼり目痕を残す。天井部に焼成前1孔穿たれる。 ④. つまみ端部に焼成時のひび割れが見られる。

Y－2号住居址（第10～14図）

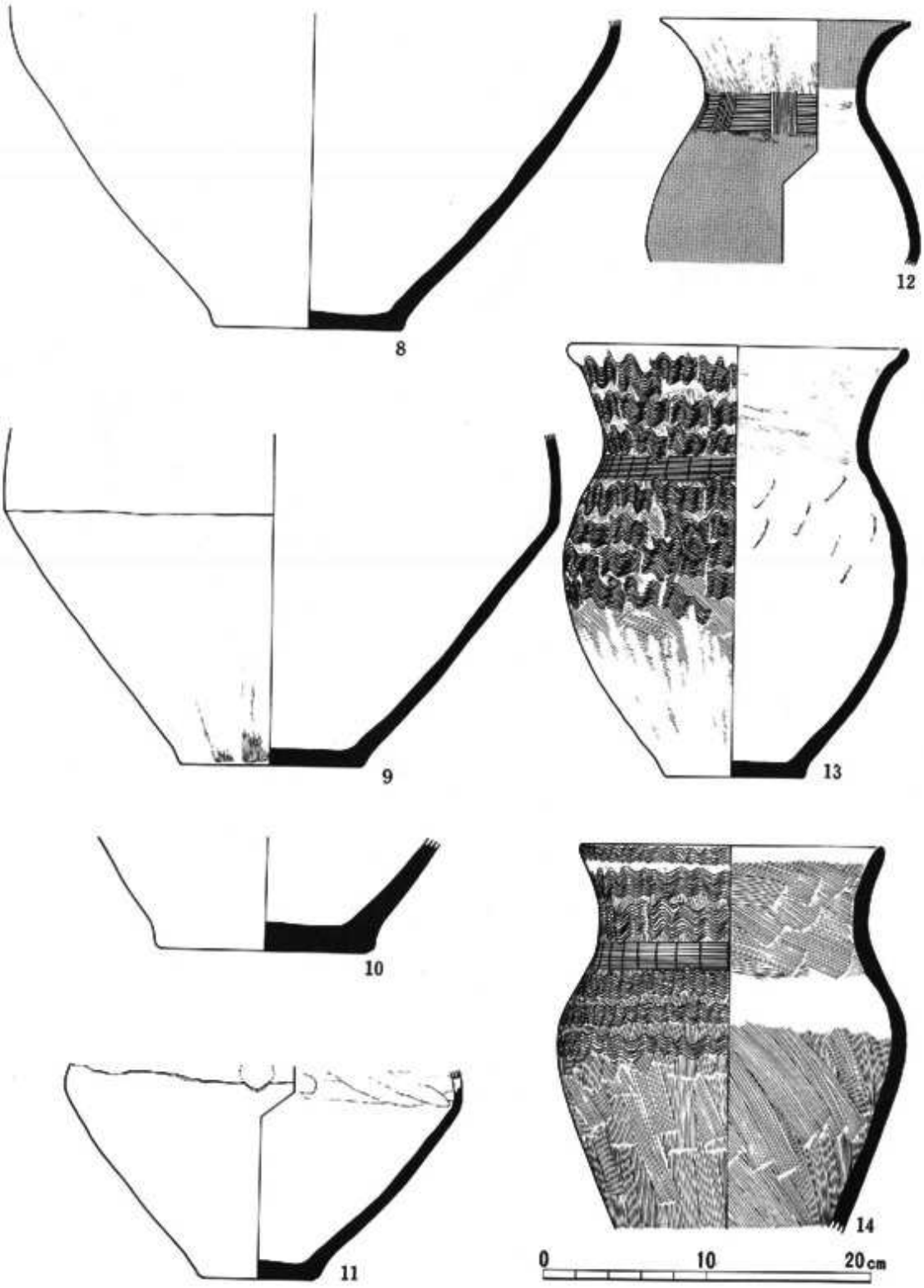
調査範囲の南端、千曲川の崖線際に検出された。南側は、千曲川の崖線に近く、若干の傾斜を認める地点に位置するため壁も確認できなかった。軸長は推定6.0×4.1mを測り、プランはやや縦長の隅丸長方形を呈するものと推測される。壁高は西壁で約20cmを測り、東壁の確認できる部分には壁溝が認められる。主柱穴は、P_1（径56×48cm、深さ39cm）・P_2（径44×43cm・深さ8cm）・P_3（径48×40cm・深さ41cm）・P_4（径80×64cm・深さ20cm）が認められた。炉址は、長軸上のP_1とP_2を結ぶ線より北に位置する。遺物は、礫と混在し、多くは床面から浮いた状態で検出され、住居址廃絶後投棄されたものと思われる。



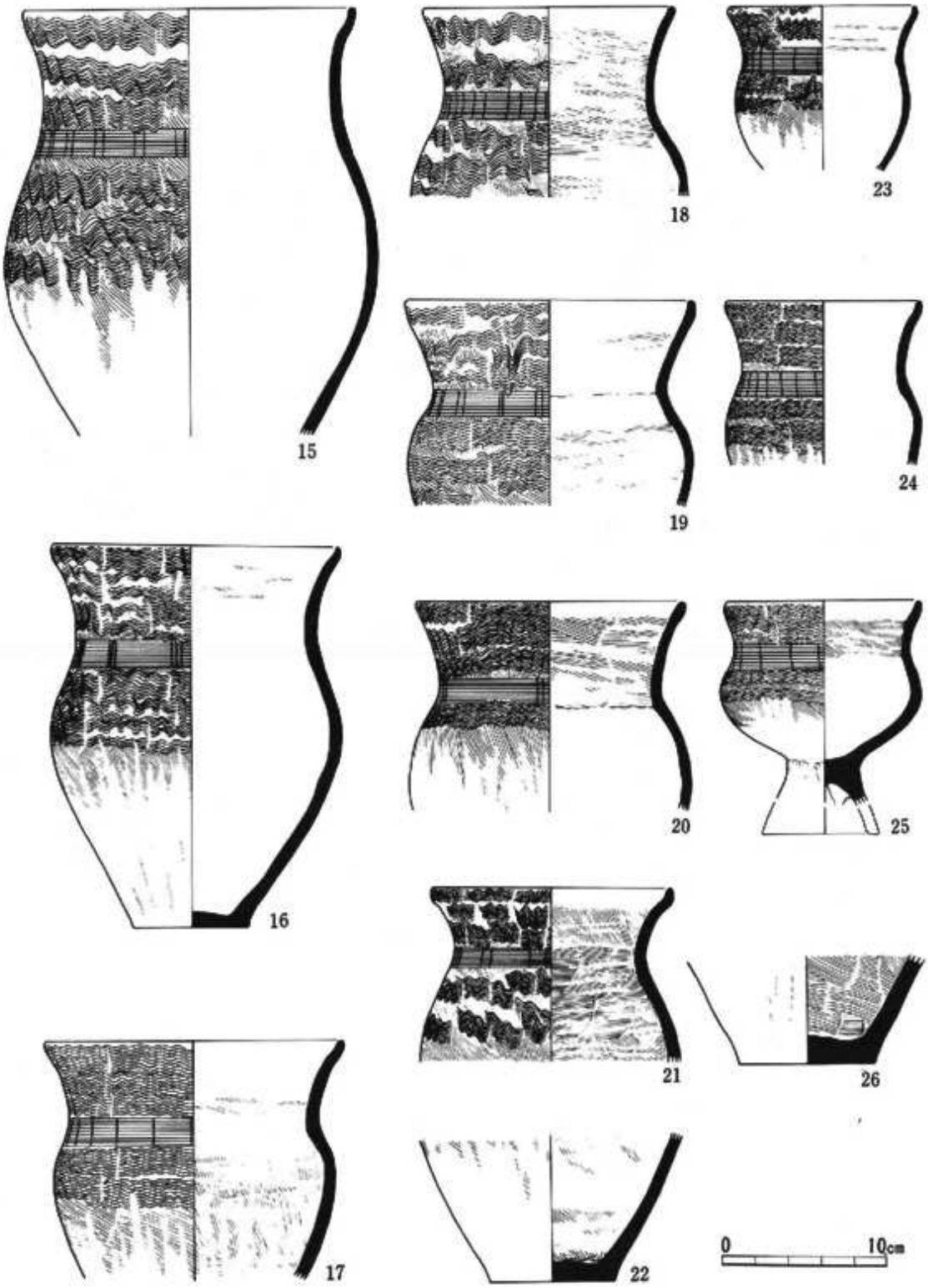
第10図　Y－2号住居址実測図（1/40）



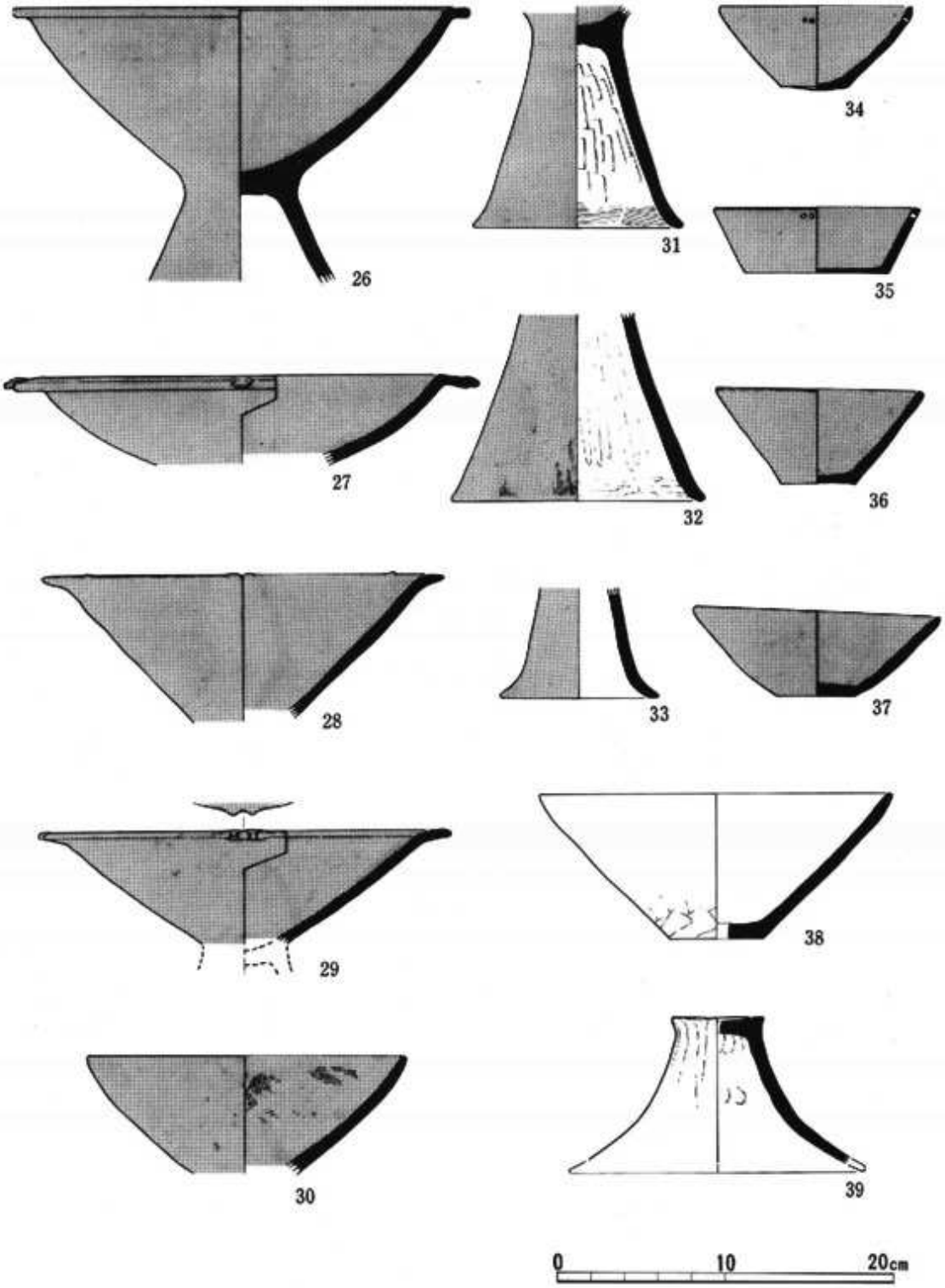
第11図　Y－2号住居址出土遺物(1)



第12図　Y－2号住居址出土遺物(2)



第13図　Y－2号住居址出土遺物(3)



第14図　Y－2号住居址出土遺物(4)

Y－2号住居址出土遺物

1	壺	①. 口縁部から胴上半全周。口縁部径 27.3 cm、頸部径 12.5 cm、残存高 19.1 cm。 ②. 翼状を呈す口縁は鋭を有してゆるやかなカーブを描いて頸部に収約する。胴部へはスムーズに移行し肩の張りは見られない。大形な壺である。 ③. 器表面は刷毛目調整ののち頸部に4条の櫛描直線文を回周し、その下端にボタン状貼付文が1ケ付される。文様帯以下は丹念なミガキ、以上は粗雑なミガキが加えられる。翼状口縁帯及び胴部は赤色塗彩される。器内面は刷毛目調整ののち口縁部にミガキを加え赤色塗彩を施す。
2	壺	①. 頸部から胴上半 1/4 周。頸部径 12.5 cm、残存高 19.0 cm。 ②. 頸部から直線的な胴部へ移行。肩の張りはまったくない。 ③. 器表面は刷毛目調整ののち頸部に篦状工具による8条の平行直線文を回周する。文様帯以外はミガキを加える。ただ、直線文間には刷毛目が残る。器内面は刷毛目調整ののち口縁部にミガキを加え赤色塗彩している。 ④. 器内面の剝落が激しい。
3	壺	①. 頸部から胴上半全周。頸部径 12.3 cm、残存高 25.0 cm。 ②. 強く収約した頸部からスムーズなカーブを描いて胴部に移行する。肩に張りをもたないが胴のふくらみは大きい。 ③. 器表面は刷毛目調整されたのち頸部に5条の櫛描直線文を回周し、4ケ所に篦切T字文を施す。さらに篦切T字文間の一ケ所に5山の細沈線による三角形連続文を描き、その中を格子目状に細沈線を充塡している。頸部は刷毛目をそのまま残すが、胴部は丁寧にミガキを加え赤色塗彩している。器内面は刷毛目調整ののち口縁部にミガキを加え赤色塗彩する。
4	壺	①. 口縁部から頸部全周。ただし口縁端部を欠く。口縁部径 24.4 cm(推定)、頸部径 11.4 cm、残存高 12.4 cm。 ②. 翼状口縁を呈し、ゆるいカーブを描いて頸部に収約する。 ③. 器表面は刷毛目調整され、頸部に櫛描直線文と4ケ所に篦切T字文を施す。刷毛目はそのまま残る。翼状口縁帯はヨコナデされ赤色塗彩を施こす。器内面は口縁部にミガキを加え赤色塗彩している。 ④. 器面の風化が激しく、特に内面は赤色塗彩した箇所以外はすべて剝落している。
5	壺	①. 口縁部から胴上半全周。口縁部径 18.0 cm、頸部径 11.0 cm、残存高 15.2 cm。 ②. 口縁部は比較的短かく外反し、翼状口縁を意識した巾の狭い面を作出する。頸部で強く収約、屈曲して胴部に移行する。 ③. 器表面は刷毛目調整ののち頸部に1条の櫛描直線文を回周する。口縁部は比較的きれいなミガキを加えるが、胴部のミガキは粗雑である。翼状口縁帯はヨコナデされ赤色塗彩を加える。また胴部も赤色塗彩している。器内面は刷毛目調整ののち口縁部にミガキを加え赤色塗彩している。
6	壺	①. 口縁部から頸部まで全周。口縁部径 23.6 cm、口頸部径 11.4 cm、残存高 11.8 cm。 ②. 翼状口縁を呈し、頸部はやや長頸気味となる。 ③. 器長面は刷毛目調整が緻密に行なわれる。文様は見られない。翼状口縁帯はヨコナデされ赤色塗彩する。器内面は刷毛目調整ののち口縁部に粗雑なミガキを加え赤色塗彩している。
7	壺	①. 口縁部から頸部 1/4 周。ただし、口縁端部は欠く。口縁部径 23.0 cm(推定)、頸部径 10.8 cm、残存高 11.5 cm。 ②. 大きく外反する口縁で、翼状口縁を呈す。頸部への収約、胴部への屈曲は強い。 ③. 器表面は頸部に櫛描直線文をめぐらせ4ケ所に櫛描T字文を施こす。器面は丁寧なミガキを加え赤色塗彩する。器内面は口縁部にミガキ、赤色塗彩で仕上げている。 ④. 器内面は剝落がかなり激しい。
8	壺	①. 胴下半 1/2 周。胴最大径 37.3 cm、底部径 11.0 cm、残存 19.5 cm。 ②. 大形壺の胴下半である。底部から若干丸味を帯びて胴屈曲部に移行する。屈曲部から底部まで比

		較的深くやや腰高な形態であろうか。 ③. 器表面は丁寧なミガキ。器内面は不明。 ④. 器内面全体が剥落しており観察不可能。焼成、胎土、器面の状況から7と同一個体と考えられる。
9	壺	①. 胴下半全周。胴最大径33.9 cm、底部径11.4 cm、残存高20.3 cm。 ②. 大形壺の胴下半である。底部から屈曲部（胴中位）までは直線的に大きく開く。屈曲部で陵を作出する。 ③. 器表面は刷毛目調整ののち屈曲部以下に縦方向の、屈曲部以上には横方向の丁寧なミガキが見られる。器内面はナデにより仕上げる。 ④. 焼成、胎土とも良好。
10	壺	①. 底部全周。底部径13.4 cm、残存高6.9 cm。 ②. 大形壺の底部。比較的大きな底部から直線的に胴へ移行する。 ③. 器表面にはミガキ、器内面はナデにより仕上げる。
11	壺	①. 胴下半全周。胴最大径24. 2 cm、底部径6.6 cm、残存高13.8 cm。 ②. 8から10よりも小形な壺である。底部からやや丸味をもって胴部へ移行し強く屈曲して胴上部へと向かう。最大径は屈曲部にある。 ③. 器表面は丁寧なミガキ。器内面はナデ調整。特に疑口縁により成形する屈曲部ではナデ痕が強く残る。 ④. 屈曲部に焼成後2 cm程の円孔を穿った可能性の強い痕跡が認められる。
12	壺	①. 胴上半3/4周。口縁部径15.3 cm、頸部径9.8 cm、胴最大径16.7 cm、残存高15.0 cm。 ②. 小形な壺である。大きく外反する口縁部は頸部で収約し、屈曲してやや丸味を帯びた胴部へ移行する。胴部径に比し頸部の径は比較的大きい。 ③. 器表面は刷毛目調整ののち頸部に2条の櫛描直線文を回周し、8単位の櫛描T字文を施す。口縁部は縦位、胴部は横位のミガキを加え、胴部に赤色塗彩する。器内面は頸部にわずかな刷毛痕を残す他は胴部をナデ、口縁部にはミガキ、赤色塗彩を行なう。 ④. 器表面の胴中位、頸部の一部に煤が付着する。器内面は剥落が激しい。
13	甕	①. 完形。口縁部径20.8 cm、頸部径16.1 cm、胴最大径20.8 cm、底部径8.4 cm、器高26.5 cm。 ②. 内弯気味に立ち上る口縁はゆるく頸部に収約し、屈曲して丸味のある胴部に移行する。胴最大径は中位よりやや上方あり、スムーズなカーブを描きながら底部に収束する。 ③. 器表面は刷毛目調整ののち頸部に1条の連続した簾状文を回周する。口縁部から胴中位にかけては3山ほどの短かい不規則な櫛描波状文を連続して施こす。波形は右下から左上に向かって躍ね上るように描かれている。胴下半はミガキを加える。器内面は胴部をナデ、下半部はさらにミガキを加える。口縁部は刷毛目調整ののちミガキ。 ④. 胴下半は二次焼成を受ける。器表面の胴上半、器内面の胴下半には煤の付着が認められる。
14	甕	①. 胴下部を欠く。口縁部径18.6 cm、頸部径16.4 cm、胴最大径21.3 cm、残存高23. 6 cm。 ②. 外反する口縁はゆるいカーブを描いて頸部から胴部へ移行し、やや肩に張りをもたせた胴部は直線的に底部へ収束していく。 ③. 器表面は刷毛目調整ののち頸部に連続した1条の簾状文を回周する。口縁部に3条、胴上半部に3条の波状文を一気に施こす。波状文の重なり合いはない。また胴下半にミガキを加えず。刷毛目痕を明瞭に残す。器内面は刷毛目調整されるが、肩部にはナデを加えている。口縁部はヨコナデされる。 ④. 器表面の口縁部から胴中位にかけて煤の付着が認められる。
15	甕	①. 胴下部を欠く。口縁部径20.2 cm、頸部径18.1 cm、胴最大径22.6 cm、残存高26. 1 cm。 ②. 口縁部は内弯気味に立ち上り、ゆるやかなカーブで頸部に至り丸味の強い胴部へ移行する。胴最大径は中位よりやや上方にありスムーズなカーブを描いて底部に収束していく。 ③. 器表面は刷毛目調整ののち頸部に1条2回刻みの簾状文を回周する。口縁部及び胴上半部には若干重なりをみせる波状文を施こす。胴下半にはミガキを

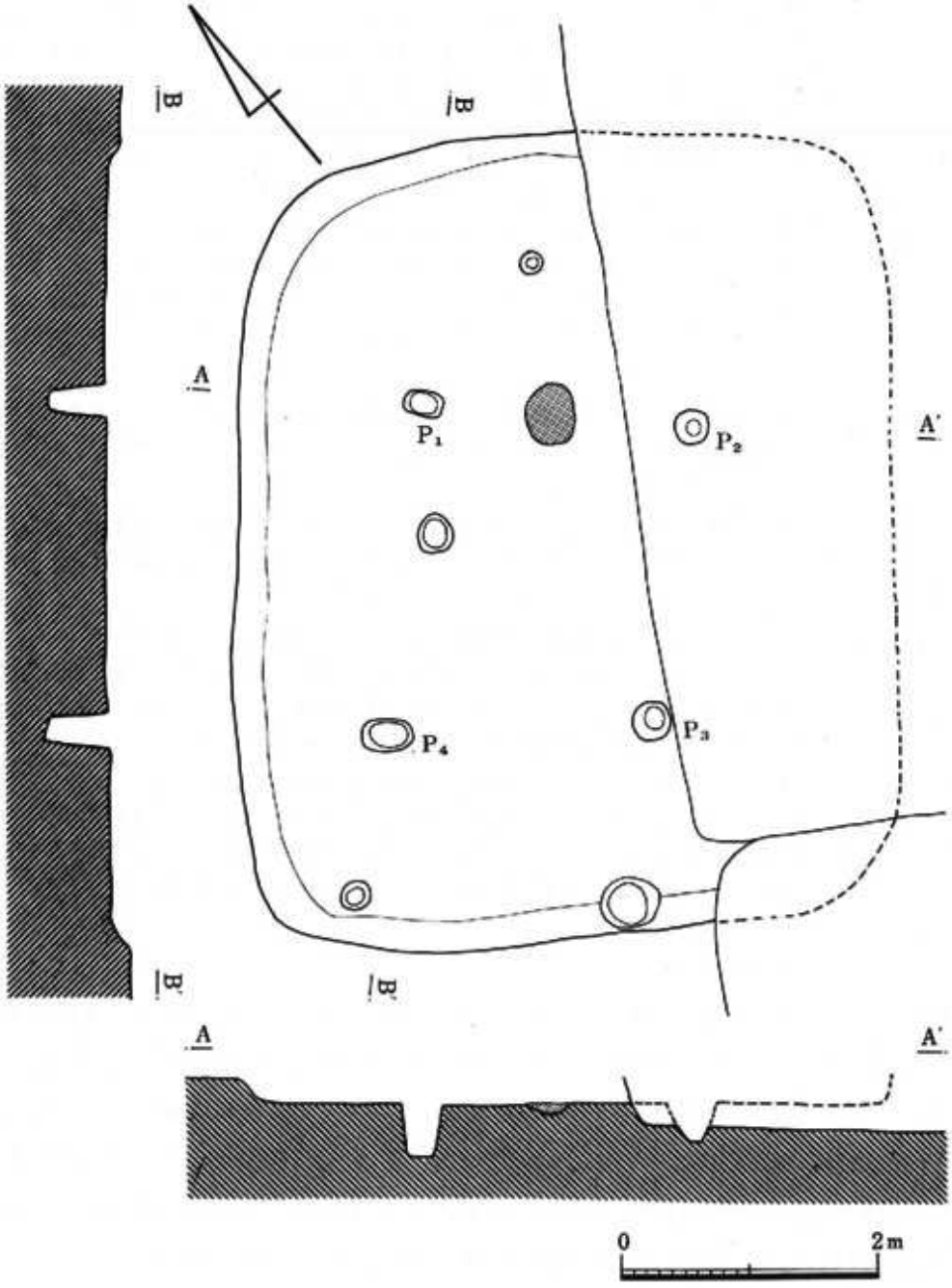
		加える。器内面は緻密なミガキを加え、光沢がある。 ④. 器表面胴中位に煤の付着が認められ，一部では1 mm程の厚味がある。
16	甕	①. 完形。口縁部径17.6 cm、頸部径14.6 cm、胴最大径17.7 cm、底部径5.0 cm、器高23.7 cm、 ②. 外反する口縁は端部で若干内弯気味に立ち上り、頸部から胴中位へゆるやかなカーブを描いて移行する。胴最大径はやや上方にあり、多少丸味を帯びながら底部へ収束する。スマートな形態の甕である。 ③. 器表面は刷毛目調整ののち頸部に1条3回刻みの簾状文を回周。口頸部及び胴上半部には数条の重なり合う波状文を施こす。原体先端の櫛目が不ぞろいなのか一帯の波の中間に間隔のあるものが多少見られる。胴下半はミガキを加える。器内面は口縁部に若干刷毛目を残す他はミガキで仕上げている。 ④. 器表面の胴上半及び器内面の胴中位、口縁に煤の付着が認められる。
17	甕	①. 胴上半1/4周。口縁部径18.2 cm、頸部径15.1 cm、胴最大径17.0 cm、残存高14.6 cm。 ②. 内弯気味に立ち上る口縁は頸部で強く屈曲して胴部に移行する。胴最大径は上位にあり、ただちに屈曲して胴下半へ向かう。そのため肩の張りの強い形態を示す。 ③. 器表面は刷毛目調整ののち頸部に1条連続の簾状文を回周。口縁及び肩部には万遍なく波状文が施こされる。波長、振幅は整っている。胴下半にはミガキを加える。器内面は刷毛目調整ののち口縁に丁寧な、胴部には粗雑なミガキを加える。 ④. 器表面の口縁から肩部にかけて煤の付着が認められる。
18	甕	①. 胴上半1/2周。口縁部径15.4 cm、頸部径12.8 cm、胴最大径16.8 cm、残存高11.6 cm。 ②. 外反する口縁はゆるく頸部に収約し、屈曲してスムーズなカーブを描きながら胴部に移行する。口縁端はわずかに内弯気味である。 ③. 器表面は刷毛目調整ののち頸部に1条連続した簾状文が回周する。口縁及び胴上半に波状文が施文されるが、その形状、手法とも13に酷似する。器内面は刷毛目調整ののちミガキを加える。
19	甕	①. 胴上半1/3周。口縁部径17.8 cm、頸部径14.2 cm、胴最大径17.4 cm、残存高12.6 cm。 ②. 内弯気味に立ち上る口縁部は頸部に収約し、強く屈曲して胴部に移行する。胴最大径は上位にあり肩に張りをもたせて丸味を帯び胴下半へ向かう。 ③. 器表面は刷毛目調整ののち頸部に1条2回刻みの簾状文を回周する。口縁には波長の乱れた、胴上半には乱れの少ない波状文を施こす。器内面は刷毛目調整ののちミガキを加える。 ④. 器表面胴上半に煤の付着が認められる。
20	甕	①. 胴上半1/2周。口縁部径16.6 cm、頸部径13.6 cm、胴最大径17.2 cm、残存高12.9 cm。 ②. 外反する口縁が頸部で屈折して丸味の強いカーブを描いて胴部へ移行する。胴最大径は中位より上方にあるようである。 ③. 器表面は刷毛目調整されたのち頸部には1条2回刻みの簾状文が回周する。口縁には3条、胴上部に1条の波状文を施す。胴下半はミガキを加える。器内面は胴部をナデ、口縁を刷毛目調整、さらに全体に粗雑なミガキを加える。 ④. 口縁から胴上半にかけ煤の付着が認められる。
21	甕	①. 胴下半3/4周。底部径7.6 cm、残存高9.6 cm。 ②. 底部から若干ふくらみをもって胴中位へ向かう。 ③. 器表面は刷毛目調整ののちミガキ。器内面は刷毛目調整ののちミガキ。底部はケズリにより作出している。
22	甕	①. 胴下部全周。底部径8.2 cm、残存高6.6 cm。 ②. 底部から直線的に胴部へ移行する。 ③. 器表面は刷毛目調整ののちミガキ。器内面は刷毛目調整のままである。底部の作出はケズリによる。
23	甕	①. 胴部から口縁1/2周。口縁部径11.5 cm。頸部径9.8 cm、胴最大径10.5 cm、残存高10.0 cm。 ②. 小形な甕。若干内弯気味に立ち上る口縁部は頸部で収約し、丸味のある胴部へ移行する。胴最大径は中位よりやや上方にある。 ③. 器表面は刷毛目調整の

		のち頸部に1条の連続した簾状文を回周する。口縁、胴上半には乱れた波状文を施こし、胴下半にミガキを加える。器内面は刷毛目調整ののちミガキを加える。特に胴部のミガキは丹念に行なわれ光沢をみせている。 ④. 器表面胴上部、器内面胴下半部に煤の付着が認められる。二次焼成を受けるためか器表面の剝落が見られる。
24	甕	①. 胴上半1/3周。口縁部径11.9 cm、頸部9.8 cm、胴最大径11.8 cm、残存高10.0 cm。 ②. 小形な甕。内弯気味に立ち上る口縁はゆるやかなカーブを描いて頸部に収約し、屈曲してやや肩の張る胴部へ移行する。口縁部が間伸びした感の強い形態を示す。 ③. 器表面は刷毛目調整ののち頸部に1条の連続した簾状文を回周する。口縁には3条、胴上半には2条の波状文を施こす。胴下半にはミガキが加えられるようである。器内面は全面にミガキを加えている。 ④. 器表面の一部に煤の付着が認められる。
25	台付甕	①. 脚の一部を欠く他は完存。口縁部径12.1 cm、頸部径10.8 cm、胴最大径12.3 cm、残存高12.3 cm。 ②. 小形な台付甕である。若干内弯気味に立ち上る口縁は短かくゆるやかに頸部へ収約し、扁平な胴部へ移行する。胴最大径は中位で、急速に脚台接合部に向かう。脚台部は「八」の字状に開口するようである。 ③. 器表面の調整は刷毛目調整ののち口縁部をヨコナデし、頸部に1条の連続した簾状文を回周する。口縁には密に、胴部には間隔をおいた波状文を施こす。胴下半はミガキを加える。脚台接合部は強いナデを加えている。器内面は胴部をナデ、口縁は刷毛目調整ののちヨコナデ、ミガキ。脚台内面はナデ。
26	高坏	①. 脚縁部を欠く他は完存。坏縁部径27.2 cm、接合部分径6.6 cm、残存高16.4 cm。 ②. 坏部は口縁を短かく外方へ水平に折り広げて鍔状につくり、やや深身を呈す。脚台は朝顔状に開くようである。 ③. 器表面は丹念にミガキを加える。坏部内面も同様のミガキ、脚台内面は指頭によるナデを行なう。器表面及び坏内面は赤色塗彩される。 ④. 器表面において、接合部をはさんだ坏下部と脚台上部がかなり摩耗している。一部赤色塗彩が剝落している。
27	高坏	①. 坏部1/2周。坏縁部径27.3 cm、残存高5.3 cm。 ②. 浅くゆるやかにカーブを描く坏部は口縁で短かく折れ、四方に1ケの突起を付している。 ③. 器内表面とも丹念にミガキを加え赤色塗彩している。
28	高坏	①. 坏部1/4周。坏縁部径24.1 cm、残存高9.0 cm。 ②. 直線的に開口する深身の坏部は口縁で短かく外反し、6ケ所に1ケの突起が付される。 ③. 器内表面とも丹念にミガキを加え赤色塗彩している。
29	高坏	①. 坏部全周。接合部から破損。坏縁部径24.0 cm。残存高6.8 cm。 ②. 直線的に開口する坏部は口縁で肥厚し折れて外反する。口縁端の四方に2ケの突起が付される。 ③. 器内表面とも丹念にミガキを加え赤色塗彩される。
30	高坏	①. 坏部1/4周。口縁部径19.0 cm、残存高7.3 cm。 ②. 内弯気味に大きく開口するやや深身の坏部破片である。 ③. 器表面は丹念にミガキを加え、器内面はミガキを加えるが多少刷毛目痕が残る。全面に赤色塗彩がなされる。
31	高坏	①. 脚3/4周。接合部径5.4 cm、脚縁部径12.6 cm、残存高13.2 cm。 ②. 「八」の字状に開口する長身の脚部である。 ③. 器表面は丹念なミガキ、坏内面も同様のミガキ、脚内面は縁部を刷毛目調整、他は断続的なケズリを加えている。器表面、坏内面を赤色塗彩。
32	高坏	①. 脚3/4周。脚縁部径15.3 cm、残存高11.2 cm。 ②. 大きく「八」の字状に開口する高坏脚部。 ③. 器表面はミガキを加えるが一部に刷毛目痕が残る。脚内面は縁部を

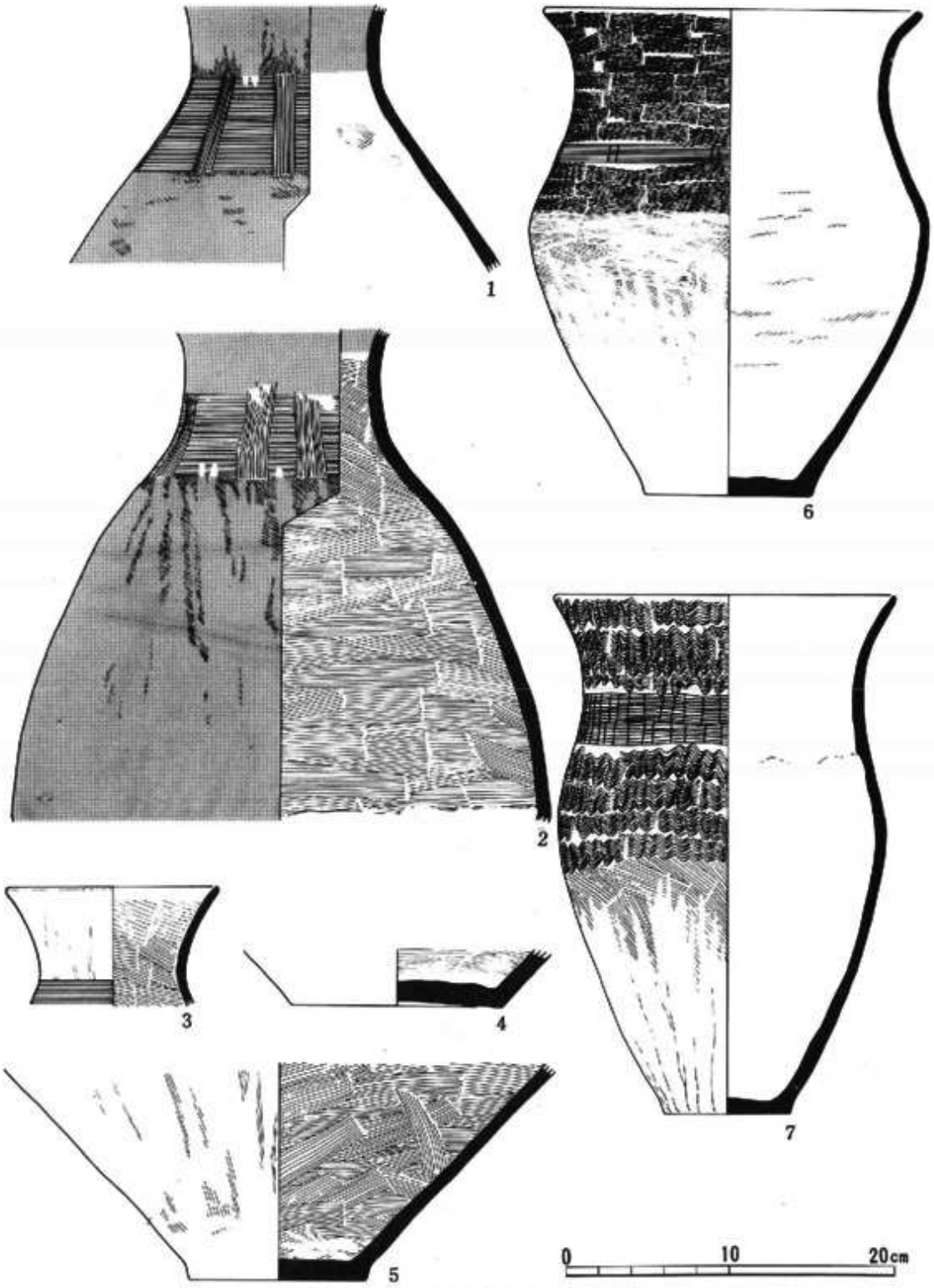
		横方向の強いナデ、他は縦方向の強いナデを加える。器表面は赤色塗彩される。
33	高坏	①. 脚下半全周。脚縁部径 9.5 cm、残存高 6.5 cm。 ②. 31. 32 より小形な高坏脚部である。脚縁部で強く外弯する形態を示す。 ③. 器表面はミガキ、赤色塗彩。器内面はナデであろうか。 ④. 二次焼成を受けたのか赤色に変色し、器面もかなり剝落しざらざらしている
34	鉢	①. 口縁の一部を欠く。口縁部径 11.6 cm、底部径 4.2 cm、器高 5.0 cm。 ②. 口縁部が内弯気味に丸味をもつ。底部は平坦でなくすわりが悪い。 ③. 器内表面とも丹念なミガキを加え赤色塗彩する。口縁下に 2 孔 1 対の小孔が焼成前穿たれる。底部はケズリのままである。 ④. 後述する 35 同様口縁下に 2 孔 1 対の小孔が穿たれる鉢形土器は中部高地弥生後期には多く検出されるが、はたしてこの器種に蓋が付すのか、あるいは小孔の穿たれた鉢自体が蓋として他の器種とセット関係をなすのかは当住居址出土遺物からは確認し得なかった。一応蓋としての可能性も指摘しておきたい。
35	鉢	①. 口縁部 1/2 周を欠く。口縁部径 12.3 cm、底部径 8.6 cm、器高 4.0 cm。 ②. 底部がかなり、大きく直線的に開口して口縁に至る。坏のごとき形態を示す。 ③. 器用表面（底部も含んで）に丹念なミガキを加え、全面を赤色塗彩する。焼成前に口縁部に 2 孔 1 対の小孔が穿たれる。底部の器壁はかなり薄い。 ④. 底部まで赤色塗彩で飾られる。
36	鉢	①. 完形。口縁部径 12.5 cm、底部径 4.3 cm、器高 5.8 cm。 ②. 大きく直線的に開口しやや深身の鉢である。 ③. 器内表面とも丹念にミガキを加え赤色塗彩している。底部はケズリのまま。
37	鉢	①. 完形。口縁部径 14.8 cm、底部径 4.6 cm、器高 5.4 cm。 ②. 小さな底部から若干内弯気味にカーブを描いて大きく開口する。口縁がやや傾く。 ③. 器内表面とも丹念にミガキを加え赤色塗彩する。底部はケズリのまま。
38	甕	①. 1/2 周。口縁部径 11.1 cm、底部径 5.5 cm、器高 8.8 cm。 ②. 底部から「八」の字状に大きく開口し、口縁で若干丸味を帯びる。底部に孔穿たれる。 ③. 器表面はケズリののちミガキを加える。ただミガキは底部周縁部まで至っていない。器内面は丹念なミガキを加える。底部には焼成前 1.5 cm 程の孔が穿たれる。
39	蓋	①. 口縁端を欠く他は完存。つまみ部径 5.4 cm、残存高 8.8 cm。 ②. つまみ部から笠状に開口し口縁に向かう。 ③. 器表面は指頭によるナデ調整ののち体部をミガキ。天井部は未調整。器内面は天井部から体部中半まで指頭圧痕が残るが、以下はナデを加える。天井部には焼成前小孔が 1 ケ穿たれる。 ④. 器内面は全体に煤が付着する。

Y－3 号住居址（第 15～17 図）

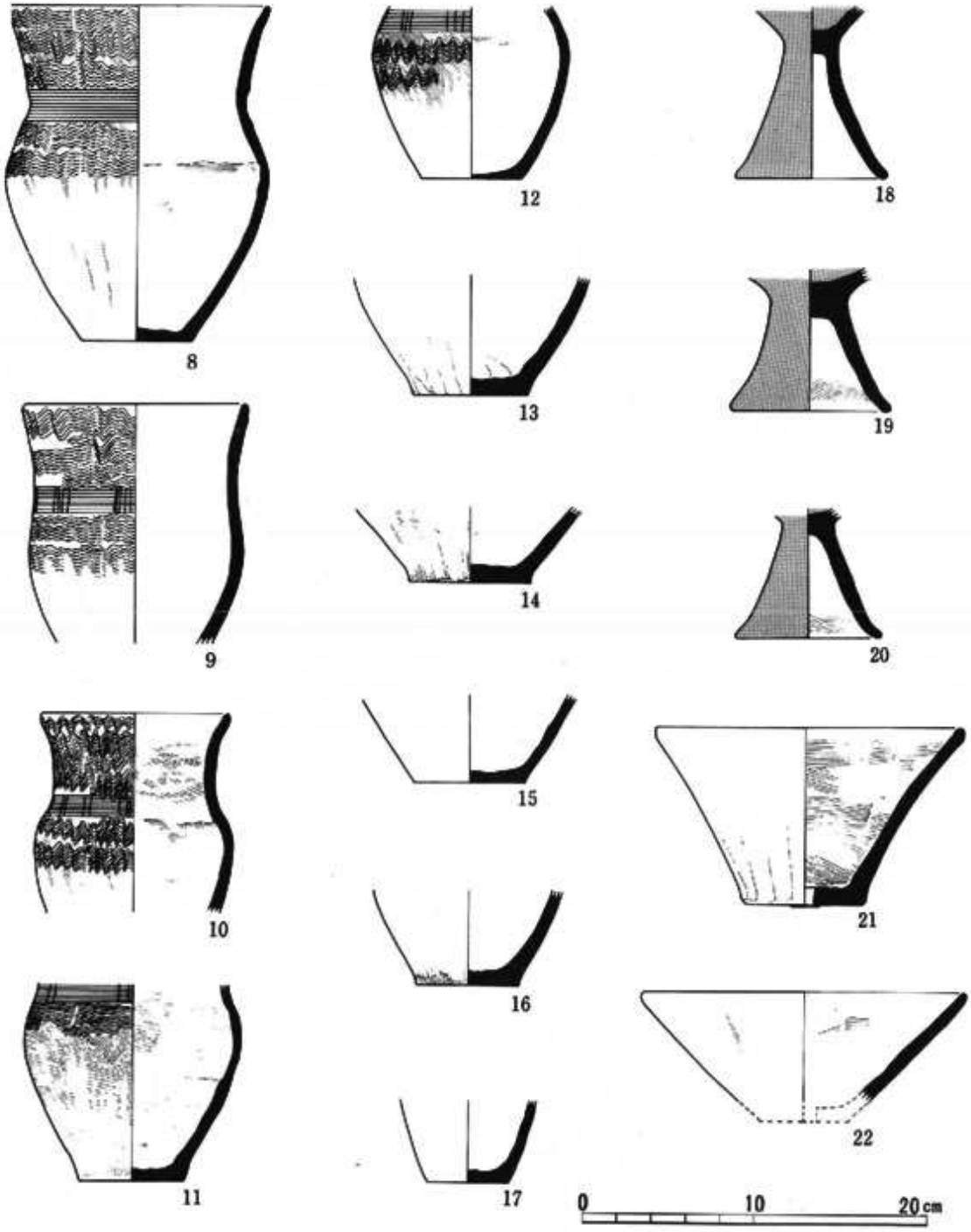
調査範囲のほぼ中央に位置し、H－5 号住居址およびH－15 号住居址に切られ、東側約 3 分の 1 の壁が認められなかった。弥生時代の住居址の中では、遺存状態の比較的良好な住居址である。軸長は 6.1×5.0（推定）m を測り、プランは隅丸長方形を呈する。壁高は遺存している部分で 20～25 cm を測り、壁の傾斜はややゆるやかであるが、壁はしっかりしている。主柱穴は、P_1（径 32×24 cm・深さ 42 cm）・P_2（H－6 号住居址の床面に残る。深さ推定 44 cm）・P_3（径 30×28 cm・深さ 44 cm）・P_4（径 48×24 cm・深さ 52 cm）が検出され、深さもほぼ一様でしっかりしている。炉址（径 48×32 cm）は、長軸上 P_1 と P_2 の中間に位置する。遺存する部分の床面はほぼ平坦でしっ



第15図　Y－3号住居址実測図（1/80）



第16図　Y－3号住居址出土遺物(1)



第17図　Y－3号住居址出土遺物(2)

かりしている。壁溝は認められない。

遺物は、人頭大から拳大の礫約50点と混在的に検出された。

Y-3号住居址出土遺物

1	壺	①. 胴上半から頸部全周。頸部径 11.4 cm、残存高 16.2 cm。 ②. 筒状の頸部から湾曲してわずかにふくらみをもつ胴部へ移行する。 ③. 器表面は刷毛目調整ののち頸部から胴上部にかけて5条の幅広い櫛描直線文を回周する。さらに8ヶ所に櫛描T字文を施こしている。頸部及び胴部はミガキを加える。器内面は刷毛目調整ののち口縁にミガキを加え赤色塗彩している。器表面の頸部、胴部も赤色塗彩される。 ④. 器内面の剝落が激しい。
2	壺	①. 胴部から頸部全周。頸部径 11.9 cm、胴最大径 32.7 cm、残存高 30.3 cm。 ②. 頸部は筒状を呈し、弯曲して肩の張る胴部へ移行する。胴部は間伸びして長く、下半で屈折して底部に向かうようである。 ③. 器表面は刷毛目調整ののち頸部に3条の櫛描直線文を回周する。さらに2条4単位の櫛描T字文を施こす。器内面は刷毛調整ののち口縁にミガキを加える。胴下半の屈折部には指頭によるナデを行なう。器表面頸部、胴部及び内面口縁に赤色塗彩を加える。
3	壺	①. 口縁部全周。口縁部径 13.0 cm、頸部径 9.0 cm、残存高 6.4 cm。 ②. ゆるやかに外反する口縁形態を示すやや小形な壺である。 ③. 器表面は刷毛目調整ののち頸部に櫛描直線文が回周する。口縁にはミガキを加える。器内面は刷毛目調整。口縁上部はうら刷毛状の工具を使用する。 ④. 焼成、胎土とも良好。堅緻な焼上りをみせる。
4	壺	①. 底部全周。底部径 12.7 cm、残存高 5.5 cm。 ②. 大きな底部の壺である。若干上底風を呈す。 ③. 器表面は丁寧なミガキ。器内面は刷毛目、底面を指頭によるナデ。
5	壺	①. 胴下半 1/2 周。底部径 10.8 cm、残存高 13.4 cm。 ②、胴部へ直線的に開口する。 ③. 器表面は刷毛目調整ののちミガキを加える。底部周縁部は横方向のミガキである。器内面には刷毛調整されるが、条が鮮明に残る。底面周辺部には粗いミガキを加える。
6	壺	①. 胴部の一部を欠く。口縁部径 23.1 cm、頸部径 19.0 cm、胴最大径 24.4 cm、底部径 10.2 cm 器高 29.7 cm。 ②. 強く外弯する口縁は頸部でさほど収約せずスムーズなカーブを描いて胴部に移行する。胴最大径は上位にあり強く屈曲して底部へと収束する。腰の高い割に横幅があるため安定感のある形態を示す。 ③. 器表面は刷毛目調整ののち、胴上位に1条2回刻みの簾状文を回周する。口縁から胴中半には他の甕には見られない波長、振幅とも小さい波状文が密集して施こされる。屈曲部以下はミガキを加える。ミガキは上位で横、下半は縦。器内面は刷毛目調整ののちミガキを加える。 ④. 胴下半に二次焼成を受け赤色化している。焼成、胎土とも良く堅緻な焼き上りを示す。
7	甕	①. 口縁と胴下半の一部を欠く。口縁部径 20.8 cm、頸部径 16.9 cm、胴最大径 20.0 cm、底部径 7.4 cm、器高 31.8 cm。 ②. 外弯する口縁は頸部で多少収約し、ゆるやかなカーブを描きながら若干肩の張る胴部へ移行する。胴部から底部は序々に収束していく。長身でスマートな形態である。 ③、器表面は刷毛目調整ののち頸部に2条の連続した簾状文帯を回周する。口縁から胴中半にかけて振幅の大きい波状文を施文する。胴下半はナデののちミガキを加える。器内面は丹念なミガキ。頸部に弱い稜が見られる。 ④、胴器表面の胴中位に煤の付着がみられる。
8	甕	①. 完形。口縁部径 15.3 cm、頸部径 12.5 cm、胴最大径 15.3 cm、底部径 6.4 cm、器高 19.6 cm。 ②. 外反する口縁は頸部で強く屈曲し、胴部は最大径値を上位に置き再度

		強く屈曲して底部へ収束する。肩の張りが強く口縁の伸びたスマートな器形な中形の甕である。 ③. 器表面は刷毛目調整ののち頸部に櫛描直線文を回周する。口縁から胴上半には波状文を施こし、胴下半はミガキを加える。器内面は刷毛目調整ののち丁寧なミガキを加え光沢がある。胴最大径部に1条の輪積み痕を残す。底部に木葉痕を留める。
9	甕	①. 胴上半1/3周。口縁部径13.2 cm、頸部径11.8 cm、胴最大径12.5 cm、残存高14.0 cm。 ②. 若干内弯気味に開く口縁はゆるいカーブを描いて頸部に移行するが、頸部のしまりは弱くそのまま胴部へ向かう。胴部から底部への収束もゆるやかに進む。全体的にずん胴なプロポーションを呈す。 ③. 器表面は頸部に1条4回刻みの簾状文を回周する。口縁から胴上半には波状文が施こされる。胴下半にはミガキを加える。器内面は全面ミガキで光沢がある。
10	甕	①. 胴上半1/3周。口縁部径11.0 cm、頸部径9.5 cm、胴最大径11.6 cm、残存高11.6 cm。 ②. 若干内弯気味に開く口縁は間伸びしてゆるくカーブを描き頸部へ収約し、強く屈曲して胴部へ移行する。胴最大径は上位にあり、肩の張りの強い器形を示す。 ③. 器表面は刷毛目調整されたのち頸部に2～3回刻みの簾状文を回周する。口縁から胴上半にかけては振幅が大きく乱れた波状文が施こされる。胴下半にはミガキを加える。器内面は刷毛目調整ののち胴部に丁寧な、口縁には粗雑なミガキを加える。
11	甕	①. 口縁を欠く。胴最大径12.6 cm、底部径6.1 cm、残存高11.5 cm。 ②. 胴最大径部上位にあり肩状張りをもたせた形態を示す。 ③. 器表面は刷毛目調整ののち1条2回刻みの簾状文を頸部に回周する。胴上部には波状文を施こし、胴下半はミガキを加える。器内面は刷毛目調整ののちミガキを加えている。
12	甕	①. 口縁を欠く。胴最大径11.4 cm、底部径5.3 cm、残存高10.0 cm。 ②. 胴最大径を上位にもち肩の張った器形を呈す。 ③. 器表面は刷毛目調整ののち頸部に1条3回刻みの簾状文を回周する。胴上半には波状文を施こし、胴下半はミガキを加える。器内面は刷毛目調整ののち丹念にミガキを加える。 ④. 器表面の剥落が激しい。二次焼成を受けたか。
13	甕	①. 胴下半1/2周。底部径6.6 cm、残存高7.0 cm。 ②. 底部からゆるやかなカーブを描いて胴部へ移行。 ③. 器表面は指頭によるナデ。器内面にもナデを加える。 ④. 器内表面とも剥落進む。
14	甕	①. 胴下半1/2周。底部径7.0 cm、残存高4.4 cm。 ②. 底部から直線的に開く甕の胴下半破片。 ③. 器表面は刷毛目調整ののちミガキ、内面にはナデを加える。
15	甕	①. 胴下半1/2周。底部径6.4 cm、残存高5.1 cm。 ②. 底部から直線的に開く破片。 ③. 器表面はミガキを加え光沢がある。器内面にもミガキを加える。底部はヘラ状工具によるナデを施こす。
16	甕	①. 胴下半全周。底部径6.6 cm、残存高7.0 cm。 ②. 底部からゆるやかなカーブを描いて胴部へ移行する。 ③. 器表面は刷毛目調整ののち半乾燥時にミガキを加える。器内面は丁寧なミガキ。
17	甕	①. 胴下半全周。底部径4.6 cm、残存高4.8 cm。 ②. 底部より直立気味に立ち上る。円筒状の胴下半部である。 ③. 器表面はミガキ。器内面は粗雑なミガキ。
18	高坏	①. 坏部を欠く。接合部径3.1 cm、脚縁径8.8 cm、残存高10.0 cm。 ②. 深身の坏部に脚の長い形態を示すと思われる。脚はしだいに開口する。 ③. 器表面及び坏内面は丁寧にミガキを加え赤色塗彩される。脚内面はナデ。
19	高坏	①. 坏部を欠く。接合部径4.5 cm、脚縁径9.3 cm、残存高8.4 cm。 ②. 「八」の字状

		に開口する脚は接合部の径の割に丈が低く寸づまりの感がある。 ③. 器表面及び坏内面はミガキを加え赤色塗彩する。脚内面は裾部に刷毛目が残る他はナデを加える。脚天井部は突出した粘土を指頭によりなでて平坦にしている。
20	高坏	①. 坏部を欠く。接合部径 3.0 cm、脚縁径 8.5 cm、残存高 7.6 cm。 ②. 「八」の字状に開口し裾部で外弯気味に開く。 ③. 器表面及び坏内面はミガキを加え赤色塗彩される。脚内面はナデ、裾部に刷毛目が残る。
21	甕	①. 完形。口縁部径 18.0 cm、底部形 7.2 cm、器高 10.4 cm。 ②. 底部から外反しながら朝顔状に開き、口縁が若干内弯気味となる。底部中央に1孔穿つ。 ③. 器表面は指頭によるナデ、器内面は刷毛調整ののち粗雑なナデ。口縁はヨコナデ。穿孔は焼成前に行なわれる。
22	甕	①. 胴上半 1/3 周。口縁部径 18.8 cm、残存高 6.4 cm。 ②. 直線的に強く開口する。やや浅い形態をとると思われる。 ③. 器表面は刷毛目調整ののち指頭による軽いナデ。さらに粗いミガキを加える。内面も刷毛目調整ののちミガキを加える。

Y－4号住居址（第18～21図）

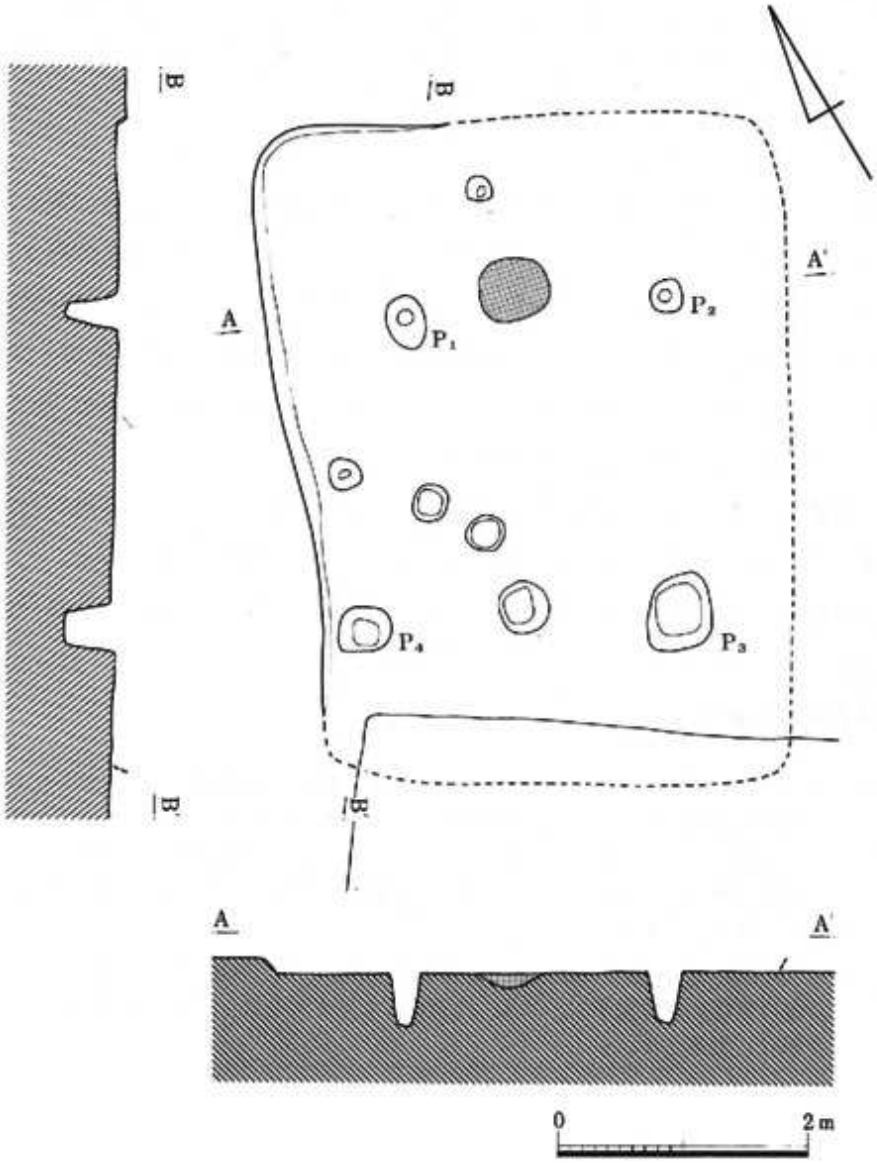
調査範囲の北西隅に位置し、H－7号住居址に南側を切られる。また、北壁の東半と東壁は確認できなかった。軸長は推定で 6.1×4.0 m で測る。プランはコーナの遺存する北西コーナから推測するとほぼ長方形を呈するものと考えられる。壁高は西壁中央で約 15 cm と遺存状態は悪い。また壁溝は認められない。主柱穴は、P_1（径 44×32 cm・深さ 38 cm）・P_2（径 32×30 cm・深さ 35 cm）・P_3（64×56 cm・深さ 30 cm）・P_4（44×42 cm・深さ 36 cm）が検出された。炉址（径56×52 cm）は、長軸線上 P_1 と P_2 の中間に位置する。

本址は、遺構内の礫が比較的少ない住居址であり、また土器の量も他の弥生時代の住居址と比較すると極めて少ない。また、2点の土器はほぼ床面直上により検出されている。

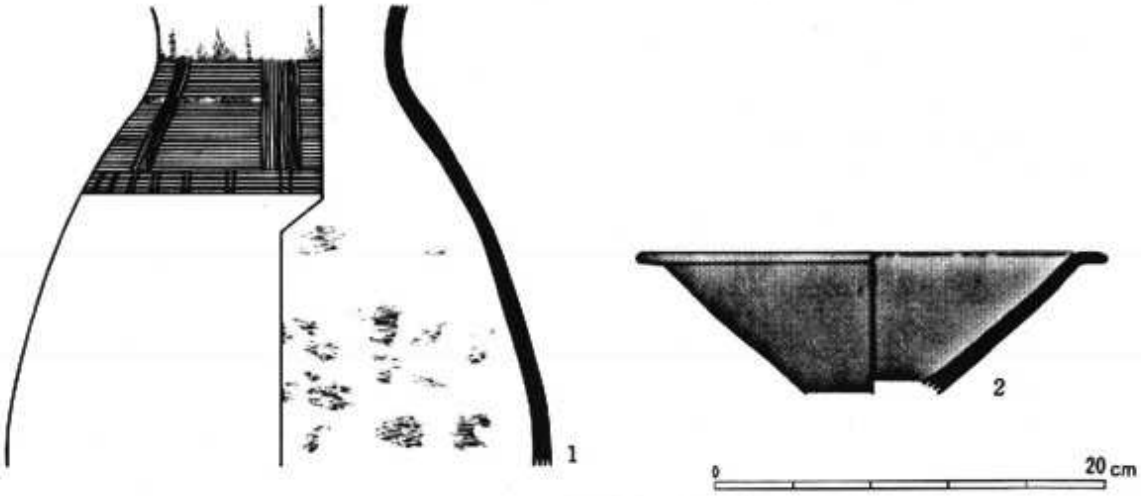
住居址の長軸方位は、本址とY－3号住居址がほぼ等しく、Y－1、Y－2号住戸址がほぼ同一方向である。

Y－4号住居址出土遺物

1	壺	①. 頸部から胴上半 1/4 周。頸部径 12.5 cm、残存高 23.8 cm。 ②. 若干肩の張る胴部に筒状の頸部が付す。 ③. 器表面は刷毛目調整ののち頸部から胴上位に3条の櫛描横走文と同工具によるT文字を描き、さらにその下部に1条2回刻みの簾状文を施こす。口縁及び胴部はミガキを加える。器内面は刷毛目調整される。 ④. 器内表面とも風化、剝落が進み赤色塗彩されるかどうか不明。
2	高坏	①. 坏部全周。口縁径 24.0 cm、残存高 7.3 cm。 ②. 口縁が短かく外方へ水平に折れ、体部は直線的に収束する。 ③. 内表面ともミガキを加え赤色塗彩される。 ④. かなり風化、剝落する。



第18図　Y－4号住居址実測図（1/60）



第19図　Y－4号住居址出土遺物

3．古墳時代の遺構と遺物

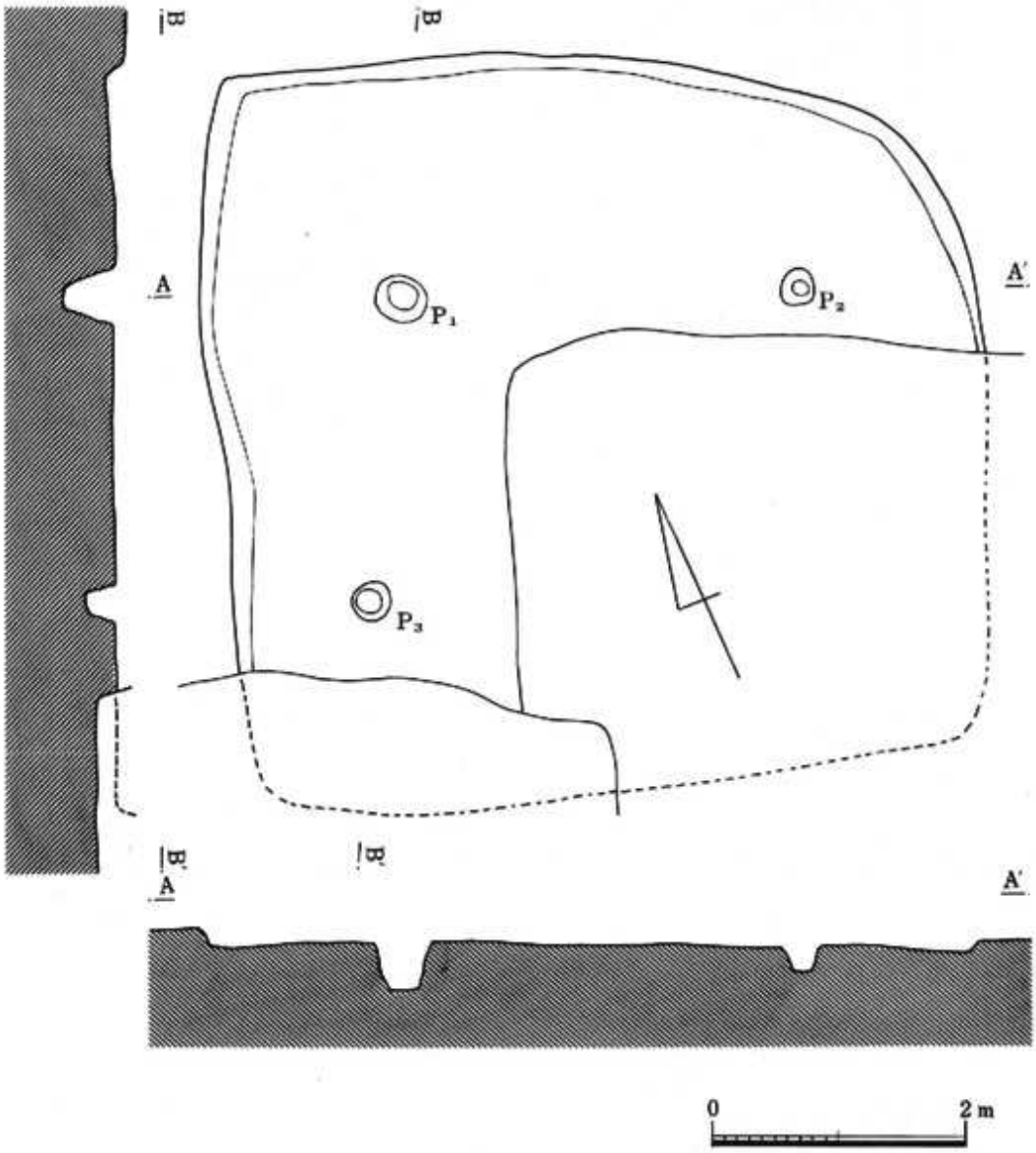
古墳時代の遺構としては、住居址4軒が検出され、H－5号住居址、H－6号住居址・H－7号住居址は、主軸方向もほぼ同一であり、ほぼ等間隔に並ぶ。H－4は和泉期、H－5～7は鬼高期の住居址である。

H－4号住居址（第18～21図）

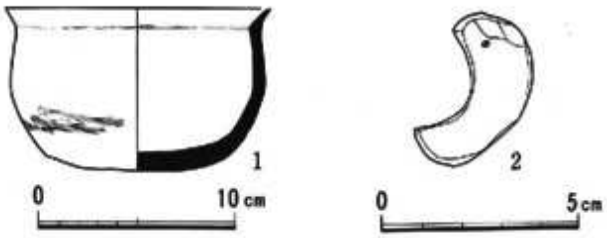
調査範囲の北端に位置し、H－8号住居址およびH－11号住居址によって切られる。このために南側約半分を欠く。軸長は6.1×5.8（推測）mを測り、プランは隅丸方形を呈するものと推測される。壁高は15～20 cmを測り、比較的しっかりしている。主柱穴は、P_1（径40×38 cm・深さ9 cm）、P_2（径32×28 cm・深さ13 cm）・P_3（径30×30 cm・深さ19 cm）が検出された。炉址と1本の主柱穴は、H－11号住居址の掘り方が深く確認されなかった。

H－4号住居址出土遺物

1	鉢	①．完形。口縁部径13.5 cm、胴部径13.0 cm、器高8.3 cm。　②．やや丸底気味の底部から直立気味の胴部へ移行し、わずかに収縮する頸部から短かく外反する口縁部を持つ。最大径は口縁にある。　③．全面ナデ調整。　④．器面は全体に荒れている。
2	石製模造品	勾玉の石製模造品。滑石製。長さ4.1 cm、最大幅1.5 cm、厚さ0.4 cm。



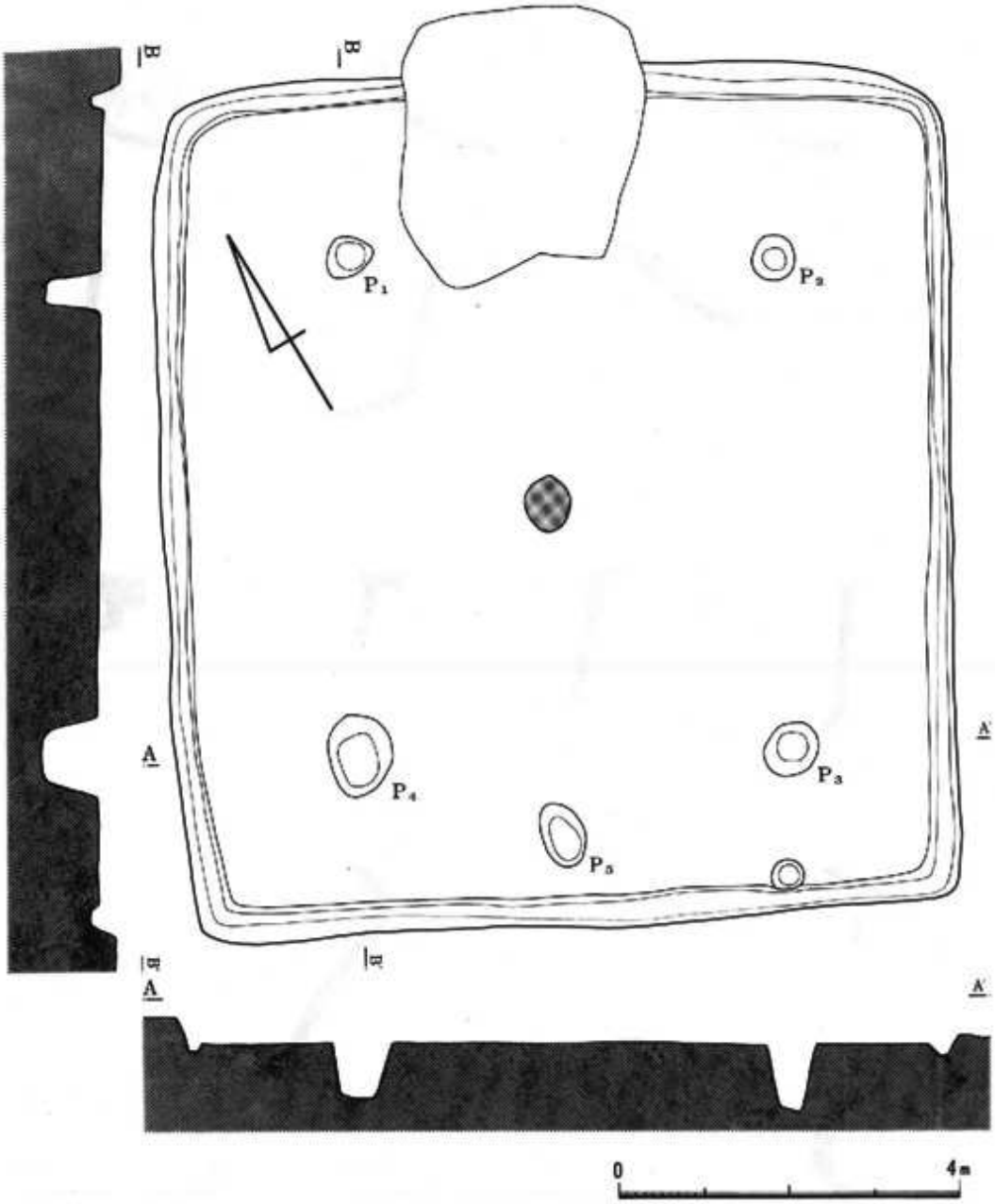
第20図　H－4号住居址実測図（1/80）



第21図　H－4号住居址出土遺物

H－5号住居址（第22～23図）

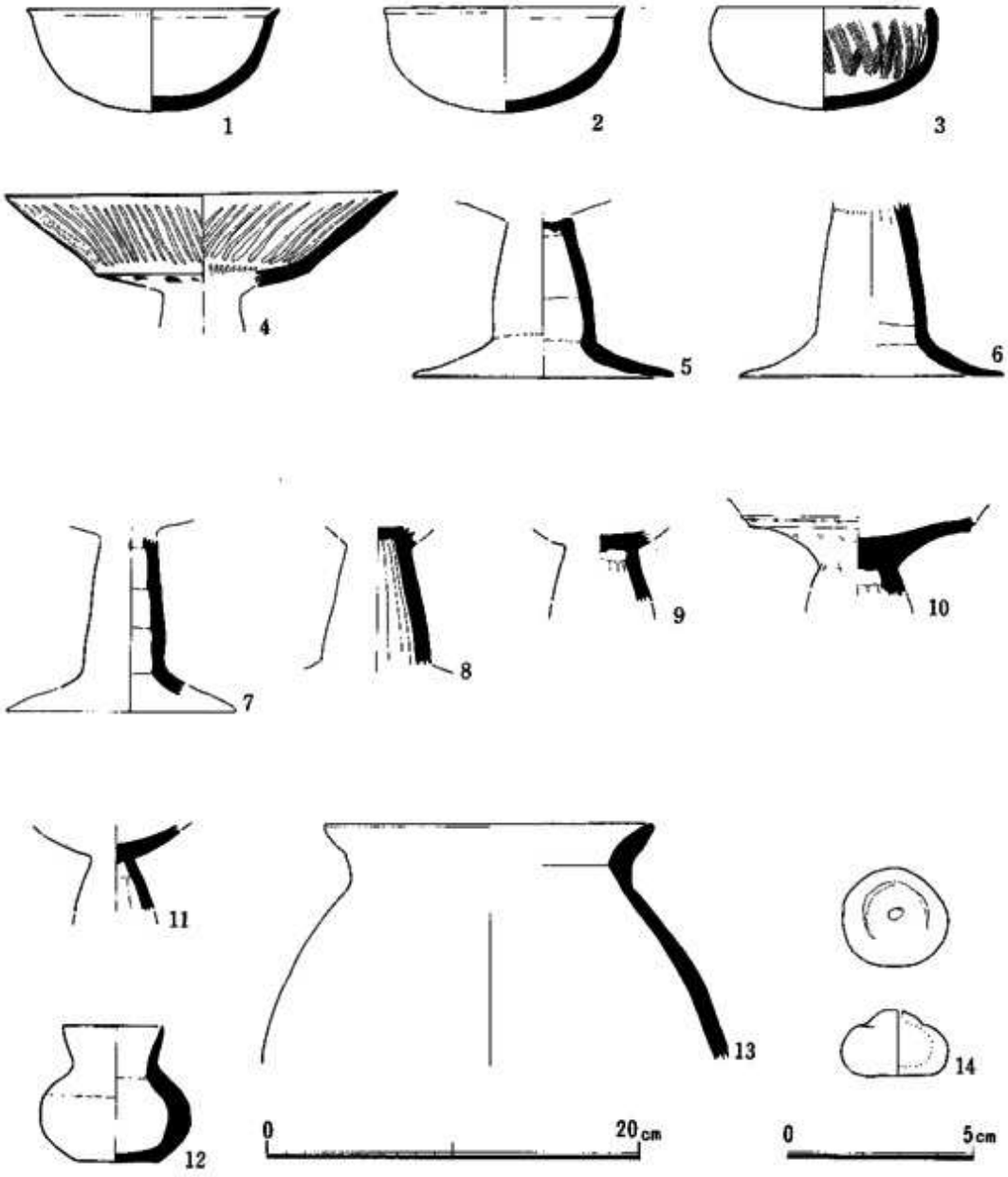
調査範囲の中央やや北寄りに位置し、北壁ほぼ中央にH－13号住居址が重複する。軸長は9.0×9.0mと大きく、H－6号住居址に次ぐ規模を持つ大形の住居址である。プランは整った正方形を



第22図　H－5号住居址実測図（1/60）

呈する。壁溝は全周し、壁高は北壁および西壁では 35～40 cm としっかりしているが、東壁では 15 cm 前後になる。主柱穴は、P_1（径 52×44 cm・深さ 67 cm）・P_2（径 52×52 cm・深さ 66 cm）・P_3（径 72×60 cm・深さ 73 cm）・P_4（径 100×76 cm・深さ 65 cm）が検出され、いずれもしっかりした柱穴である。炉（径 68×56 cm）は住居址中央に位置する。

本址出土の遺物も礫と混在する状況で検出されたが、比較的床面から検出されたものが多い。



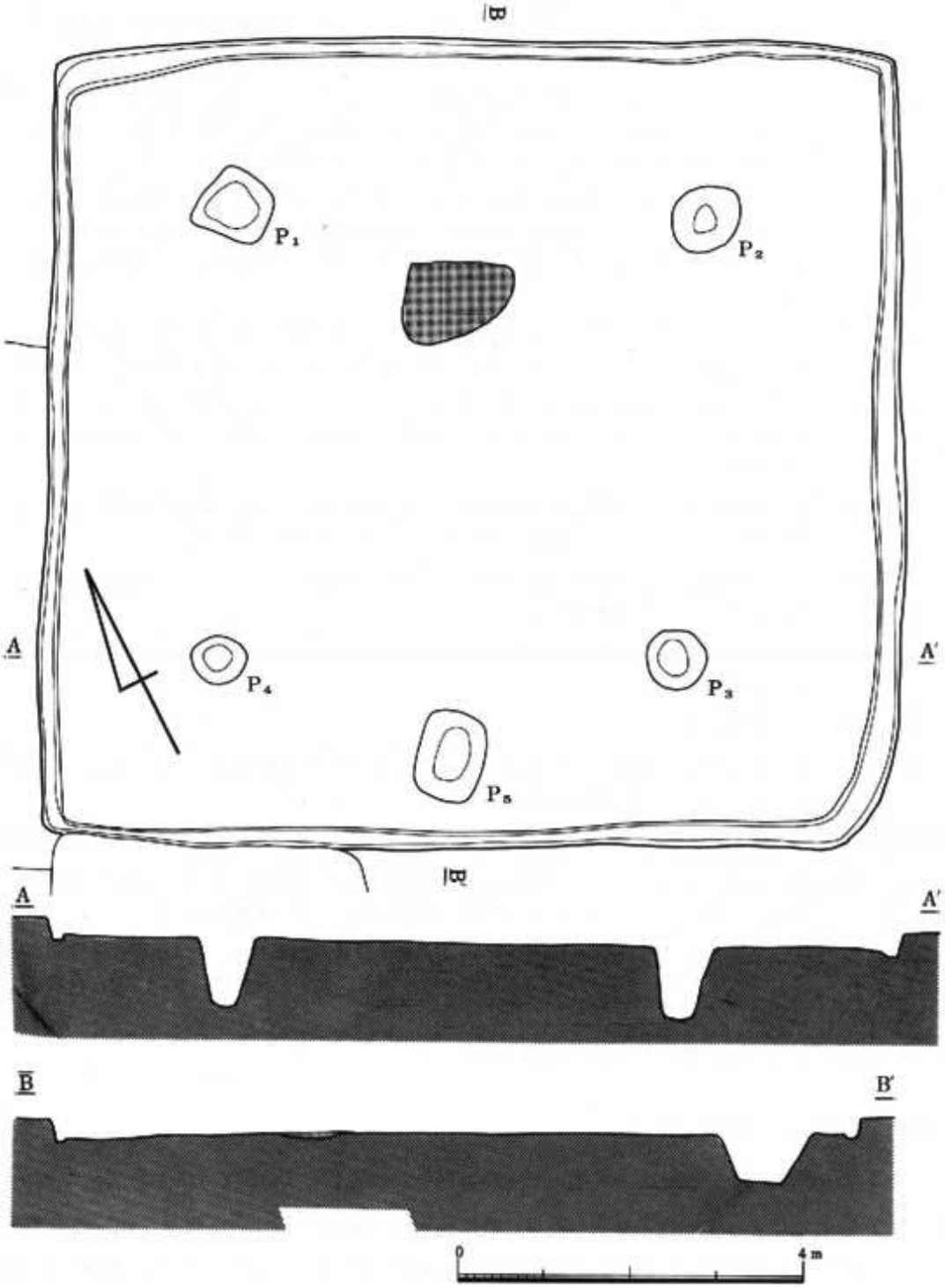
第23図　H－5号住居址出土遺物

H－5号住居址出土遺物

1	埦	①. 完形。口縁部径 3.0 cm、器高 5.5 cm。 ②. 丸底の底部から体部はゆるやかに開き、口縁部はわずかに外反し、内面に弱い陵を持つ。 ③. 外面底部ナデ調整。体部横方向ヘラミガキ。口縁部横ナデ。内面ヘラミガキ。 ④. 赤褐色を呈する。
2	埦	①. 1／3 周残存。推定口縁部径 13.6 cm、器高 5.4 cm。 ②. 丸底の底部から体部はゆるやかに開き、口縁部は外反し、内面に弱い陵を持つ。 ③. 外面、内面ヘラミガキ。 ④. 外面黄褐色・内面赤褐色。胎土に径 3 ～ 4 mm の赤色粒子を多く含む。
3	埦	①. 完形。口縁部径 11.5 cm、器高 5.4 cm。 ②. 深い埦形を呈し、口縁部は内湾する。 ③. 外面はヘラミガキの後口縁部横ナデ。内面は刷毛目調整の後口縁端部のみ横ナデ。底面および体部下半は凸凹が著しい。 ④. 色調は外面黄褐色を呈し一部黒変。内面は赤褐色。
4	高坏	①. 坏部 1/4 周残存。推定口径 21.2 m。 ②. 下半に陵を持ち大きく開く坏部。 ③. 横ナデの後、縦方向のヘラミガキが精文風に施される。 ④. 赤褐色を呈す。一部黒変。
5	高坏	①. 脚部ほぼ完存。脚裾径 14.0 cm。 ②. わずかに中ふくらみで裾部は大きく開く。 ③. 外面縦方向ヘラミガキ。内面裾部ナデ。輪積み痕と絞り痕を残す。 ④. 赤褐色を呈し、一部黒変。
6	高坏	①. 脚部ほぼ完存。脚裾部径 14.0 cm。 ②. 脚は中ふくらみで裾は大きく開く。 ③. 外面縦方向ヘラミガキ。内面接合痕を残す。 ④. 明黄褐色を呈す。
7	高坏	①. 脚部 1/2。 ②. 脚径の細い高坏脚。 ③. 外面縦方向ヘラミガキ。内面接合痕を明瞭に残す。 ④. 赤褐色を呈す。
8	高坏	①. 脚部 1/2。 ②. 直線的に開く脚部。 ③. 内面縦方向のナデの痕跡を明瞭に残す。 ④. 黄褐色を呈す。
9	高坏	①. 脚部 1／4。
10	高坏	①. 坏部 1/10 と継部。 ②. 坏部下半に陵を持ち大きく開く坏部。 ③. 外面、坏部内面ヘラミガキ。 ④. 明黄褐色を呈す。
11	高坏	①. 継部。 ②. 小形の高坏で坏部は大きく開く。 ③. 器面著しく荒れている。
12	坩	①. 口縁部 3／4 を欠く。口縁径 5.4 cm。胴径 8.1 cm、器高 7.3 cm。 ②. 球形胴の小形坩。 ③. 全面ていねいにナデ調整が施される。 ④. 黄褐色を呈す。
13	甕	①. 上半 1／3。推口縁径 18.0 cm。 ②. やや長目の胴部から、強く収縮する頸部、肥厚して外反する口縁部。 ③. 外面横ナデ。内面は著しく荒れている。 ④. 黒褐色を呈す。
14	土鈴	径 2.5 cm、厚さ 1.5 cm の土鈴。

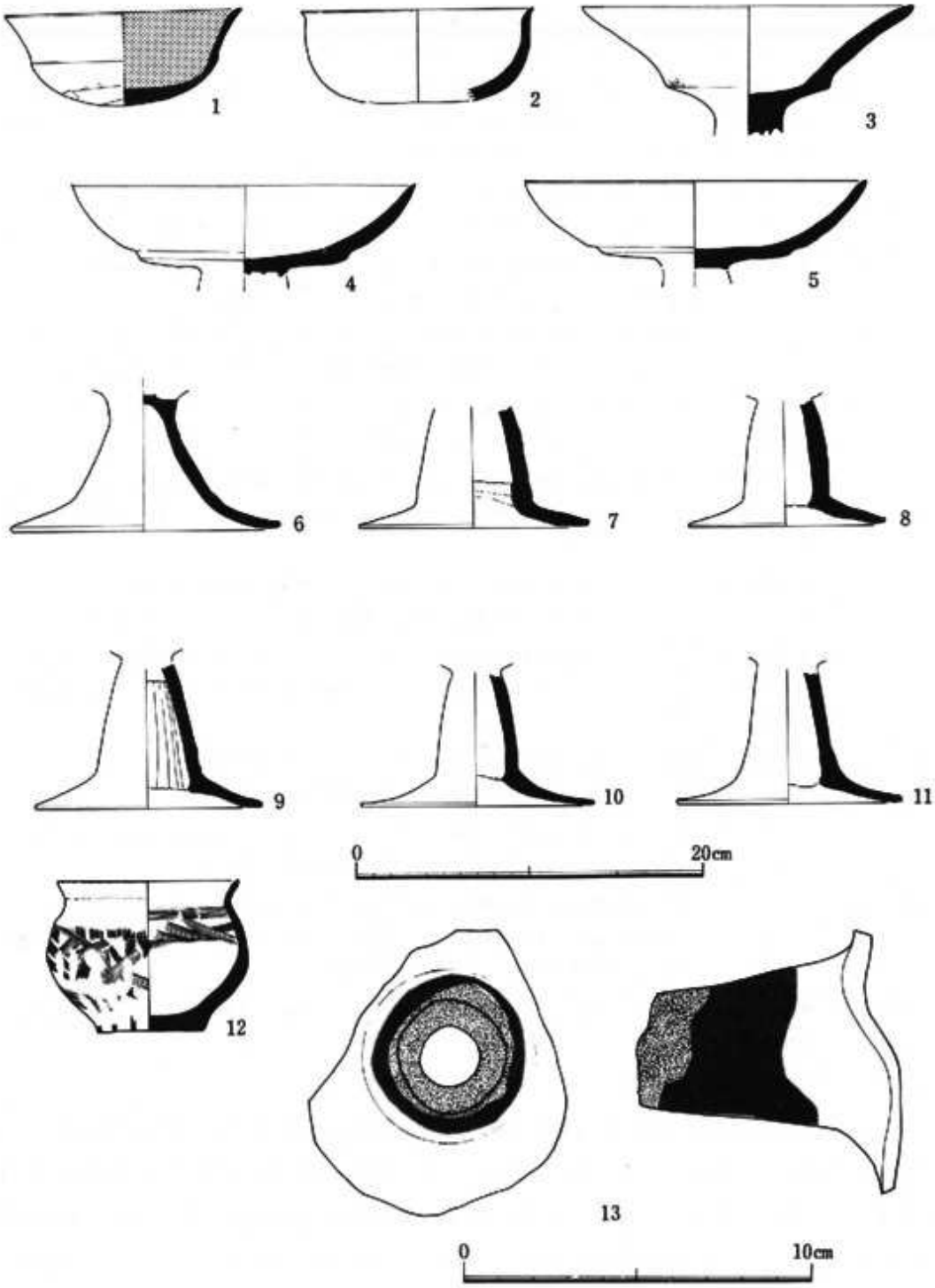
H－6号住居址（第 24～25 図）

H－5号住居址の南東約 9 m に位置し、主軸方向をほぼ同じくする。Y－3号住居址を切り、H－15 号住居址によって北西隅を切られる。軸長 9.9×9.4 m を測り、最も大きな住居址である。プランは整った長方形を呈する。壁高 25～30 cm を測り、壁はしっかりしており、壁溝が全周する。主柱穴は、P_1（径 80×75 cm・深さ 90 cm）・P_2（径 78×72 cm・深さ 77 cm）・P_3（径 72×



第24図　H－6号住居址実測図（1/80）

70 cm・深さ 78 cm)・P_4（径 64×62 cm・深さ 87 cm）が検出された。炉（径 140×100 cm）は主軸上北東寄りの P_1 と P_2 を結ぶ線より内側に位置する。



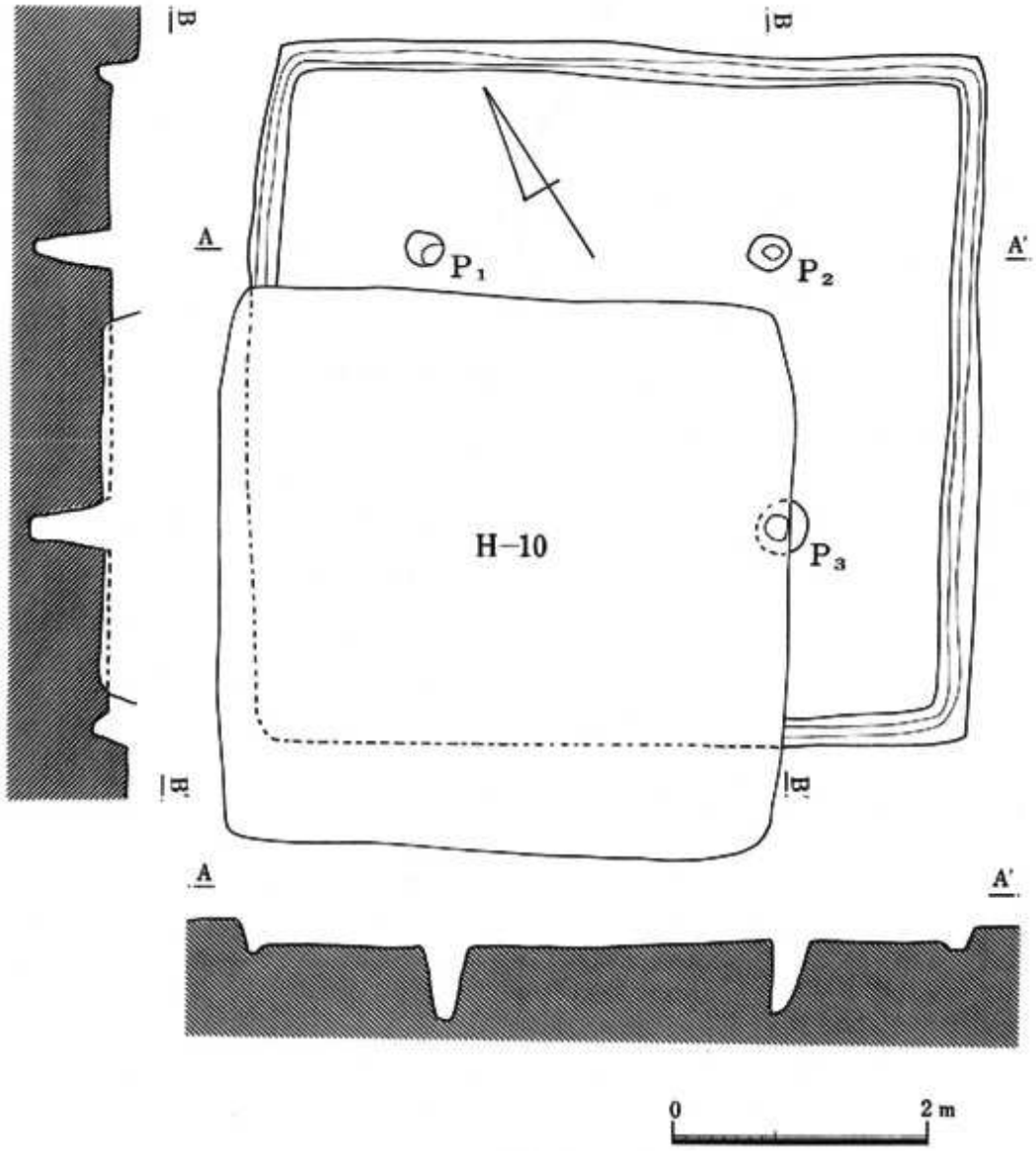
第25図　H－6号住居址出土遺物

H－6号住居址出土遺物

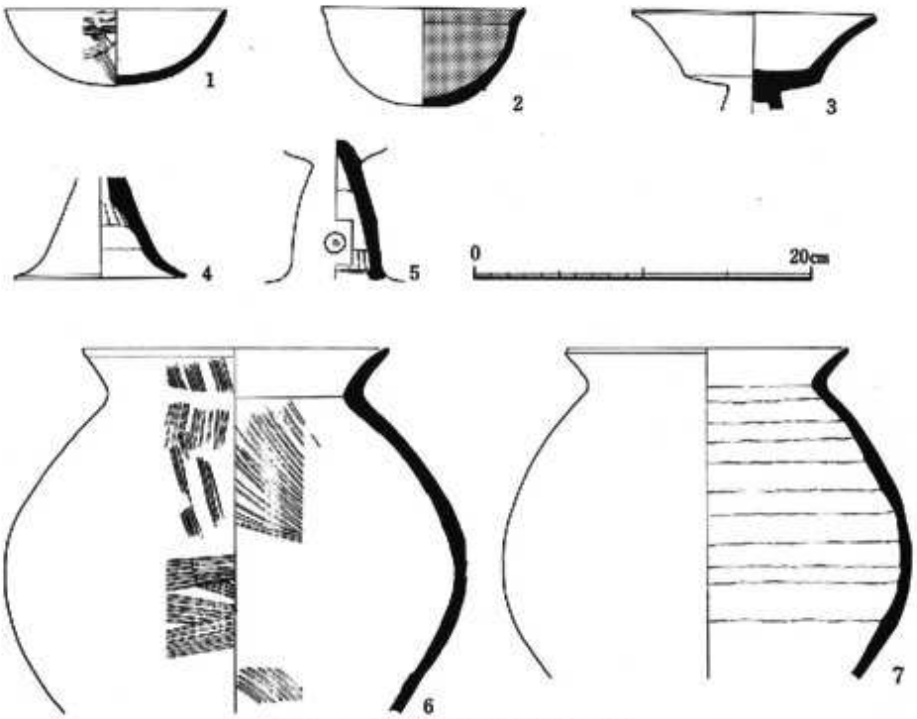
1	坏	①. 3/4 遺存。口縁部径 13.6 cm、器高 5.3 cm。 ②. 丸底の底部から体部中位に陵を持ち、口縁は外反する。 ③. 底部外面ナデ。口辺部横方向のていねいな研磨。内面ていねいな研磨。 ④. 外面赤黄褐色一部黒変。内面黒色処理。
2	埦	①. 口辺部 1/3 遺存。推定口縁部径 13.5 cm、推定器高 5.3 cm。 ②. 平底に近い底部から内弯しほぼ直立する体部、口縁は短かく外反する。 ③. 体部ヘラミガキ。口縁横ナデ。 ④. 赤褐色を呈し、白黄色雲を含む。
3	高坏	①. 坏部ほぼ完存。口縁部径 19.2 cm。 ②. 坏部下半に明瞭な陵を持ち、外反気味に大きく開く坏部。 ③. 内外面とも縦方向ヘラミガキ。暗文風。赤黄褐色を呈す。
4	高坏	①. 坏部 1/3 遺存。推定口縁部径 20.0 cm。 ②. 坏部下半に段を持ち、口縁部はやや内弯する。 ③. 内外面ともていねいなヘラミガキ。 ④. 赤褐色を呈す。
5	高坏	①. 坏部 1/8 遺存。推定口縁部径 19.6 cm。 ②. 坏部下半に段を持ち、口縁部はやや内弯する。 ③. 外面ヘラミガキ。内面刷毛目調整の後ヘラミガキ。 ④. 赤褐色を呈す。
6	高坏	①. 脚部 2/3 遺存。推定裾径 15.6 cm。 ②. 縦部からゆるやかに大きく開く脚部。 ③. 外面縦方向ヘラミガキ。内面ナデ。 ④. 赤褐色を呈す。
7	高坏	①. 脚部 3/4 遺存。裾径 13.4 cm。 ②. わずかに中脹らみの脚部、裾は大きく開く。 ③. 外面ヘラミガキ。内面、接合痕を残す。裾部刷毛目調整の後ナデ。 ④. 赤黄褐色を呈す。
8	高坏	①. 脚部 4/5 遺存。裾部径 11.8 cm。 ②. 中脹らみの脚部、裾は大きく開く。 ③. 外面ヘラミガキ。内面裾部の接合痕明瞭、刷毛目調整の後、ナデ。 ④. 黄褐色を呈す。
9	高坏	①. 脚部 3／4 遺存。裾部推定径 13.0 cm。 ②. 下がやや太くなる柱状の脚部、裾は大きく開く。 ③. 外面ヘラミガキ、裾部ナデ。内面接合痕を残す。ナデ。 ④. 黄褐色を呈す。
10	高坏	①. 脚部 2／3 遺存。裾部推定径 12.8 cm。 ②. 中脹らみの脚部、裾は大きく開く。 ③. 外面ヘラミガキ。内面裾部の接合痕明瞭。 ④. 黄褐色を呈す。
11	高坏	①. 脚部 2/3 遺存。裾部推定径 13.0 cm。 ②. 下がやや太くなる柱状の脚部、裾は大きく開く。 ③. 外面ヘラミガキ、裾部ナデ。内面裾部の接合痕を残す。
12	鉢	①. 完形。口縁部径 10.5 cm、胴部最大径 11.7 cm、底部径 6.0 cm、器高 8.7 cm。 ②. 平底から球形の胴部へ頸部の収縮は弱く、口縁短かく外反する。 ③. 外面刷毛目調整の後ナデ。内面刷毛目調整の後ナデ。 ④. 淡黄褐色。
13	羽口	鞴羽口。高坏脚利用の羽口で、上半が灰色に変色し、上縁には溶解した鉄分が付着し、海綿状を呈する。

H－7号住居址（第26・27図）

H－5号住居址の西約8.5m、調査範囲の北西端に位置する。H－10号住居址に切られるが遺存状態は比較的良い。軸長5.7×5.3mを測り、プランは整った長方形を呈する。壁高は30～40cmを測り、周溝は全周する。主柱穴は、P_1（径40×38cm・深さ60cm）・P_2（径35×30cm・深さ55cm）・P_3（径36×32cm・深さ60cm）である。カマドはH－10号住居址によって破壊されているが南壁の中央に痕跡的に認められた。



第26図　H－7号住居址実測図（1/60）



第27図　H－7号住居址出土遺物

H－7号住居址出土遺物

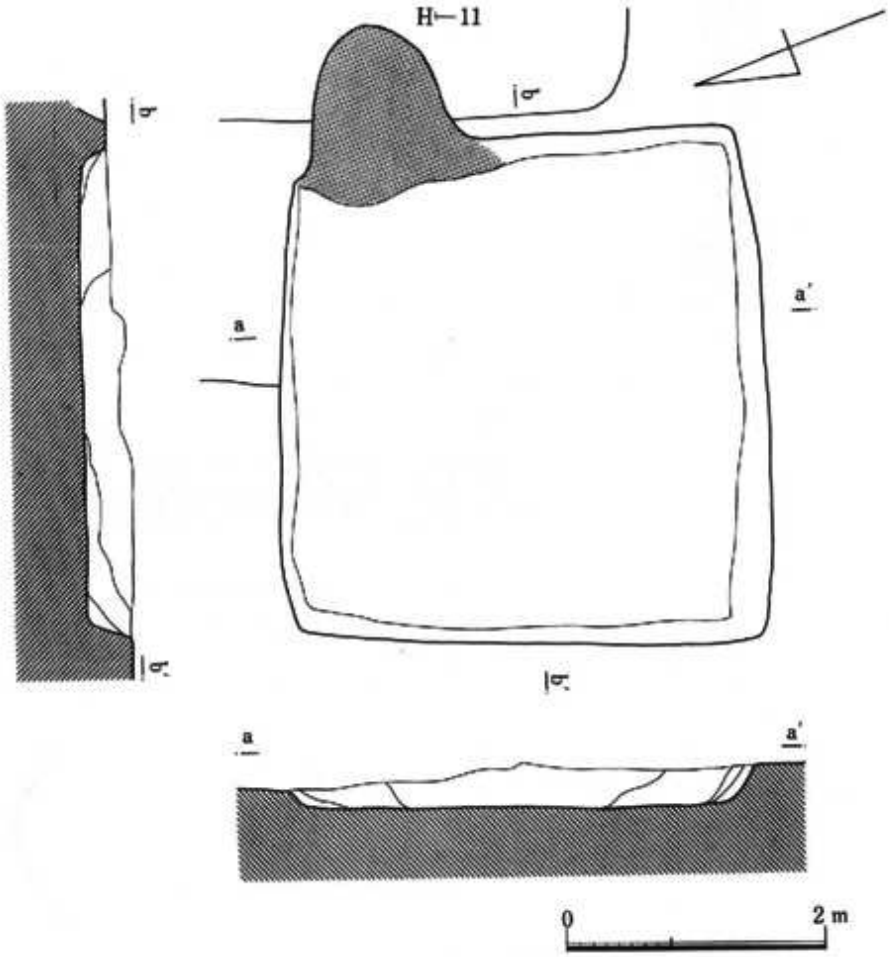
1	椀	①. 1/3遺存。推定口縁部径13.0 cm、器高4.5 cm。　②. 丸底のゆるやかに内弯しつつ立ち上がる体部。　③. 外面刷毛目調整の後ナデ。内面ナデ。　④. 黒褐色を呈す。
2	椀	①. ほぼ定形。口縁部径12.0 cm、器高5.9 cm。　②. 丸底のやや深めの椀で口縁は短かく外反する。　③. 内外面ともていねいなヘラミガキ。　④. 外面は茶褐色から暗褐色を呈し、内面は黒色処理。
3	高坏	①. 坏部1/4遺存。推定口縁径14.6 cm。　②. 坏下半に明瞭な稜を持ち、坏部は外反気味に大きく開く。　③. 外面縦方向のヘラミガキの後後に口縁部横ナデ。内面ヘラミガキ。　④. 赤褐色を呈す。
4	高坏	①. 脚部遺存。口縁部径18.0 cm胴部径25.0 cm。　②. 縦部からゆるやかに大きく開く脚部。　③. 外面ヘラミガキ。内面は絞り痕および接合痕を残す。　④. 黒褐色を呈す。
5	甕	①. 口縁から脚部の1/2残存。　②. 大きく張る胴部から強く収縮する頸部、短かく外反する口縁部。　③. 外面は、荒い条痕のような刷毛目が下半には横方向、上半には縦方向で施される。内面には引き上げるようにして刷毛目が残る。　④. 黒褐色を色を呈し、一部黒変。
6	甕	①. 口縁から胴部の1/2遺存。口縁部径16.3 cm、胴部径24.0 cm。　②. 大きく張る胴部から強く収縮する頸部、短かく外反する口縁部。　③. 外面縦方向ヘラミガキ。内面輪積み痕を明瞭残す。

4．歴史時代の遺構と遺物

歴史時代の遺構は、住居址11軒と多いが、この遺存状態は悪いものが多く、遺物量も少ない。図示できるような遺物が検出できなかった住居址も多く、その規模も極めて小さなものもある。

H－8号住居址（第28図）

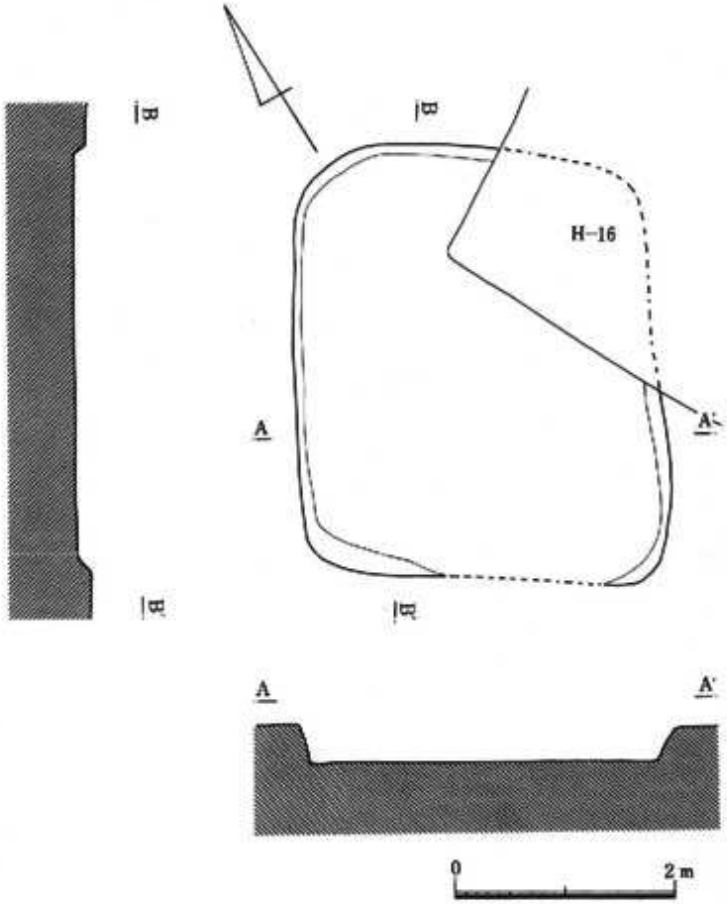
調査範囲の北東隅に位置し、H－4およびH－11号住居址を切る。軸長3.9×3.8mを測り、南東隅にカマドを持つ方形の住居址である。壁高は25～40cmを測りしっかりしている。壁溝および柱穴は認められない。カマドは、石組に粘土材を使用し構築している。



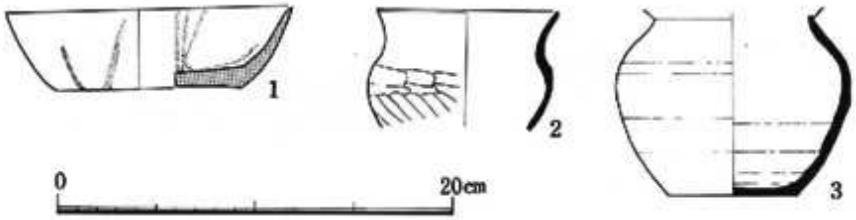
第28図　H－8号住居址実測図（1/60）

H－9号住居址（第29・30図）

調査範囲の南隅に位置し、H－16号住居址に切られる。軸長3.9×3.4mを測る。カマドは確認できなかった。H－16号住居址の位置する北東側にあったのかもしれない。壁高も西壁では30cmを測るが確認できない部分も多い。



第29図　H－9号住居址実測図（1/80）



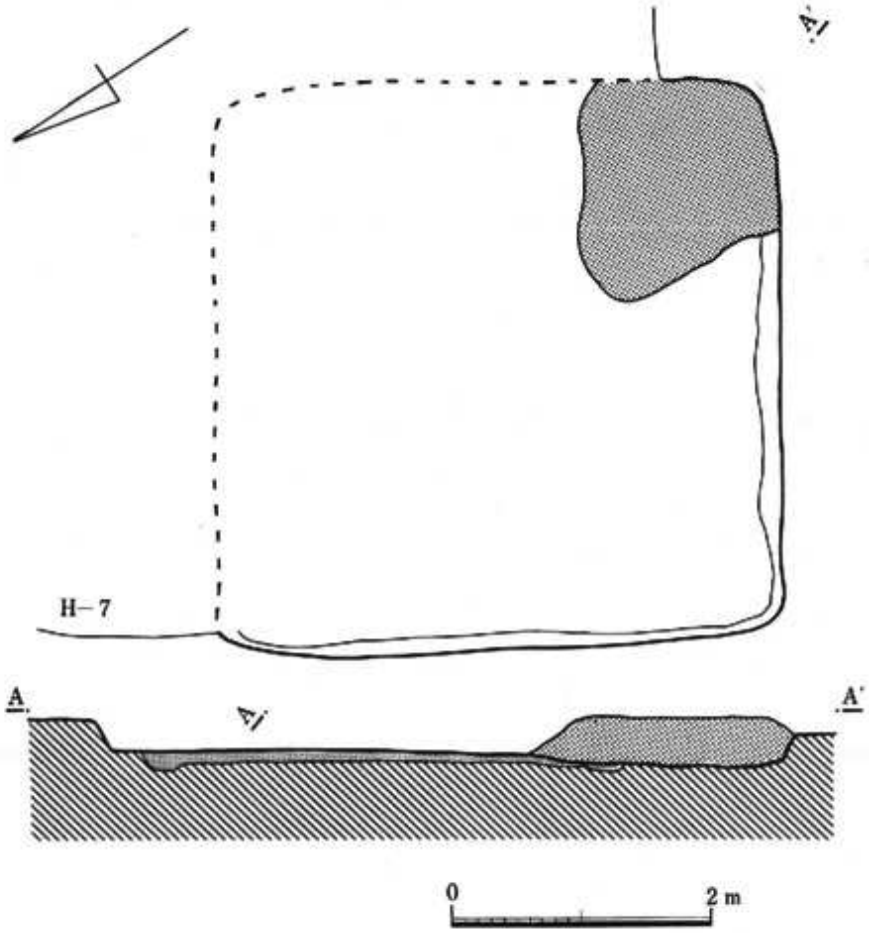
第30図　H－9号住居址出土遺物

H－9号住居址出土遺物

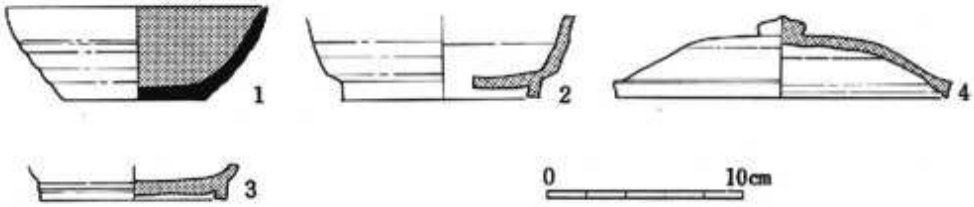
1	坏	①. 1/3遺存。推定口縁部径13.6cm、器高4.1cm。 ②. 大きめの平底から直線的に開く口辺部を持つ須恵器坏。 ③. 内外面に火ダスキを認める。
2	甕	①. 口縁から胴部の1/5遺存。推定口縁部径9.2cm。 ②. 胴部上半に最大径を持ち、肩部に稜を持つ。口縁部は外反する。 ③. 胴部ヘラケズリ、口縁部横ナデ。 ④. 黄褐色。
3	甕	①. 1/3遺存。胴部最大径11.8cm。 ②. 胴部上半に最大径を持つ小形甕。

H－10号住居址（第31・32図）

調査範囲の北西隅に位置し、H－7号住居址を切る。軸長4.3×4.3mを測り、南西隅にカマドを持つ、方形の住居址である。カマドは石組みに粘土を用いたものである。



第31図　H－10号住居址実測図（1/60）



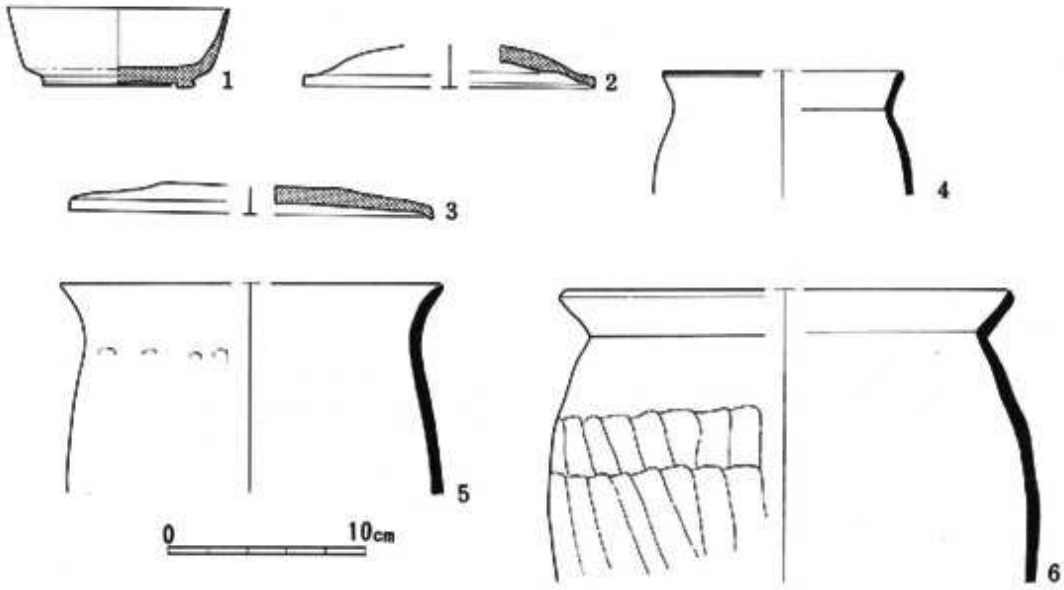
第32図　H－10号住居址出土遺物

H－10 号住居址出土遺物

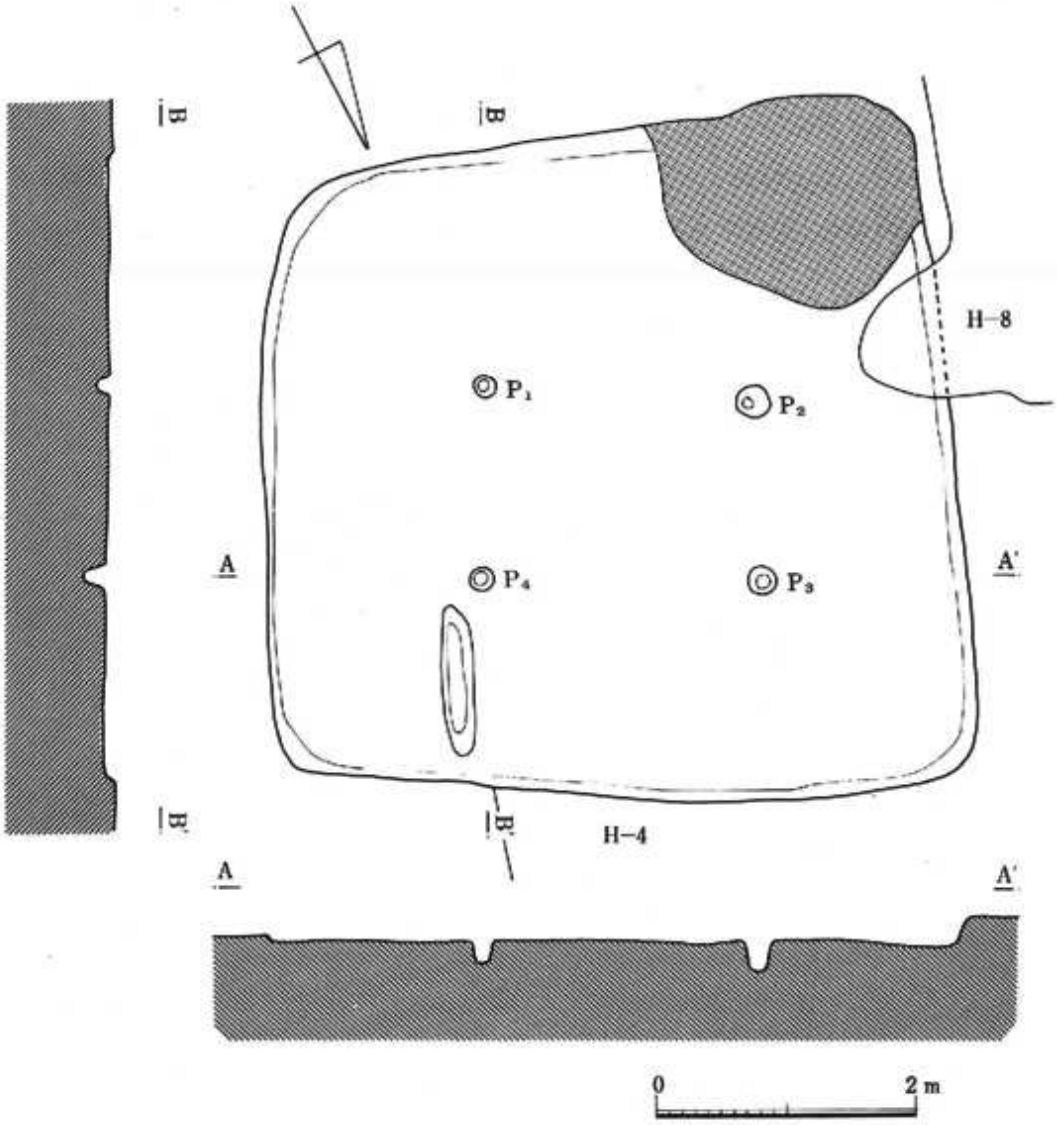
1	坏	①. 1/3 遺存。推定口縁部径 13.2 cm 底部径 6.8 cm、器高 4.8 cm。　②. 平底の底部からわずかに内弯しつつ口辺部が立ち上がる。　③. ロクロ整形。　④. 黒褐色、内面黒色処理。
2	坏	①. 1/6 遺存。推定底部径 10.0 cm。　②. 高台付須恵坏。　③. ロクロ整形。
3	坏	①. 1/10 遺存。推定底部径 9.6 cm。　②. 高台付須恵坏。　③. ロクロ整形。
4	坏蓋	①. 完形。径 16.8 cm、器高 4.2 cm。　②. 須恵坏蓋。

H－11 号住居址（第33・34図）

調査範囲の北隅に位置し、H－4 号住居址を切り、H－8 号住居址に切られる。軸長 5.8×5.1 m を測るややゆがんだ方形の住居址で、南西隅にカマドを持つ。壁高は 5 ～10 cm であまりしっかりしていない。主柱穴は、P_1（径 16×15 cm・深さ 9 cm）・P_2（径 32×30 cm・深さ 16 cm）・P_3（径 22×18 cm・深さ 23 cm）・P_4（径 17×15 cm・深さ 25 cm）であり、極めて径が小さく浅い。



第33図　H－11号住居址出土遺物



第34図　H—11号住居址実測図（1/60）

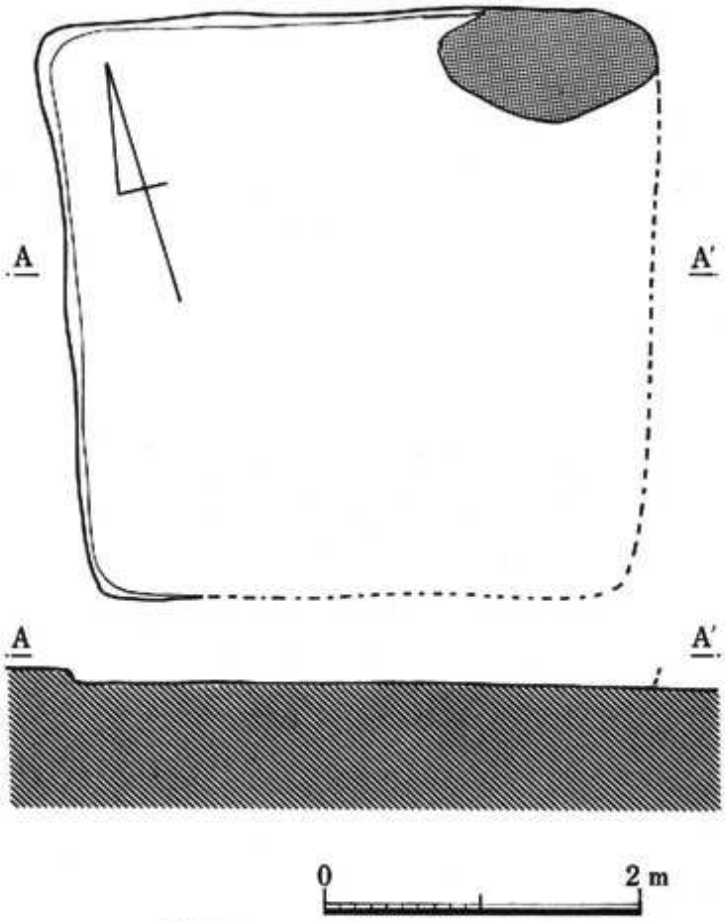
H—11 号住居址出土遺物

1	坏	①. 1/2 遺存。口縁部径 11.2 cm、底部径 7.8 cm、器高 4.0 cm。　②. 高台付須恵坏。
2	坏蓋	①. 1/8 遺存。推定径 14.8 cm。　②. 須恵坏蓋。
3	坏蓋	①. 1/8 遺存。推定径 18.4 cm。　②. 須恵坏蓋。
4	甕	①. 1/6 遺存。推定口縁部径 12.0 cm。　②. 長胴の胴部からわずかに収縮し、短かく外反する口縁部。頸部内面に段を持つ。　③. ナデ整形。　④. 淡黄褐色を呈す。
5	甕	①. 1/8 遺存。推定口縁部径 19.2 cm。　②. 胴部最大径と口縁部径がほぼ等しく、頸部はごく弱く収縮する。　③. 外面ヘラケズリの後ていねいに研磨される。　④. 黄褐色。

6	甕	①. 1/6 遺存。推定口縁部径 22.6 cm。 ②. 長胴甕で頸部の収縮は短い。口縁部は強く外反する。 ③. 外面ヘラケズリ。 ④. 淡黄褐色。

H－12 号住居址（第 35 図）

H－11 号住居址の約 4 m 南に位置し、軸長 3.6×3.6 m を測る。カマドは北東隅に位置し、プランは正方形を呈する。壁高は 10～20 cm を測り、比較的しっかりしている。主穴はない。



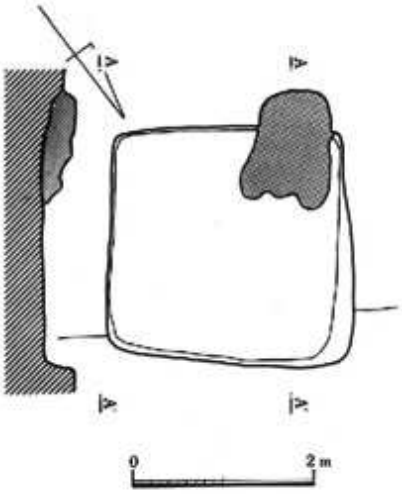
第35図　H－12号住居址実測図（1/60）

H－13 号住居址（第 36 図）

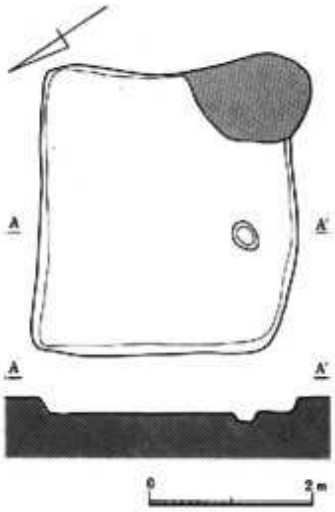
調査範囲のほぼ中央、H－5 号住居址を切って位置する軸長 2.5×2.5 m の最も小形の住居址で、南西隅の石組のカマドが位置し、正方形を呈する。壁高は 20～30 cm を測る。

H—14 号住居址（第 37・38 図）

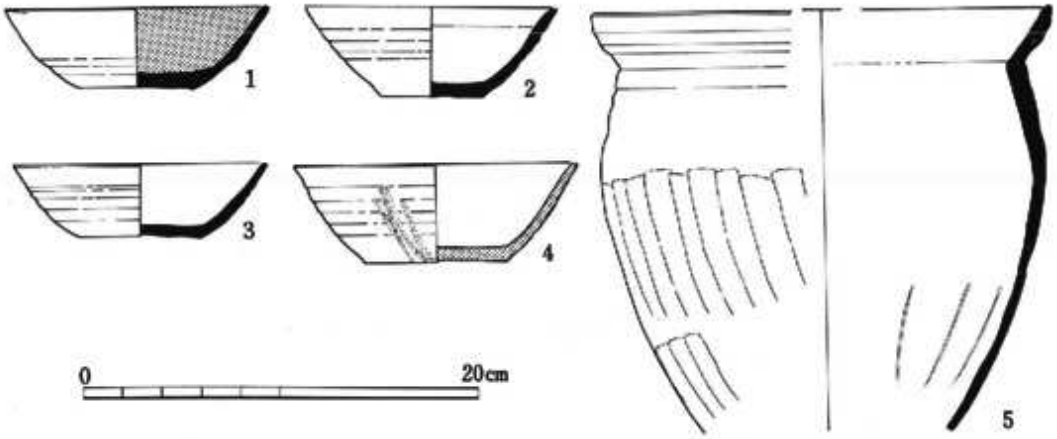
H—5 号住居址の西約 1 m に位置し、軸長 3.6×3.0 m を測る。南隅に石組を粘土で覆ったカマドを持つ方形の住居址である。壁高は、16～20 cm を測り比較的しっかりしている。



第36図　H—13号住居址実測図（1/60）



第37図　H—14号住居址実測図（1/60）



第38図　H—14号住居址出土遺物

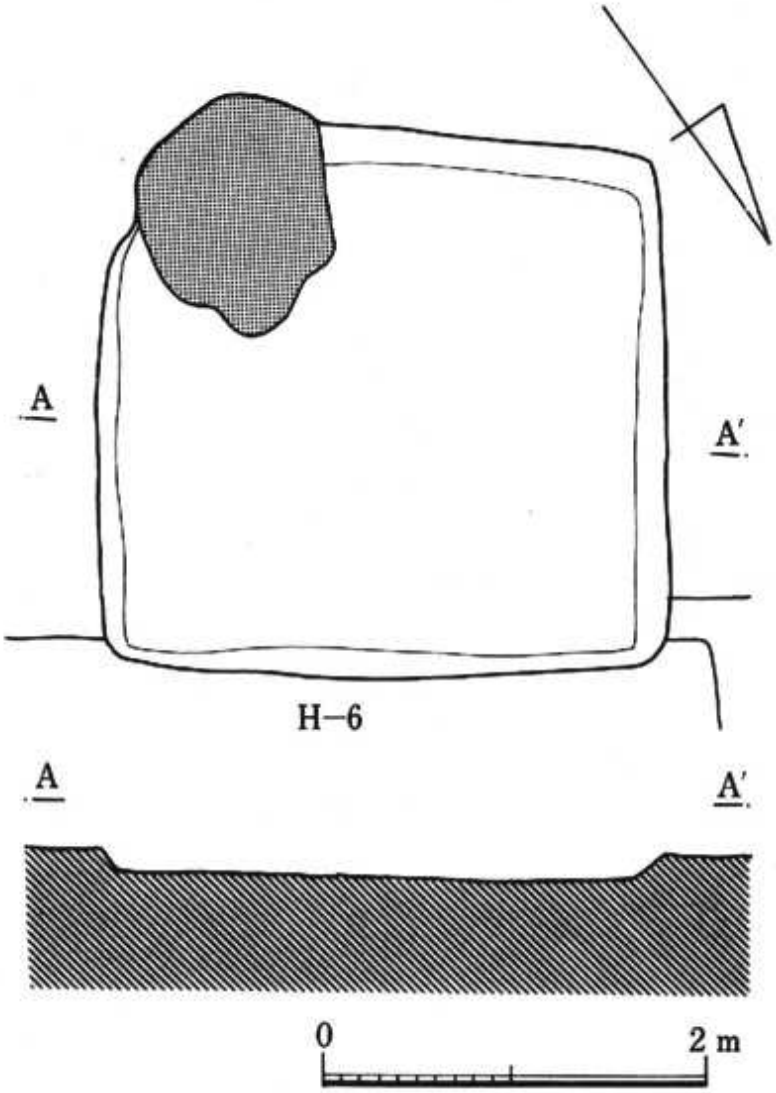
H—14 号住居址

1	坏	①. 1/3 遺存。推定口縁部径 13.4 cm、底部径 5.6 cm、器高 4.1 cm　②. 平底から口辺部はわずかに内弯気味に立ち上がる。　③. ロクロ整形。　④. 黒褐色を呈し、内面黒色処理。

3	坏	①. 1/5 遺存。推定口縁部径 12.8 cm。底部径 6.0 cm、器高 3.6 cm。 ②. わずかに上げ底の底部から口辺部は直線的に開く。 ③. ロクロ整形。 ④. 淡黄褐色を呈す。
4	坏	①. 1/3 遺存。推定口縁部径 13.2 cm、底部径 7.0 cm、器高 5.0 cm。 ②. 平底の底部から口辺部は直線的に開く。須恵器。火ダスキが残る。
5	甕	①. 1/8 遺存。推定口縁部径 23.2 cm。 ②. 胴部最大径は上半にあり、下半は収縮する。口縁部はやや内弯気味。 ③. 胴部外面ヘラケズリ。 ④. 黄褐色を呈す。

H—15 号住居址（第 39 図）

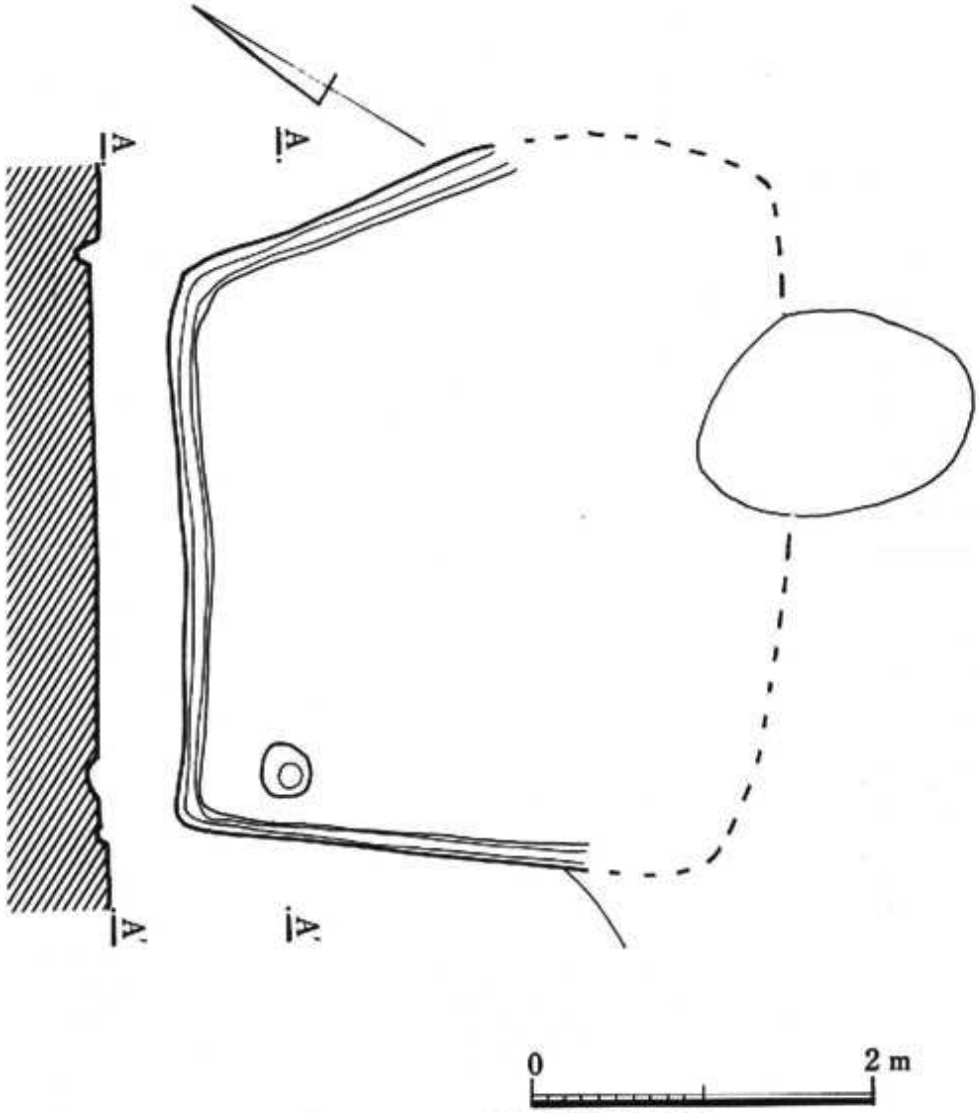
Y—3 およびH—6 号住居址を切る。軸長 3.0×3.0 m を測る正方形の住居址で、南東隅に石組を粘土で覆ったカマドを持つ。壁高は、20～25 cm を測りしっかりしている。



第39図　H—15号住居址実測図（1/60）

H－16号住居址（第40図）

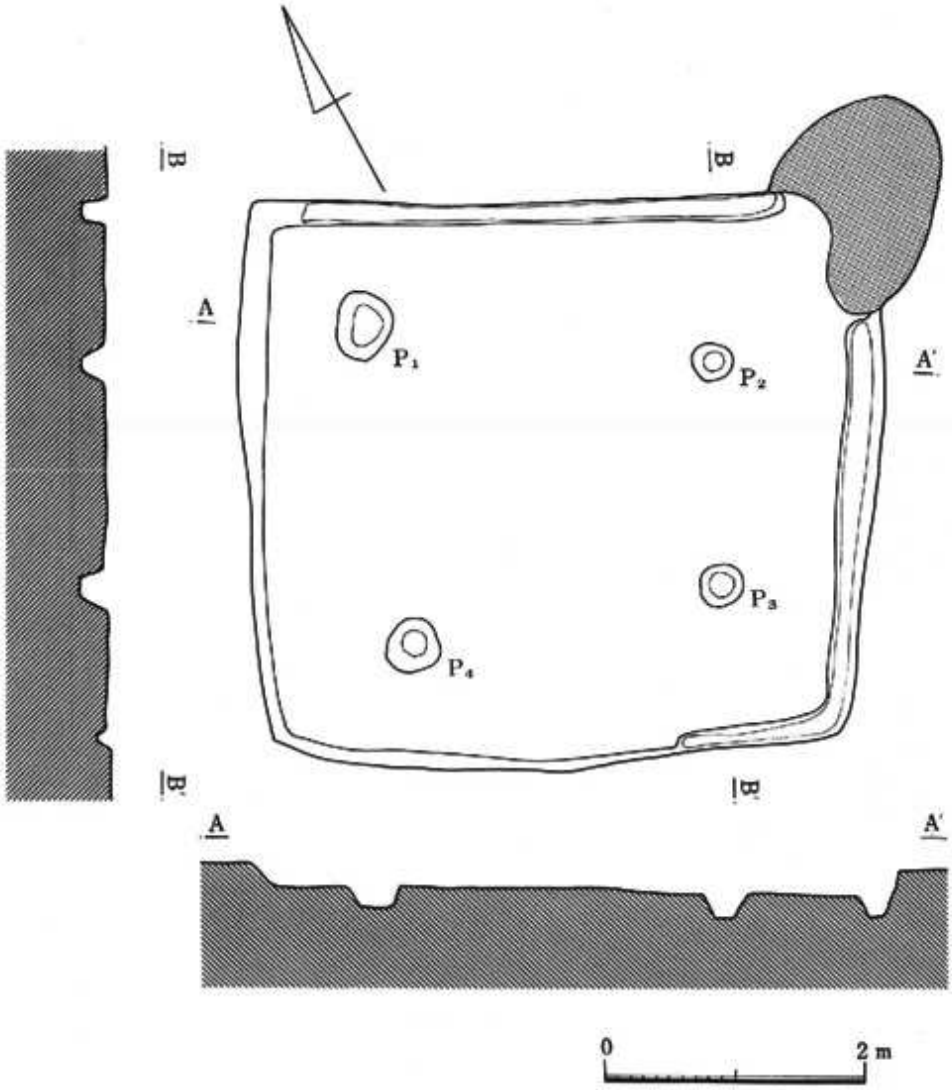
調査範囲の南隅に位置し、H－9号住居址を切り、推定軸長3.4×3.2mを測り、壁の確認できる部分では壁溝を認めるが、形態・内部施設とも判然としない。



第40図　H－16号住居址実測図（1/60）

H－17 号住居址（第 41 図）

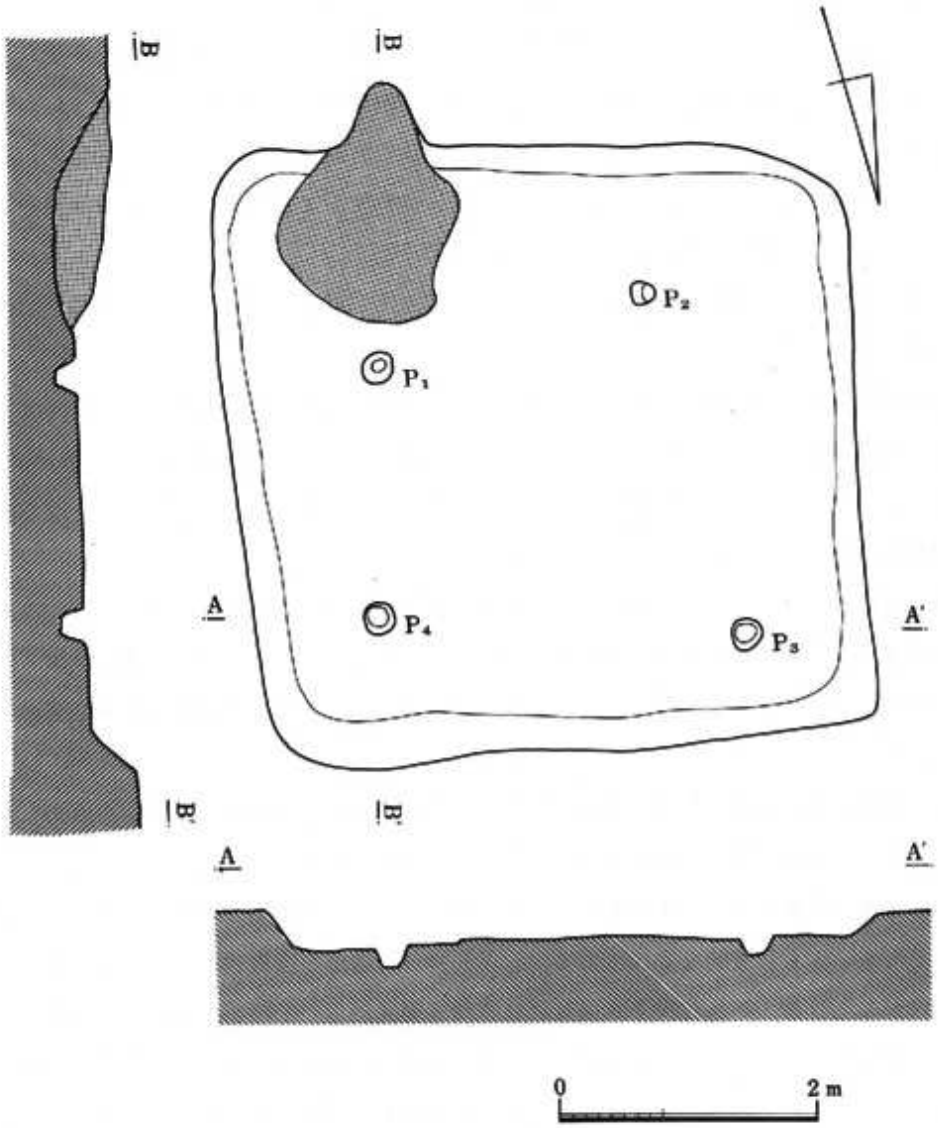
調査範囲の南東に位置し、軸長 4.5×4.5 m を測る方形の住居址である。カマドは北東隅に位置し、石組を粘土で覆って構築される。壁高は、25～30 cm を測り、北東壁、南東壁で壁溝が認められる。主柱穴は、P_1（径 30×26 cm・深さ 21 cm）・P_2（径 34×32 cm・深さ 23 cm）・P_3（径 40×34 cm・深さ 26 cm）・P_4（径 48×36 cm・深さ 26 cm）で、比較的揃っておりしっかりしている。



第41図　H－17号住居址実測図（1/80）

H—18 号住居址（第 42 図）

H—17 号住居址の北 3 m に位置する。軸長 4.8×4.7 m を測る方形の住居址である。カマドは南東隅に位置し、石組を粘土で覆い構築されている。壁高は 10～15 cm を測り、比較的しっかりしている。主柱穴は、P_1（径 25×23 cm・深さ 18 cm）・P_2（径 20×18 cm・深さ 22 cm）・P_3（径 24×23 cm・深さ 23 cm）・P_4（径 25×24 cm・深さ 26 cm）の 4 本でしっかりしている。



第42図　H—18号住居址実測図（1/80）

第Ⅳ章　各期の様相

1．縄文式土器について

縄文時代の遺構は検出されなかったが、前期土器片を中心として出土している。ここでは分類した各種の土器と総合的にみた土器群について若干考察を試みたい。

第一類は量的には少ないが一つのまとまりをもった一群である。a種は繊維を多量に含有するものの器壁は薄く、東海地方に広く分布している前期初頭の木島式に類似している。(文11) b種は口縁部に隆帯をめぐらすもので(主に一条)、類似品は埼玉県打越遺跡等から出土しており、同じく前期初頭の花積下層式に比定される。(文12) c種については資料不足であるが同一時期の所産と考えられる。したがって第一類は前期初頭の花積下層式併行である。

次に第二類土器は本遺跡出土の縄文土器の主体となる一群である。a種は前期前半の繊維を含有する縄文土器である。

b種は関東の関山式を中心に東北から関西までの広範囲な地域に分布したループ文である。

c種の縄の束は中部山岳の神ノ木式に多用されるもので、他の時期・地域にはきわめて少なく、本遺跡出土の土器を代表する文様である。類品は県内茅野市神ノ木遺跡をはじめ、近くでは山ノ内町伊勢宮遺跡から比較的多く出土している。(文3)(文6)

d種の丸組紐文は前種と同じ神ノ木式と関東の関山式に発達した文様である。関山式では千葉県幸田貝塚をはじめ神奈川県草山遺跡等から多量に出土しているが、(文7)(文8) 埼玉県関山貝塚・同打越遺跡からはほとんど出土していない。(文5)(文12) 本県においては神ノ木式の神ノ木遺跡・伊勢宮遺跡等から出土している。(文3)(文6)

e種の異条斜縄文も関山・神ノ木式に発達した文様である。本遺跡からは1片出土したのみであるが、神ノ木遺跡・関山貝塚・幸田貝塚等からは多量に出土している。(文3)(文5)(文8)

f種は特殊な櫛歯状工具による刺突文土器である。これは関東地方の関山式にはない文様で、神ノ木式のもっとも特徴的な文様である。しかし神ノ木遺跡の櫛歯状文とは文様の施文方法や器形に相違がみられる。それは神ノ木遺跡には花積下層式からの伝統といわれている複合口縁を呈する深鉢形土器があり、この刺突文はその深鉢の口縁部に鋸歯状にあるいは菱形文を構成するように細かく施文されている。(文3) 一方本遺跡出土土器の櫛歯状文は口縁部に沿って1～3条施文されるのみである。このような土器は前述した伊勢宮遺跡からも出土しており、(文6) 時間差というよりも

南信と北信の地域差と考えた方がよいと思われる。なお付け加えるならば、本遺跡からは複合口縁を呈するものは1片も出土していない。

f種で一緒に扱った円形刺突文および半月形の刺突文は関西方面の前期前半に発達した爪形文あるいは神ノ木式の櫛歯状工具による刺突文様の変形と考えられる。(文13) しかし筆者の乏しい知見では、その類例は見当らない。

g種とした爪形文土器は関山式に見られない土器で、関西的な土器である。この種の土器は神ノ木遺跡からも出土している。

h種とした平行沈線文土器は典型的な関山式であるが、(文5)(文8) 本遺跡からは1片しか出土していない。

中期以降の土器は出土量がきわめて少ないため考察はできないが、型式分類だけしておこう。まず中期の土器は最初が中期初頭の五領台式、次が加曽利E式である。(文14) 五領台式土器は1個体の土器がまとまって出土した。後期の土器は堀の内式である。(文15)

さて、本遺跡の今次の発掘では縄文時代の遺構は何1つ発見されず、遺物のみが比較的多く出土した。したがって土器をセットとして把えることができなかった。しかし、前述したようにほとんどが前期前半の関山式（長野県における神ノ木式）に併行するものであることは間違いなかろう。最近、関山式は3分案あるいは4分案が出されており、(文5)(文8) また神ノ木式も2型式以上に分離される可能性ありとされているが、(文3) いまだその実態はつかめていない。本遺跡の前期の土器は旧式となるのか新式になるのか、資料が少ないので速断は避け、結論は資料の増加を待ちたい。

次に本遺跡出土の縄文前期の土器の特徴についてまとめておきたい。

①. 特殊な縄文が異常に発達した。（特に縄の束・丸組紐）これは神ノ木式と同じである。

②. 竹管文があまり発達していない。

③. 刺突文に特殊な原体（円形刺突文・半月形のもの・櫛歯状工具）が使われている。

以上が挙げられる。特に竹管文が発達していないこと及び刺突文に円形・半月形が使われていることは本遺跡出土土器の特色であり、関山・神ノ木式にはない文様である。また神ノ木式の特徴となっている複合口縁を呈する土器も出土していない。

（付記：本報告の縄文土器の項は、特に縄文原体については、国学院大学の永峯光一先生講義ノートを参考にさせていただいたことを明らかにしておきます。第III章1）

2．弥生後期の土器様相について

(1). はじめに

長野西高等学校（旧長野女子高等学校）敷地内より箱清水式土器が発見されてからすでに80数年が過ぎ去った。[註1] 明治時代という古い発見にもかかわらず、編年作業は藤森栄一氏の論考[註2]の他は

まったく提出されず集成されるのは昭和31年のことであった。[註3]

『信濃考古綜覧』において長野県内の弥生土器が集成され、一応清水式土器の輪郭が定まってきた。弥生時代の執筆に当った桐原健氏は中・南信地方(天竜川流域)に唐沢原式・中島式を、東・北信地方（千曲川流域）に尾崎式、箱清水式の編年観を表わし、両地域圏の土器様相の違いを述べている。その後桐原氏は積極的に中部高地における弥生文化の研究を進め、安源寺遺跡の報告において、安源寺2類を尾崎式に安源寺3類を箱清水式にそれぞれ比定している。[註4] さらに数年後、桐原氏はそれまでの編年を訂正し、尾崎式を箱清水Ⅰ式、従来の資料に生仁Y8号住居資料・長野国鉄貨物基地遺跡資料を加えて箱清水Ⅱ式とし、安源寺3類はⅠ式に含めている。[註5]

最近では、笹沢浩氏が長野県の弥生土器編年を体系化し、千曲川流域における弥生後期を吉田式→箱清水式→御屋敷式と3分化している。[註6]

両氏の編年観にはかなりのくい違いが認められる。[註7] これは資料不足の結果生じたところであり、古くから知られる土器群でありながら今日まで混迷を続けている。当遺跡出土土器はそれを補う点からしても千曲川流域における弥生後期の良好な資料として提出し得るものと考える。

(2). 田草川尻遺跡出土土器の特徴

田草川尻遺跡では4軒の弥生後期住居地が検出された。住居址出土遺物個々についての観察点は前章で触れた。本項においては各形態の特徴を住居址間で対比していくこととする。

各住居址のセット関係は、Y1号住居址（以後Yは略す）で壺3・甕4・高坏2・蓋2、2号住居址は壺12・甕13・高坏8・鉢4・甑1・蓋1、3号住居址は壺5・甕12・高坏3・甑2、4号住居址は壺1・高坏1となっている。ただ、細片についてはここに含んでいないため数値的には多少増加するものと思われる。いずれにしても2号・3号住居址の遺物出土量は多くを数え、他を圧倒している。2号住居址と1号住居址とは互いの住居址主軸方向が同一であること、両住居址出土遺物間での接合が認められること（第9図3の口縁部に2号住居址出土の口縁部破片が接合）からかなり関連が強い。2号住居址の遺物出土状況が床面直上のものと多少浮いた覆土中より出土したものとが存在する。これは1号住居址で使用されたいくつかの遺物を2号住居址廃絶後、同凹地に廃棄したものと解される。ただ、遺物間にヒヤタスが感じられないことから時間差はほとんどないものと考える。このようなことから2号・3号住居址出土遺物を主体として、1号・4号住居址出土遺物をもってこれを補い論を進めることとする。

壺形土器

大形・小形の2形態がある。便宜上前者をa類、後者をb類とする。

1号住居址ではa類・b類がある。

a類：翼状口縁を呈し頸部がスムーズなカーブを描くものと、同じ口縁部形態をとり長頸で胴

の張るものとがある。文様は頸部に篦切T字文を配し口縁部には刷毛目調整痕を残す(第9図1)。翼状口縁帯と口縁内面は赤色塗彩を施す。また頸部に櫛描直線文と簾状文を組合せ、器表面と口縁内面に赤色塗彩する例（第9図2）もみられる。

b類：胴部から肩にかけて張りをもたせず翼状口縁を付す。基本的には大きさ以外a類とほとんど違いがない。頸部文様は篦描T直線文で地に刷毛目痕を残す(第9図3)。口縁内表面と胴部には赤色塗彩を施す。

2号住居址はa類が8～9個体とかなり多いのに対しb類は2個体にとどまる。

a類：口縁部形態を翼状を呈するものがほとんどで第11図5も幅は狭いが同一手法による。胴部は肩に張りをもたず、最大径を中半からやや下位に置く。胴下半で弯曲して底部へ収束するものと弱い稜線をもって収束するものとがある。頸部文様に箱清水式特有の櫛描T字文を配するものは1例のみで、櫛描直線文とボタン状貼付文の組合せ(第11図1)、刷毛目痕を地に残す篦切T字文（第11図4)、櫛描直線文（第11図5）等があり、かなりバラエティーがうかがえる。また口縁部から頸部にかけて刷毛目痕を残す例が目立つ。赤色塗彩は原則として翼状口縁帯、胴上半部、口縁内面に施す。

b類：頸部のしまりが弱く胴の張りも小さい。外反する口縁部を付し、底部へは丸味を帯びて移行するようである。頸部文様は櫛描T字文（第12図12）で、口縁部から頸部にかけて刷毛目痕の残存、胴部と口縁内面への赤色塗彩はa類と同様の手法をとる。

3号の住居址もa類、b類の2形態が認められる。

a類：肩の張る長球形の胴部に筒状の頸部が付す。口縁部は翼状をなすものと思われる。胴下位に最大径を置き強く屈折して直線的一若干内側にこける一に底部へ収束する。頸部文様は篦描T字文に画 ·し（第16図2）器面はきれいに磨いて文様帯以外と口縁内面に赤色塗彩する。器内面は刷毛目痕を明瞭に残している。

b類：口縁部は短かく外反し頸部に篦描直線文を施こす。器内面には刷毛目痕が明瞭に残る。

4号住居址はa類1点のみの出土である。器形的には3号住居址別に酷似する。頸部文様は櫛描T字文に簾状文を組合せている（第19図1)。赤色塗彩も同様に施すと思われる。

以上、壺形土器を住居址ごとにみてきた。基本的には大形、小形の2形態の存在が共通して認識できる。ただ、1号・2号住居址と3号・4号住居址の遺物を対比すると、器形では肩部・頸部形態、加飾・調整では文様構成、施文工具・赤色塗彩の部位・刷毛目調整痕残存の有無等かなりの差異が認められる。

甕形土器

基本的には大形・中形・小形の3形態が認められる。便宜上、a類・b類・c類として取り扱

う。ただし、1号・4号住居址においては遺物の出土量も少なく欠落する形態がある。

1号住居址はb類とc類は認められるがa類は欠落する。

b類：最大径を胴中半よりやや上位に置き若干内弯気味に立ち上る口縁部を付す。文様は頸部に連続する簾状文を施し、口縁部から胴中位までは波長・振幅とも小さく整った櫛描波状文を充塡している（第9図4）。

c類：口縁部破片のみで全形を知るものはない。口縁部は若干内弯気味に立ち上るものとゆるやかに外反するものとがある。文様は頸部に連続する簾状文（第9図7）または3回刻みの簾状文（第9図6）を施こす。口縁部には波長・振幅の整った櫛描波状文が施こされるが波状文帯同志かなり重なり合う。

2号住居址は3形態がそろい遺物量も豊富である。

a類：最大径を胴中位より若干上方に置き、ふっくらと丸味のある胴部に若干内弯気味に立ち上る口縁部が付すものと、最大径を胴上位に置き短かく外反する口縁部が付すものとがある。文様は頸部に連続または2回刻みの簾状文を回周し、口縁部から胴中位まで櫛描波状文を施している。短かく断続する櫛描波状文（第12図13）や、間隔を保って波状文帯の重なり合いを避け継ぎ目が目立たないように注意深く施す櫛描波状文（第12図14）などがみられる。胴下半部の器面調整はミガキを加えるのが通例であるが、刷毛目痕をそのまま残すもの（第12図14）も認められる。

b類：最大径を胴上位に置き、丸味の強い胴部に内弯気味に立ち上る口縁部を付す。頸部には簾状文を施す。連続するもの（第　図17・18・21）、2回刻みのもの（第　図19・20）、3回刻みのもの（第13図16）がある。口縁部から胴中位に施こされる櫛描波状文はかなり重なり合うが帯としての意識がうかがえる。波状文は振幅・波長とも整っている。また、18・21は櫛描波状文の施文手法がa類の13と同一手法をとる。同一人による製作であろうか。さらに13と18は焼成・胎土とも酷似していることで同時製作と推測される。

c類：球状の胴部に外反しながら端部で内弯気味に立ち上る口縁部が付すものと、やや肩に張りをもたせ口縁部が長く伸び、端部で若干内弯気味になるものとがある。ともに頸部には連続する簾状文を施し、口縁部から胴部にかけ櫛描波状文を充塡している。ただ前者の波状文が比較的乱れている（第13図23）のに対し後者の場合かなり整い波長・振幅とも一定している。

3号住居址も3形態がそろい遺物量も豊富である。

a類：最大径を胴上位に置き、肩の張りが強く頸部での収約が弱いところから全体的に寸胴な感のする形態を呈す。太身なプロポーションの6と細身でスマートな7がある。文様は頸部よりやや下方に簾状文を施し、口縁部から胴中半までは櫛描波状文を充塡している。6の場合、2回刻みの簾状文と波長・振幅とも小さく実に緻密な櫛描波状文を施し（第16図6）、7は連続す

る簾状文を2帯回周させ、振幅の大きい櫛描波状文を施している。ともに胴下半部にシガキを加えて仕上げている。

b類：胴上位に最大径を置き肩の張りが強く、外反する口縁部は長く伸びる。頸部には櫛描直線文を回周し、口縁部から肩部まで乱れた櫛描波状文を施す（第17図8）。

c類：頸部の収約が弱く寸胴な形態を示すものと肩の張りの強いものとがある。口縁部はともに長く伸びる。櫛描波状文はかなり乱れて振幅も大きい。頸部のやや下位に施される簾状文は規則性に欠け、4回刻みと5回刻みを混合したり（第17図9）、2回刻みと3回刻みとを混合するもの（第17図10）がみられる。文様に対する規制が薄れてきているのであろうか。4号住居址には認められなかった。

以上、甕形土器について概観したが、1・2号住居址と3号住居址ではかなりの変化が認められる。器形では前者の場合胴部に丸味をもたせ最大径を中位からやや上方に置き若干内弯気味に開く口縁部が付すのに対し、後者では肩に張りをもたせ口縁部が外反して長く伸びスマートな形態を呈す場合が多い。文様では比較的きれいにまとまる簾状文や櫛描波状文に対し、規則性を欠き波状文帯の乱れが目立つ。

台付甕形土器

2号住居址より1点出土している（第13図25）。

小形の台付甕で、かなり寸づまりな胴部に短かく未発達な内弯気味に立ち上る口縁部が付す。頸部には連続する簾状文を施し口縁部から胴中半までは櫛描波状文を満たす。波状文帯の乱れはなく、かなり整っている。

高坏形土器

高坏は全住居地に認められる。しかし、脚部または坏部の破片が多く、全形を知り得るものはない。大形品と小形品とがあり、便宜上前者をa類、後者をb類とする。

1号住居址は脚部2点が認められる。

a類：大きく開口する脚にやや深身の坏部が付すようである。脚内面に刷毛目調整痕を残す他はみがかれて赤色塗彩を加える。

2号住居址は8点とかなり多くほとんどが大形で小形品は1点に留まる。

a類：坏部の口縁部が水平に外方へ折れる特徴をもち、同部位に突起の付されるものが多い。胴部は弯曲しながら底部へ収束するものと、直線的に収束するものとがあり、箱清水式土器で特徴的に出現する胴中位に稜線を生ずるような折部は認められない。脚部は長く端部で外少大きく開く。器面は丹念にみがき赤色塗彩する。脚内面は篦状工具によりケズリかナデを加えている。

3号住居址は3点出土している。3点とも小形品である。

b類：坏部は深身を呈すようで接合部の径はかなり細く、脚部は弯曲しながら開口する。器面は赤色塗彩する。脚内面は縁部に刷毛目痕を残すのみである。

4号住居址はa類が1点出土している。それは、2号住居址30に酷似するが本例の場合は口縁部に突起が貼付されない。

以上、高坏形土器について述べたが、2号住居址では大形品が多く、口縁部形態が特徴的であるのに対し、3号住居址では大形品はない。また2号住居址の場合、突起の付される例が多いのが目立つ。

鉢形土器

2号住居址にのみ認められる器種である。口縁部に2孔1対の小孔が穿たれたものと、小孔のないものとがある。ともに浅身の形態で36のように底部が大きく極端に浅く、底面にまで赤色塗彩の施される例もある。通常赤色塗彩は底面をのぞく器面に施す。小孔を有するものは蓋と関連して製作しているものと思われるが、蓋が付随するのか、それ自体が蓋としての機能を満たすのかは不明である。

甑形土器

2号・3号住居址に認められる。浅身のものと深身のものとがある。

2号住居址は浅身の形態を呈すものが1点出土した。若干内弯気味に開口する。底部周縁に篦削り痕を残すが、体部はよくみがかれている。

3号住居址では浅身のものと深身のものとがある。浅身のものは2号住居址例と同様な形態を呈すが、調整段階で雑な面をみせ刷毛目痕を所々残している。深身を呈すものは外反しながら開口し、器表面にはナデ痕、円面には刷毛目痕を残す。器形・調整とも2号住居址例とは異なる。

蓋形土器

1号・2号住居址において認められる。大形品と小形品があり、便宜上前者をa類・後者をb類とする。

1号住居址は大形・小形がある。

a類：笠状に開く体部につまみ部が付す。天井部は無孔である。

b類：小さなつまみ部が付す。天井部には小孔を穿つ。手捏様の小形品である。

2号住居址は大形品が1点認められる。

a類：笠形を呈し、つまみ部はさほど明瞭に作出されていない。天井部には小孔を穿つ。器面

はナデ調整される。

以上、各形態ごとに概観してきたが、田草川尻遺跡において基本的なセット関係は次のようになる。壺・高坏・蓋は大形・小形の2形態、甕は大・中・小の3形態、台付甕、鉢甑は1形態である。各住居址において出土量にかなりの差が認められ、欠落する器種のあることは先述したところである。ただ、2号・3号住居址を対比した場合、セット関係はほぼ同一の様相を示しながら、両住居址の各形態間にかなりの差が認められることに関しては注目に値する。

(3). 田草川尻遺跡出土弥生土器の位置について

中部高地における弥生後期土器は櫛描文で盛んに飾られる。この櫛描文手法は畿内、東海地方の影響で発生するのだが、中部高地の場合先述地域とは異なる手法を用いて櫛描文を描くことから中部高地型櫛描文と称している。[註8] 中部高地型櫛描文は弥生中期後葉から散見するが、[註9] 後期に入るや千曲川流域においてかなり盛行し、独自的な発展をとげるとともに分布も広範囲に拡大する。[註10] 当遺跡は中部高地型櫛描文分圏のうちでも北端部に位置するが、その手法を用いる土器群の1号・2号住居址出土土器と3号住居址出土土器は各形態ごとに器形・文様・調整手法の細部でかなりの差異が認められる。この差は時間差として捉えることができる。ここでは各住居址出土土器の編年的位置について論ずることとする。

笹沢氏の吉田式・箱清水式・御屋敷式の後期3型式区分は千曲川流域において基調をなしているかにみえるが、吉田式設定資料[註11]が一括出土資料としての決め手を欠く状態でセット関係で弱い点があり、弥生中期末の百瀬式土器が混入している可能性がないとは断言できない。最近、笹沢氏は松代町屋地遺跡出土上器[註12]をもって吉田式土器を補強しているが、細部で異なる点も認められる。弥生後期編年において解消せねばならぬ疑問点の1つである。そこで1号・2号住居址出土土器は前項での観察点から笹沢氏の提唱する弥生後期前葉の吉田式土器に類似した資料も多く、少なからず吉田遺跡出土土器と併行関係にあるものもあろう。弥生後期前葉と考えて良いようである。3号住居址出土土器は当地域においては東長峰遺跡[註13]・柳町遺跡[註14]・安源寺遺跡[註15]等の資料に類例が求められ、頭初藤森氏が設定した箱清水式に当たる。桐原編年では上述遺跡出土土器について新旧混同がみられ、笹沢氏が指摘するように[註16]幾多の問題を残している。

ここで改めて千曲川下流域の編年を田草川尻遺跡出土土器を基礎に整理してみたい。当該地域の後期前葉における壺形土器の場合、田草川尻遺跡1号・2号住居址出土土器からもわかるように頸部文様が多種にわたり箱清水式壺頸部文様である櫛描T字文の前段階的性格を示すのが特徴である。施文工具も櫛状工具だけでなく、中期末葉の伝統と思わせる篦・棒状工具を多用している。赤色塗彩は口縁部内面・翼状口縁帯・胴上半部に施こすのを常とし、頸部には刷毛目調整痕を意識的に残すためか塗彩しないことが多い。器形は中期末の土器群を踏襲し肩に張りをもたせない長頸壺の面影を残す。千曲川下流域については翼状口縁を呈す形態の壺形土器[註17]が多いようだ

が、城端遺跡出土壺形土器のように単純に外反するものもある。頸部から胴部へはスムーズなカーブを描き胴下半部でくびれることがないため全体は無花果形を呈す。甕形土器は吉田遺跡のものと口縁部形態で類似する例もあるが若干異なる様相を示す。吉田遺跡例では中期末葉の伝統を強く感じさせほとんど変化の認められないものもあるが、当遺跡の場合はかなり画一化され球状の安定した胴部形態を示している。櫛描波状文は吉田遺跡、屋地遺跡、城端遺跡同様整っている。外反する口縁部は若干内弯気味に立ち上るのが特徴で、古瀬遺跡、海戸遺跡などの中期末葉にみられる手法と関連しつつもかなり発展していることがうかがえる。高坏形土器もまた中期の伝統を踏襲しており大形品も目立つ。鉢形土器は後期中葉のそれとはほとんど変らず、桐原氏も指摘しているように[註18]体部の浅いものが多い。

後期中葉のいわゆる箱清水式土器は3号住居址で良好なセットがみられる。壺形土器は頸部文様が統一され櫛描T字文一色となり、赤色塗彩も広範囲に施こす。器形は胴上半部が長球形をなし、下半部に稜線をもって屈折しくびれを生じて底部へ収束する。千曲川下流域の場合、東長峰遺跡・柳町遺跡・安源寺遺跡などのように口縁部は翼状を呈すものが多いと思われる。長野市・更埴市・上田市の千曲川中流域においては単純に外反する口縁部形態の多いことを思えば、後期中葉においてかなり地域色の変化に富んだ文化様相を示すようである。笹沢氏も壺形土器にみられる地域差を指摘している。[註19] 甕形土器は前葉のものにくらべ口縁部が発達し肩に張りをもたせてスマートな器形を呈す。櫛描文は乱れを生じ頸部文様も規則性を欠き乱雑となる。波形は波長に対して振幅を増すのも当期の特徴である。高坏形土器は当住居址では明確に捉えられないが、坏部中位で強く折れて稜線を作出したものが一般化するようである。

このように各形態とも弥生後期前葉から中葉にかけての変遷はかなりスムーズな移行を示している。ただ、田草川尻遺跡においては、中期末からの流れの中で壺形土器・高坏形土器がかなり保守的な色彩を残しているのに対し、甕形土器は進歩的であり箱清水式への移行がスムーズである。また、後期前葉から中葉に移行するにつれて文様は構成面でかなり簡略化されていくとともに、甕形土器については機能的側面を強調するあまりからか乱雑にさえ陥っている。

結局、田草川尻遺跡の1号・2号住居址出土土器を弥生後期前葉に、3号住居址出土土器を後期中葉の箱清水式に位置づけたが、長野市・更埴市周辺とは土器様相を微細な点で異なりをみせている。農耕社会における地域的統制力の分化による政治圏の相違を示しているのであろうか。今後の資料の集積を待ちたい。

3．古墳時代の様相

本遺跡の古墳時代の遺構はＨ４、５、６、７号住居址がある。

４号住居址からは古い様相をとどめた遺物を検出している。坏形土器は口縁部の長くのびた形態をとっており、山岸遺跡などでは内面黒色に仕上げたものと極似している。ただし、本住居址出土品は黒色に仕上げはなされない。他の２例はともに古手の部類になり、本住居址の時期を和泉期から鬼高初期に位置するものと考えてよさそうである。

５号住居址出土遺物は高坏形土器を中心とした土器セットをもち、和泉期からよくみれる様相である。しかし、脚部は円筒形の脚台部から鋭く外反する裾部へと終結しており、後出的要素をもった形態である。坏形土器は口縁部が短かく外反するものや胴部のケズリをみると鬼高初期に時期を求めてもよいようである。また、甕形土器も胴部形態はやや長胴化していくようで、該期の所産と考えて差し支えないものと考える。

７号住居址は遺物も少なく明良な時期決定はできないが、５号住居址とさほど変わらない時期のようである。

以上、４軒の住居址は地床炉をもち、カマドの使用は認められない。カマドの有無については時期決定の有力な手段となるものの、和泉期にカマドの出現をみたり、鬼高期の住居址でも地床炉をもつのみの場合など、一概にその出現を論ずることはむずかしい。

また、和泉期の住居址の堀り込みは浅いものが多く、深くきちんとしたものは新しい時期にくだるものが多く、さらに、大形住居も多出している。５、６号住居址はしっかりと掘り込まれたきれいな住居であり、第１次調査で検出した大形住居址とも田草川尻遺跡を面的に把握する場合、かなり関連するであろう。同様に、第１次調査において検出した祭祀遺構の存在も、今回の集落の時期より多少新しくなるとはいえ、遺跡周辺部をとりまく連綿とした歴史的背景を感ぜずにはいられない。

このようにいくつかの観点から、先述したように当調査において検出した古墳時代の遺構は和泉期から鬼高初期の所産と考えて差し支えあるまい。

なお、一志先生の考えられた古代における交通路を示唆する上でも、当遺跡は貴重な資料を提供したものと考えられる。

5．歴史時代の様相

調査において検出された歴史時代の遺構は、Ｈ－８～Ｈ－18号住居址の計11軒である。いずれ

も出土遺物により平安時代に位置づけて良いであろう。

古墳時代以降、竪穴住居の平面形は長方形がさらに少なくなり、和泉期には四隅の角張った方形平面が現われる。そして規模的には鬼高期初期に大型住居の最盛期を向える。以後、竪穴住居の狭小化が始まり、当平安期にはほとんどが小型化する。

出土した11軒の竪穴式住居址は、その規模が最小2.6×2.6m、最大5.6×5.4mであってほとんどが方形プランを呈している。柱穴については、4本柱構造をとるものが8・17・18号住居址の3軒であり、無柱穴5軒、1本柱が2軒である。4本柱をもつ住居址は床面積が21m²以上あり、他はすべて20m²以下で、最小は6.7m²であった。この傾向は一般的に認められる事象であって、床面積20m²は4本柱を必要とするか否かの境界面積と考えられているようである。本遺跡でもそのような傾向が明確に示された訳である。

さて、古墳時代以降本遺跡を中心に清川扇状地扇端部にかけて広く集落が営まれていたと推測される。このことは第II章でも若干触れたとおりであるが、特に平安期においては北側の中町遺跡と連続した一大集落であったろうと思われるのである。中町遺跡における多量の遺物や清川尻遺跡における住居址の出土がそれを物語るものであろう。

平安末期における志婁氏は、こうした基盤の上で出現し得たものであると考えられる。

第V章　まとめ

飯山市南端の秋津地区は、飯水、岳北地方でも重要な遺跡が存在する。例えば多数の土偶を出土した深沢遺跡、魚形線刻画のある土器片を出した晩期縄文式文化の信濃における主要な遺跡である山の神遺跡、前方後方墳として知られる勘介山古墳等である。

田草川尻遺跡は、土器、石器を多量に出土する場所として地元の人達には古くから知られていた。

昭和47年、国道117号線静間バイパス路線の敷設に伴ない第一次調査が私達の手によって行なわれた。その結果、田草川尻遺跡は縄文時代、弥生時代、古墳時代、歴史時代（古代～中世）にわたる大複合遺跡であることが再確認されたのであった。遺構面では多数の土壙、2ヶ所にわたる祭祀跡が検出され、古墳時代、歴史時代の人々の精神生活を知る上で重要な資料を私達に提供してくれた。

静間バイパス路線の開通により、道路沿い次第に開発され人家、倉庫、畜舎等がなちならぶようになった。昭和52年、A企業が田草川の最末端地点に工場建設の計画のある旨を飯山市教育委員会に提示した。このため急拠第2次発掘調査が施行されることとなったのである。

私達は、第2次発掘調査を通じて多くの成果を収めた。概要を示すと次の通りである。縄文時代については、縄文時代前期の関山式併行土器、有尾式土器が出土した。当飯山地方についてみれば、今回ほど関山式併行土器がまとまって出土したのは初めてであり、今後当飯山地方の該土器研究の主要な資料となることは確実である。縄文前期土器が量的に出土したにもかかわらず遺構の発見はなかった。これは、弥生時代以降ここに住みついた人々によって破壊されてしまったからであろう。今回の発掘地点に隣接した南側の畑、更にはバイパス路線西側の畑にも縄文前期土器片が散在しているところからすると大規模にわたる縄文前期の集落が存在した可能性が予測でき得るのである。立地面からみても南大原遺跡、有尾遺跡と同様に千曲川に面した地点にあり、縄文前期の人達の経済生活を考える上で重要な示唆をあたえてくれている。

次に弥生時代について触れてみよう。住居址は、4軒発見されている。いずれも時代的には、弥生式後期に所属するものである。4号住居を除く他の3住居址は出土遺物が豊富であった。更に1号住居址と2号住居址の出土土器に接合関係が認められ、この2軒の住居址はほぼ同時期に構築されたものと考えられる。これに対して3号住居址の出土土器は、1・2号住居址出土土器よりも後出する様相を示しており、1・2号住居址が廃絶された後構築されたものと見なし得るのである。3軒の住居址から出土した土器は、いずれも弥生式後期に所属するものであった。太

田文雄によれば、1・2号住居址出土土器は、弥生式中期末の伝統を引き継ぎつつも後期の色彩を強く保持しており、善光寺平に分布する吉田式土器との関連を示しつつもなお若干の相異を認めざるを得ないとしている。3号住居址出土土器は、弥生式後期の最盛期にあたる土器であるとしている。そして1・2号住居址出土土器を弥生式後期前葉に、3号住居址出土土器を同中葉の時期に年代的位置を与えるのが妥当であるとしている。いずれにしても飯水、岳北地域の弥生式土器の編年を考える上に重要な指針をあたえる資料であることは事実である。

次に古墳時代についてみよう。出土土器は鬼高期に所属するものである。出土土器の中には、和泉期の様相を若干残している面もみられるところからして、鬼高期の中でも古い段階に年代的位置を与えるのが妥当ではないかと考えられる。住居址の面からみても、鬼高期にカマドが普遍的であるとされているが、検出された住居址にはカマドの設備は全く認められていない点からも古式的様相を示すものと思われるのである。検出された住居址は記述されているように大形の住居址であった。そして、住居址の配例も意外に規則正しく配列されており、計画的に造成されたのではないかと思わしめる面をもっている。

飯水、岳北地方における鬼高期の調査例はきわめてとぼしい。そういう意味では、この時期の研究は今後の重要な課題といえるであろう。従って、本報告書では、鬼高期の様相については簡単に触れるにとどめた。今後、資料の集積につとめ鋭意鬼高期を中心とする古墳時代の様相を究明してゆくつもりである。その折に本遺跡出土の鬼高期の資料が主要な役割を果すことであろう。

歴史時代の遺構、遺物についても古墳時代と同様である。古代末から中世にかけての重要な資料を私達に提供したが、現在の私達の力量では、本遺跡の出土資料をもって直接的に古代末から中世にかけての歴史的アプローチはできない。この点についても今後の課題といえるであろう。

最後に本遺跡調査に指導、助言を下さった樋口昇一、桐原健、丸山敏一郎、関孝一諸氏、御協力頂いた地元の皆様に深甚なる謝意を表する次第である。

註

縄文時代（第Ⅲ章1．第Ⅳ章1）

1．坪井正五郎「西ヶ原貝塚探究報告六」人類学雑誌第9巻第98号、明治27年
2．山内清男『日本原始美術』講談社、昭和39年
3．信濃史料刊行会編『信濃考古総覧』昭和32年
4．宮城県教育委員会『今熊野遺跡調査概報』昭和48年
5．埼玉県教育委員会『関山貝塚』昭和49年
6．長野県教育委員会編『下高井』昭和28年
7．神奈川県教育委員会『草山遺跡』昭和51年

8．松戸市教育委員会他『幸田貝塚』概報１～７、昭和46～53年
9．富山県教育委員会『富山県埋蔵文化財調査報告書II』昭和47年
10．村越潔『円筒土器文化』雄山閣、昭和49年
11．南知多町教育委員会『清水ノ上貝塚』昭和51年
12．富士見市教育委員会『打越遺跡IV』昭和51年
13．森川昌和「福井県鳥浜貝塚をめぐる２、３の問題」物質文化１、昭和38年
14．西村正衛「縄文文化――東北・関東――」新版考古学講座３、雄山閣、昭和44年
15．岡本勇「縄文文化の発展と地域性――関東」日本の考古学II、河出書房新社昭和40年

弥生時代（第IV章２）

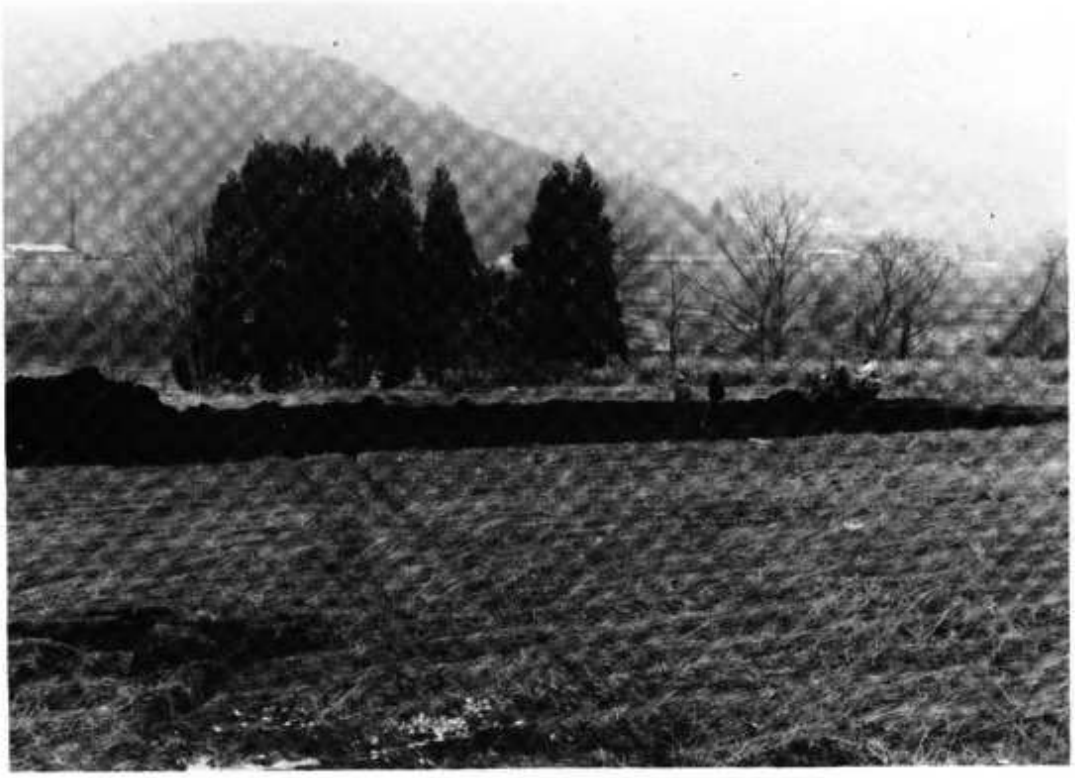
1．森田鉞次郎「長野市に於ける弥生式土器の発見」東京人類学会雑誌
2．藤森栄一「信濃の弥生式土器と弥生式石器」考古学７～７昭和11年
3．桐原健「弥生式文化」信濃考古綜覧下巻」昭和31年
4．桐原健他『安源寺』長野県考古学会研究報告二昭和42年
5．桐原健「北信濃の後期弥生式土器」一箱清水式土器とその発現について一 志茂樹博士古寿記念論集昭和46年
6．笹沢浩「入門講座、弥生土器一中部高地３」考古学ジャーナル134昭和52年
7．笹沢氏は桐原氏の誤正した編年案に対し、地域的、時間的矛盾を指摘している。なお、花岡弘氏は桐原の編年を支持している。「信濃の古式土器」信濃31-４昭和54年
8．佐原真「弥生式土器製作技術に関する二、三の考察」私たちの考古学20昭和34年
9．笹沢浩氏は先中部高地型櫛描文と呼んでいる。
10．中・東・北信地方をはじめ信越県境付近、群馬県、埼玉県北部、東京都西部、神奈川県北部地方など笹沢浩氏
11．笹沢浩「箱清水式土器発生に関する一試論」信濃22-11昭和43年
12．荒川博明・大川清『長野市松代屋地遺跡』日本窯業史研究所報告第４冊　昭和52年
13．桐原健「北信長峰丘陵における弥生式遺跡」考古学雑誌45-１　昭和31年
14．註13に同じ
15．註３に同じ
16．註10に同じ
17．高橋桂「北信濃城端遺跡調査略報」信濃21-７　昭和44年
18．註４に同じ
19．註５に同じ

その他参考文献

1．飯山北高等学校地歴部「深沢遺跡」1966
2．飯山北高等学校地歴部OB会"遺跡分布調査報告Ｉ」1977

3．飯山市教育委員会「飯山市田草川尻遺跡発掘調査報告書」1973
3．飯山市公民館秋津分館 「秋津村史」1966
4．高橋柱 「魚形線刻画のある土器片」信濃第24巻11号 1972

図版1

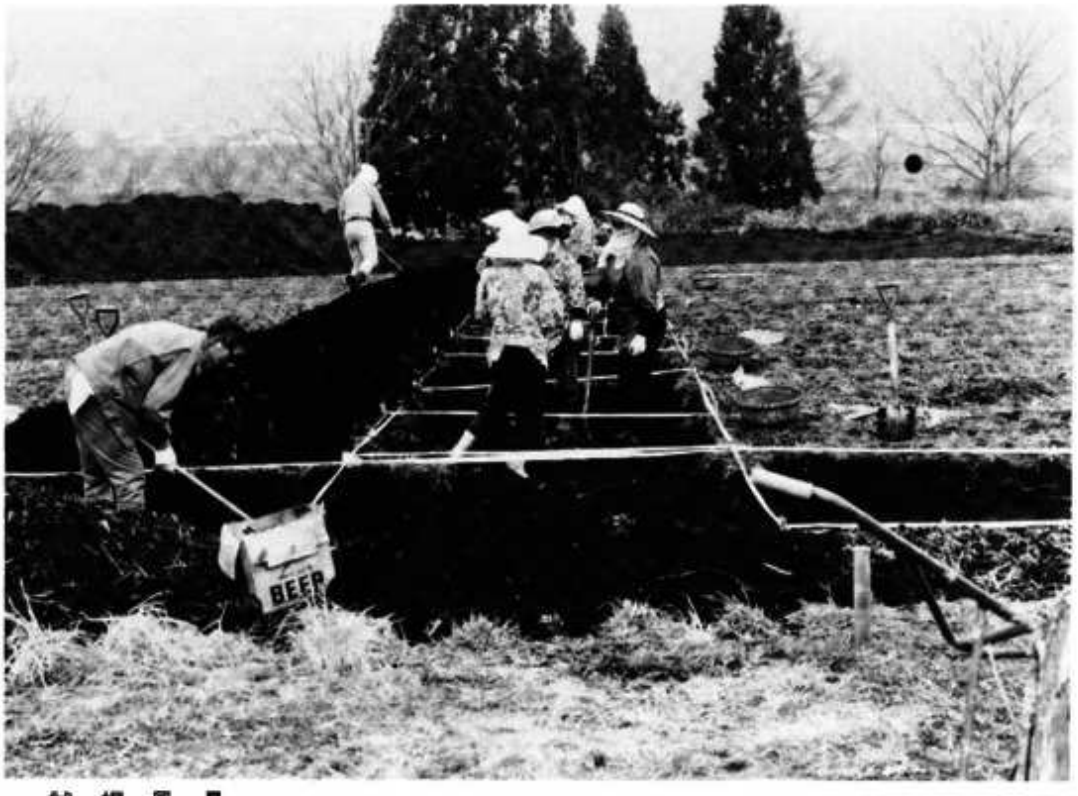


遺 跡 近 景

遺 跡 近 景

図版2

地鎮祭風景



試掘風景

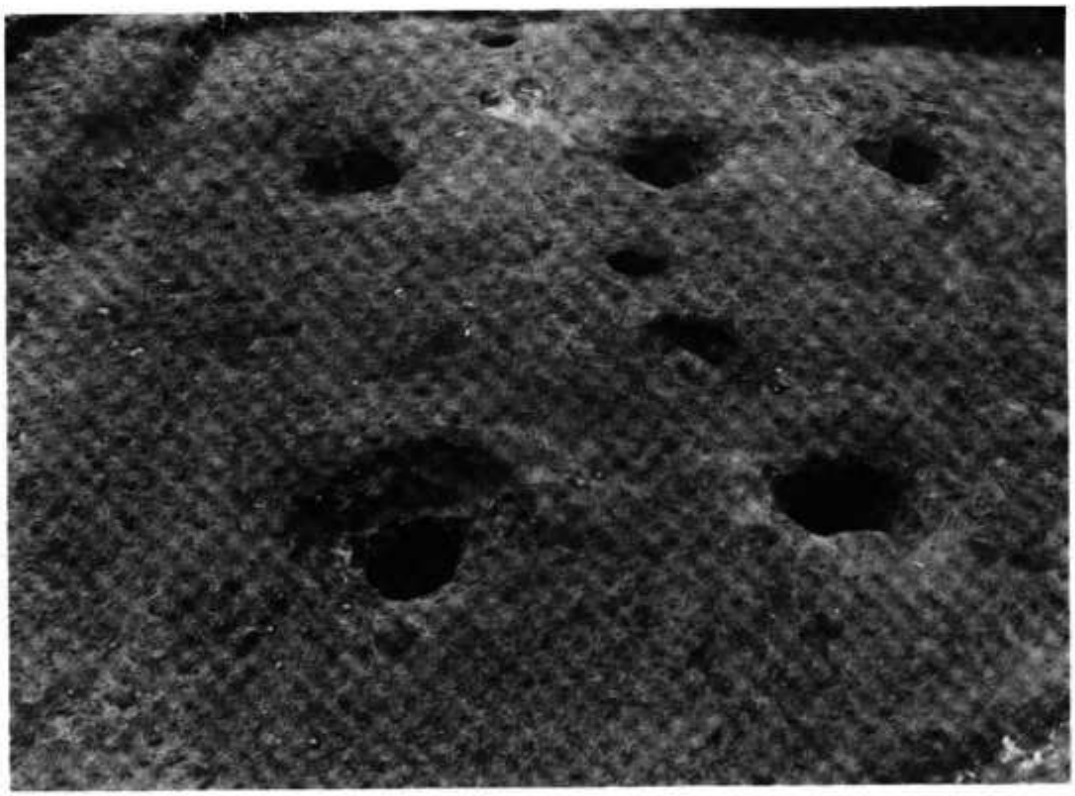
調査風景

同　上

図版4

調 査 風 景

測 量 風 景

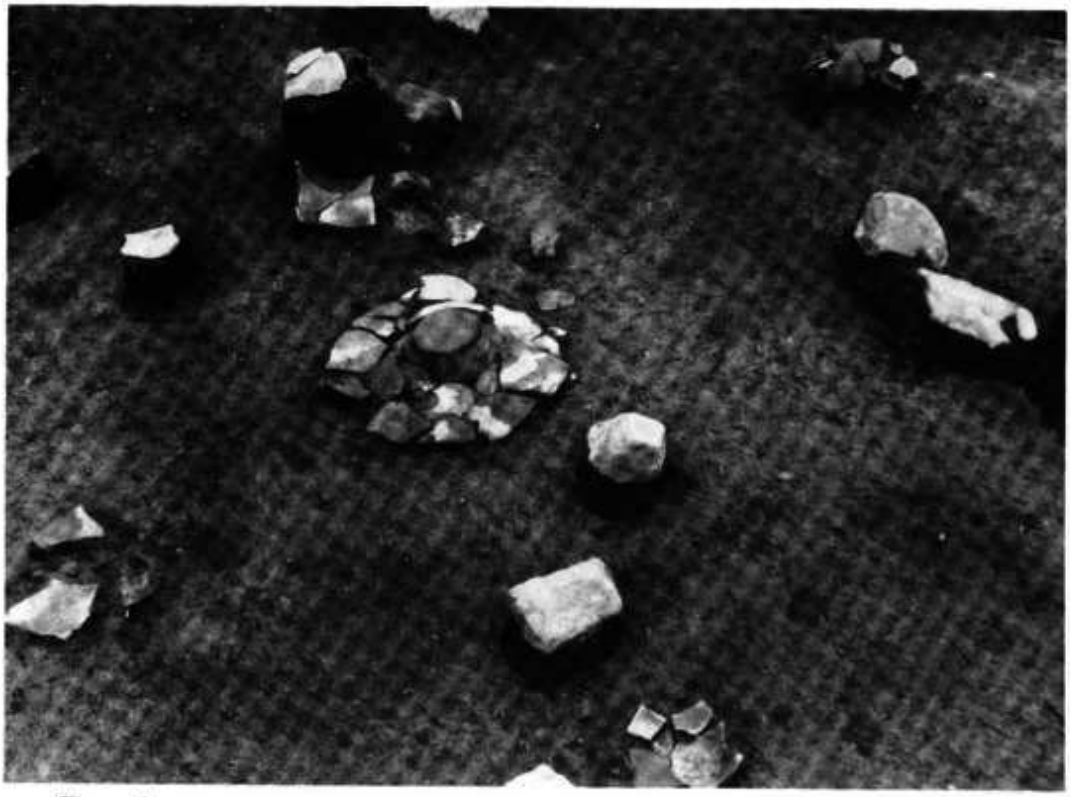


Y－2号住居址全景

Y－2号住居址遺物出土状況

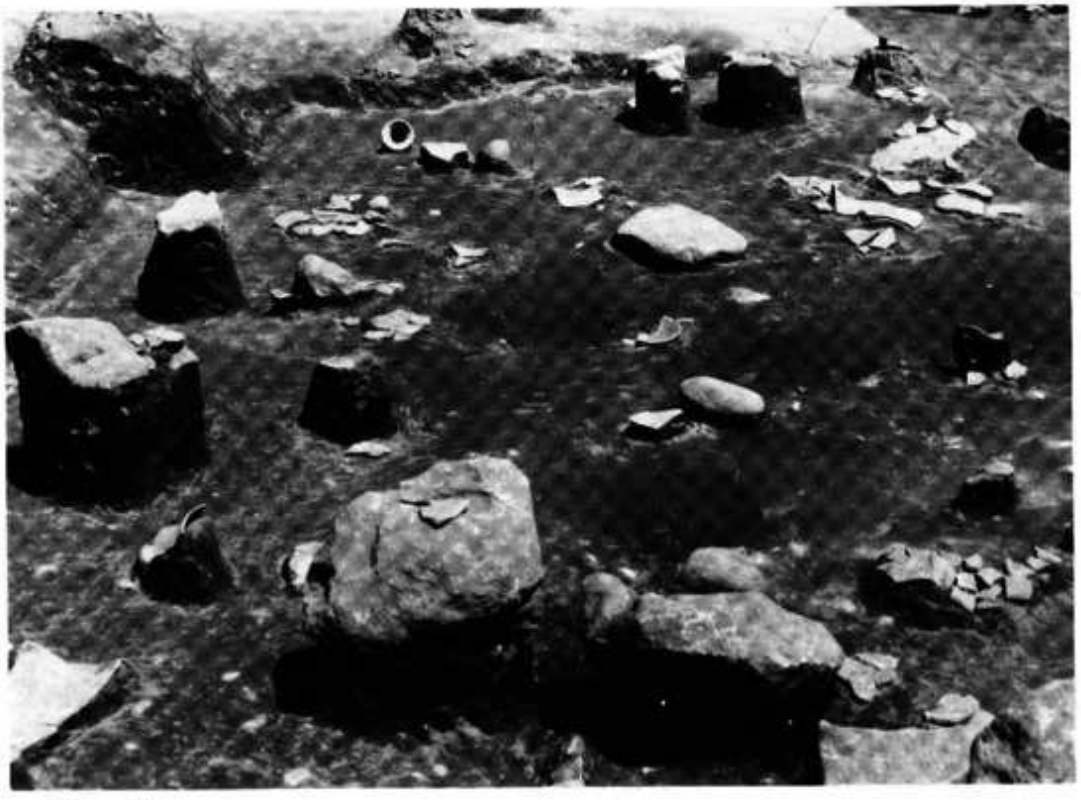
図版6

Y－2号住居址　遺物出土状況



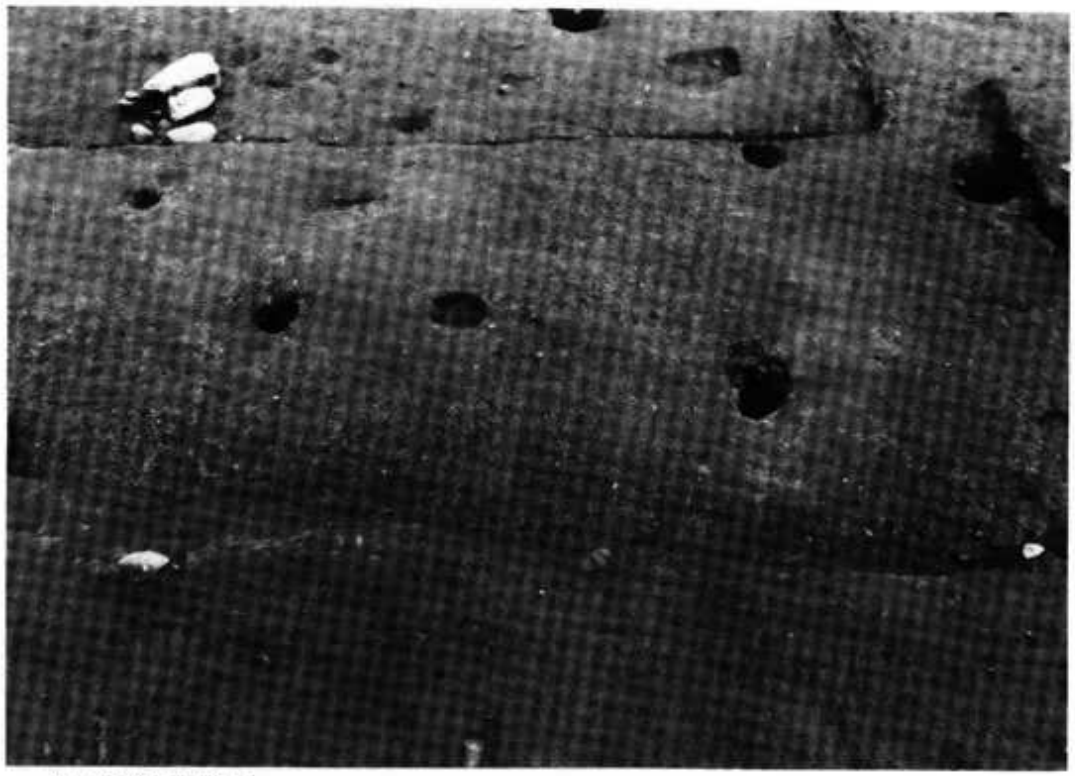
同　上

Y－3号住居址　遺物出土状況

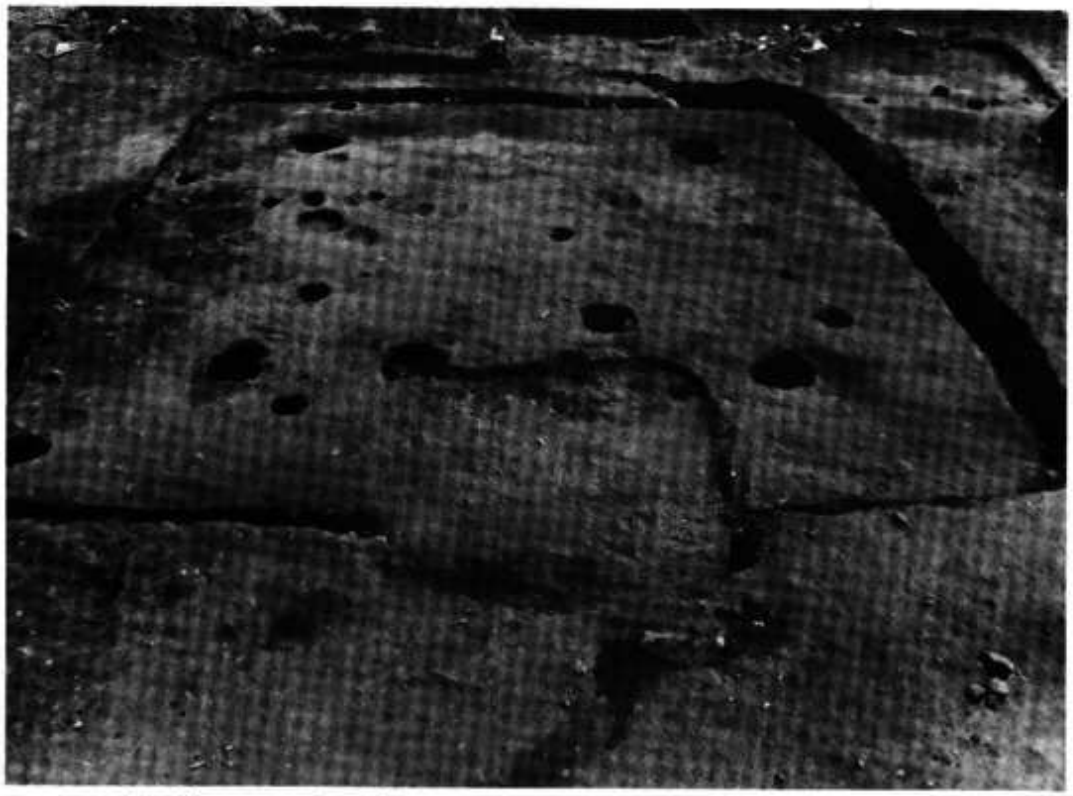


同　上

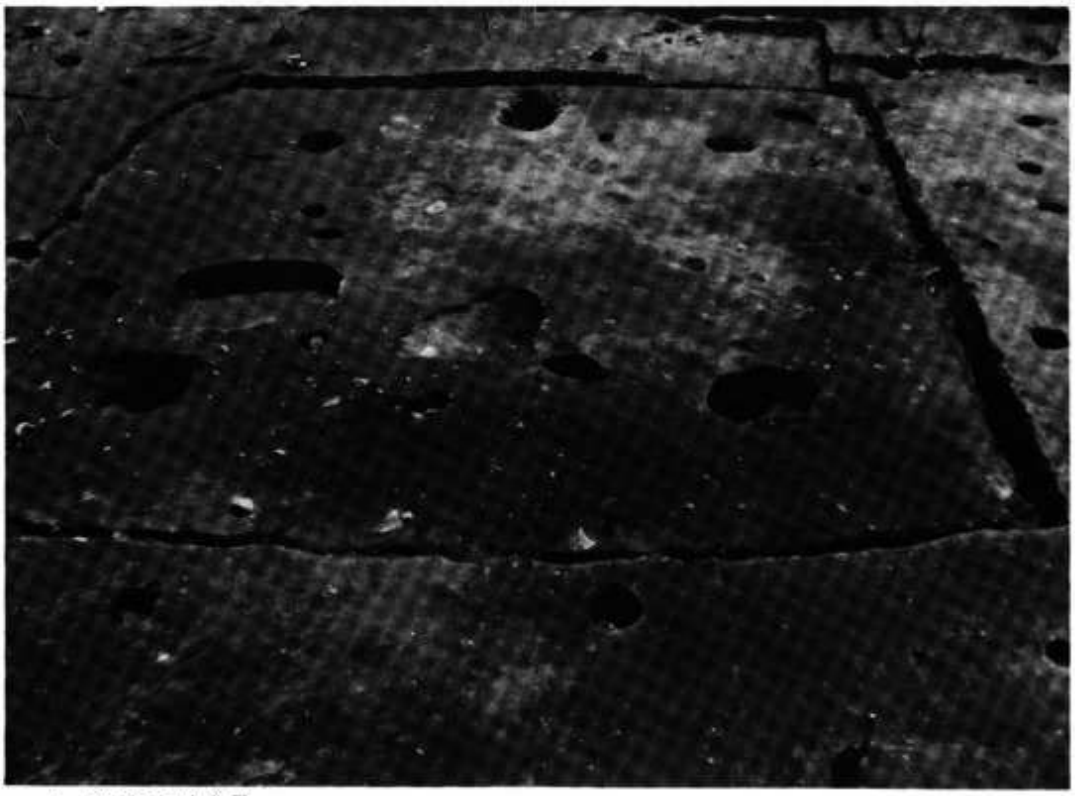
図版8



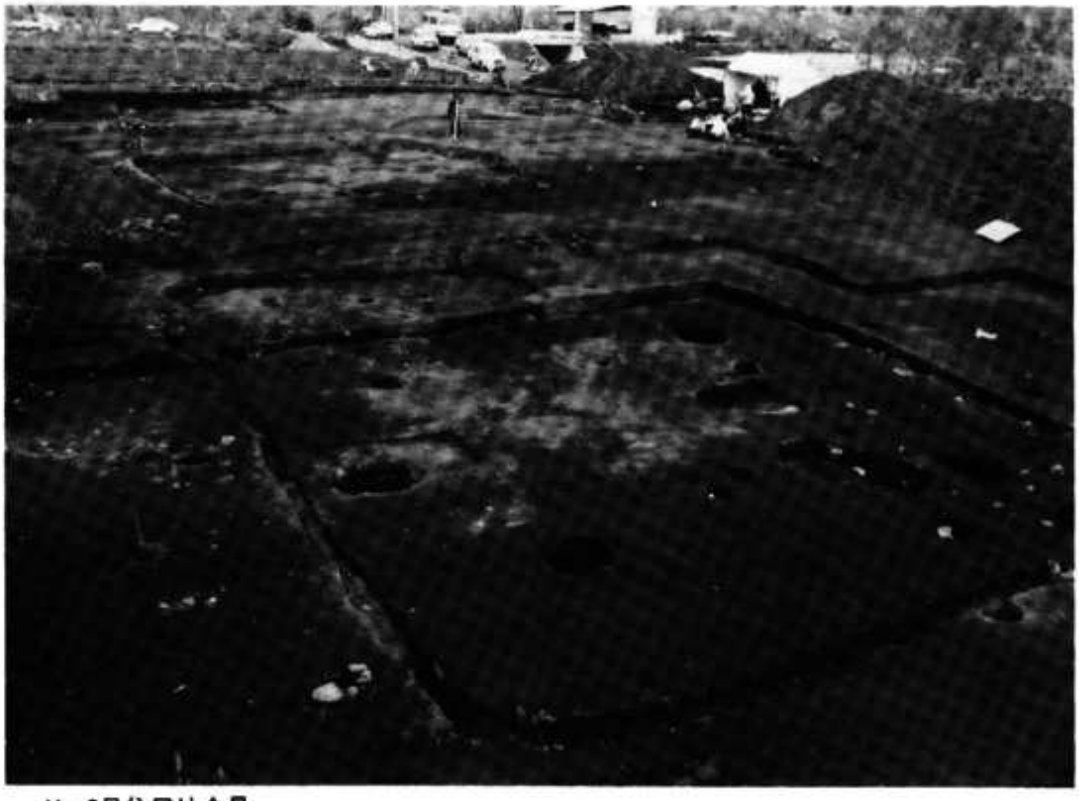
H－4号住居址全景



H－5号(中央)・H－13号(手前)住居址全景



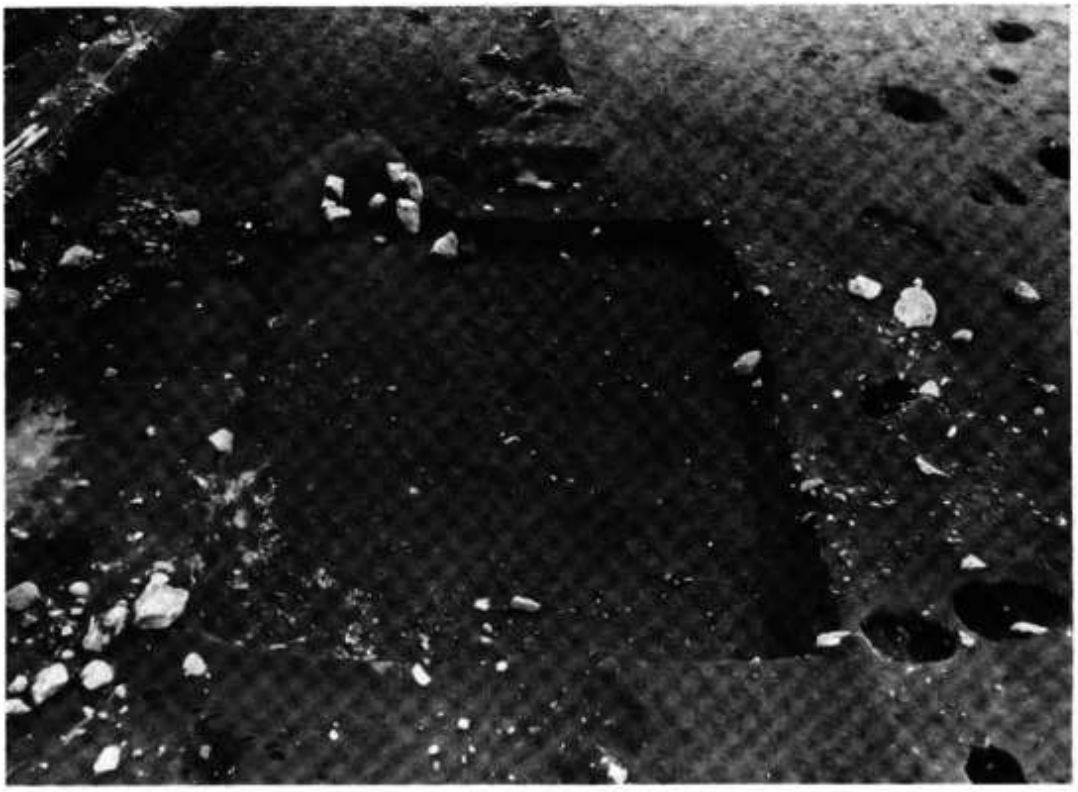
H－6号住居址全景



H－6号住居址全景

図版10

H－7号住居址全景

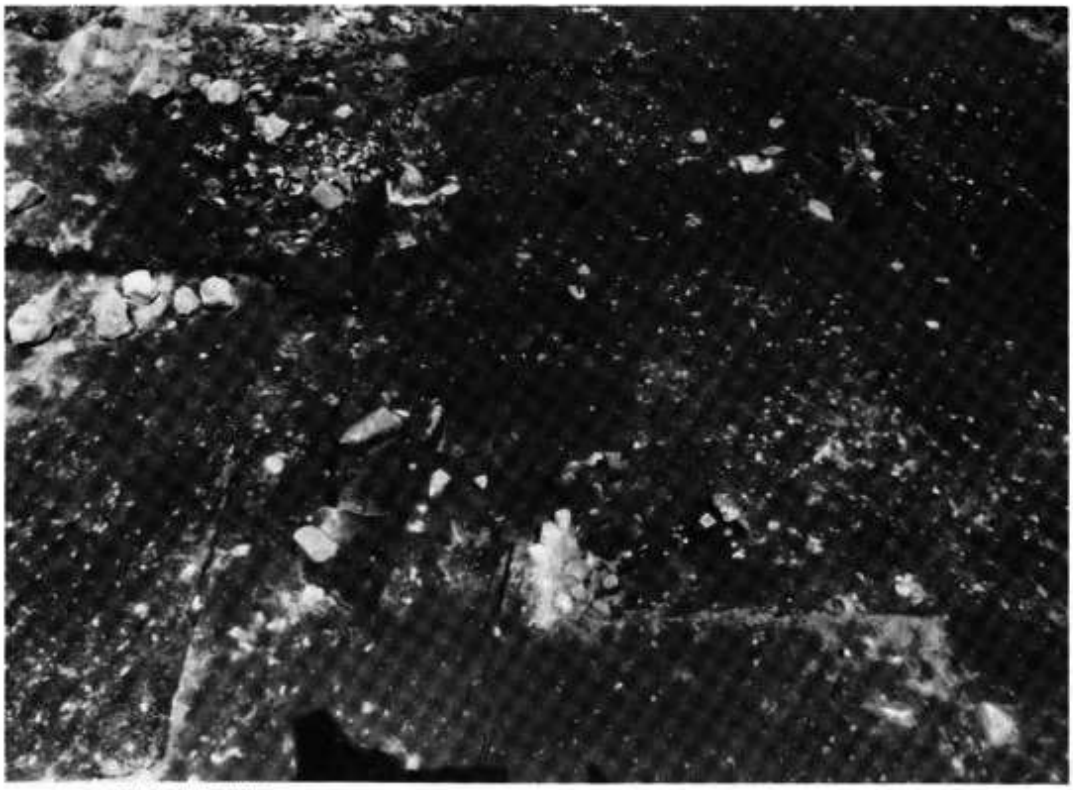


H－8号住居址全景

H－5号住居址　遺物出土状況

H－7号住居址　遺物出土状況

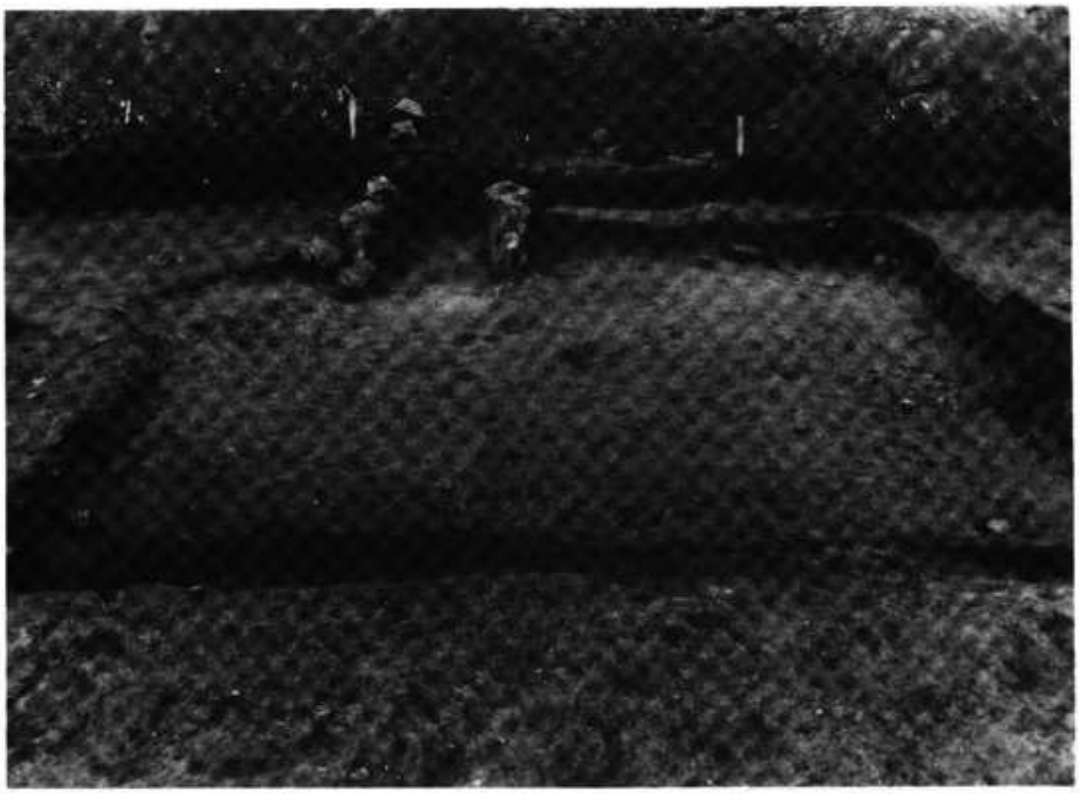
図版12



H−11号住居址全景

同カマド全景

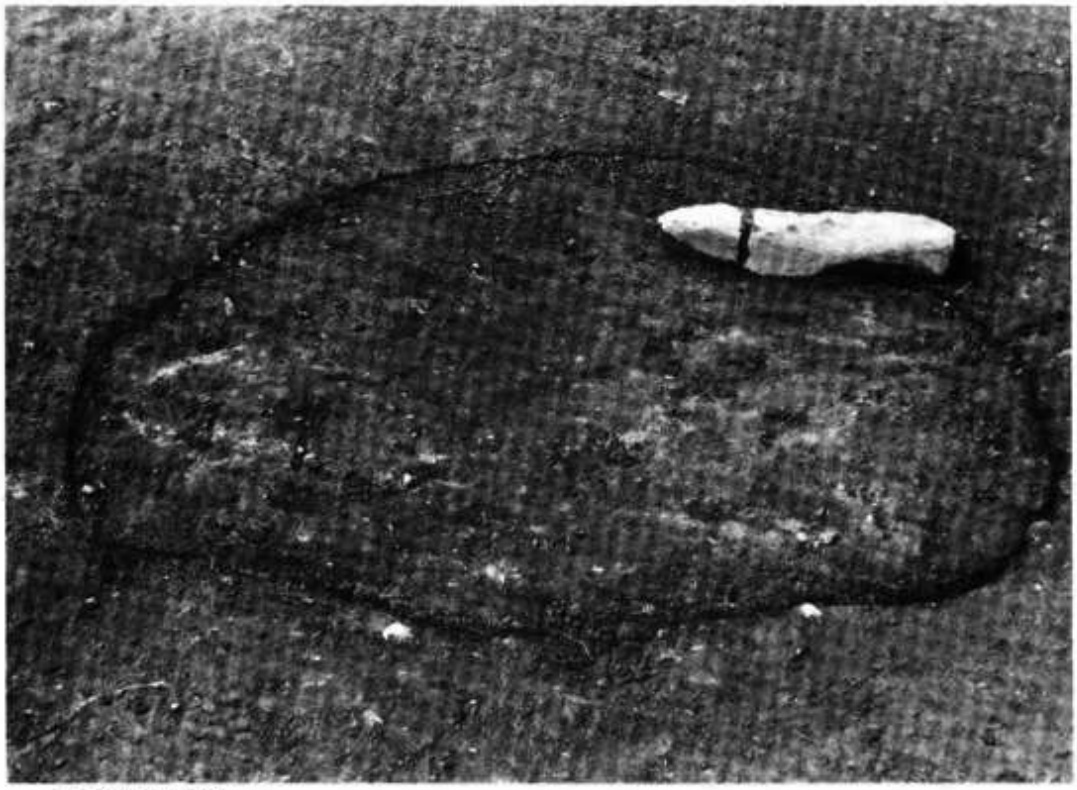
H−12号住居址全景



H−15号住居址全景

図版14

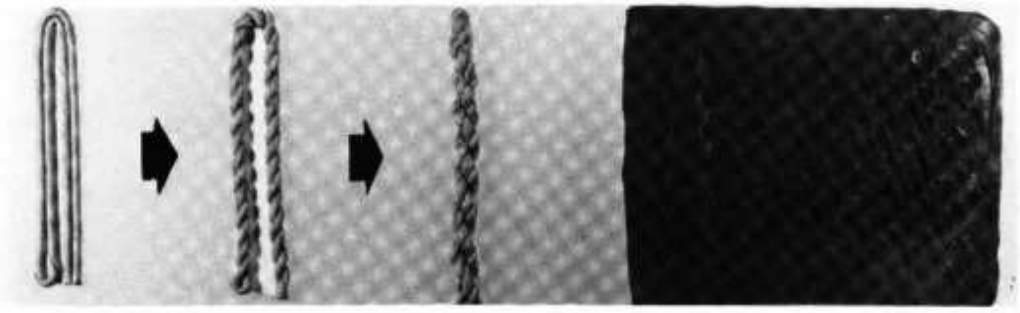
H−18号住居址全景



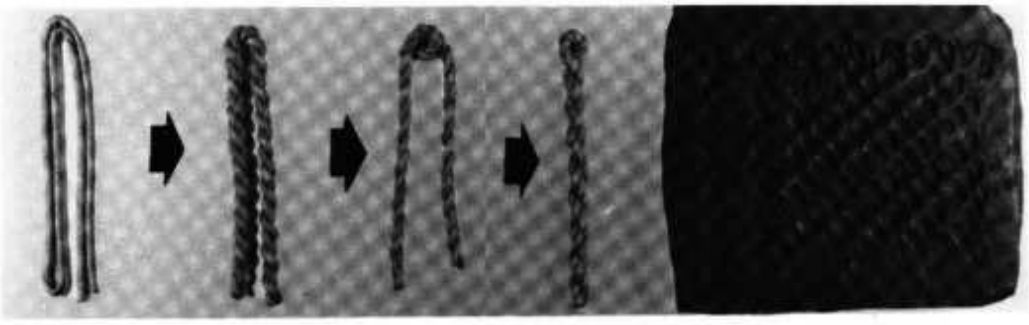
土壙検出状況

縄文原体の製作工程と横位回転(Ⅰ)

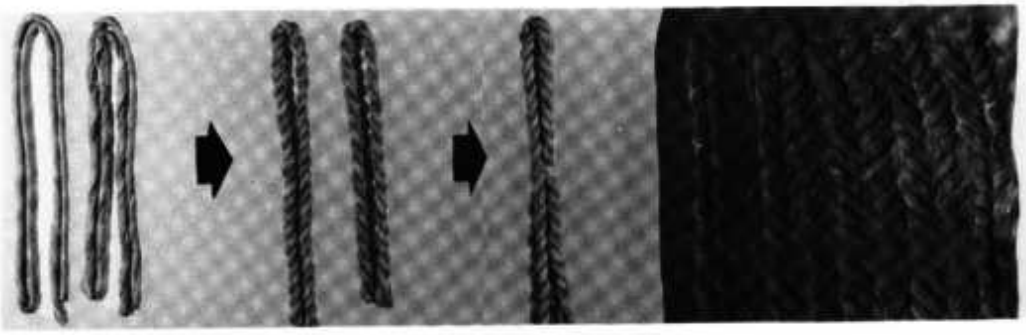
図版15



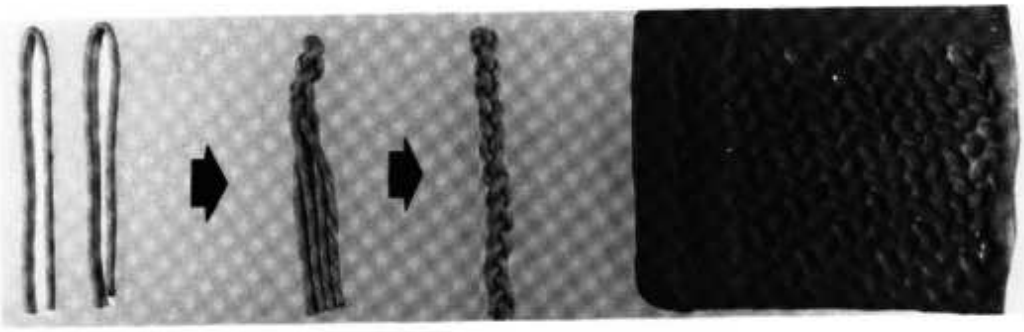
1. 単節斜縄文



2. ループ文



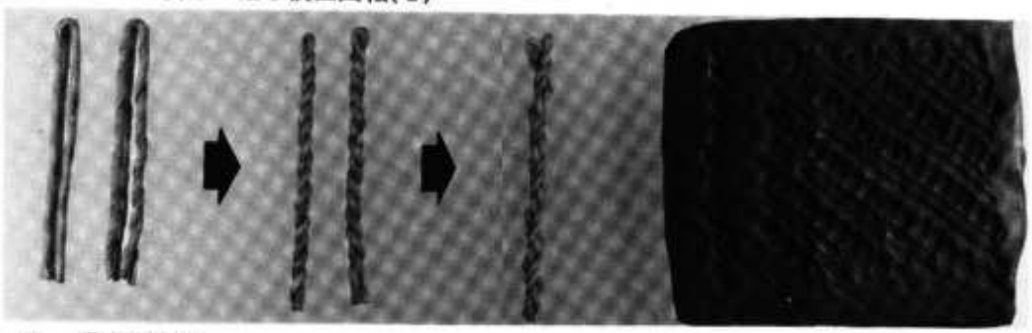
3. 縄の束



4. 丸組紐

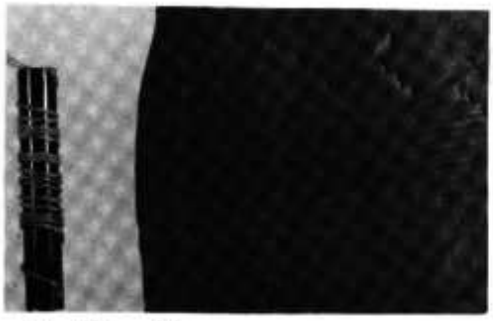
図版16

縄文原体の製作工程と横位回転(2)

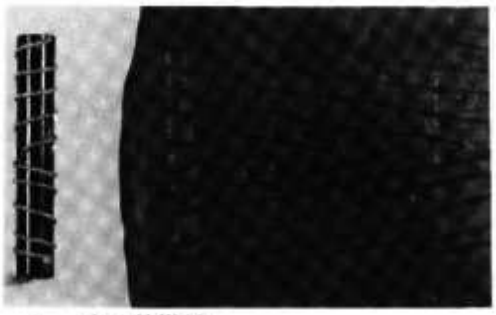


5. 異条斜縄文

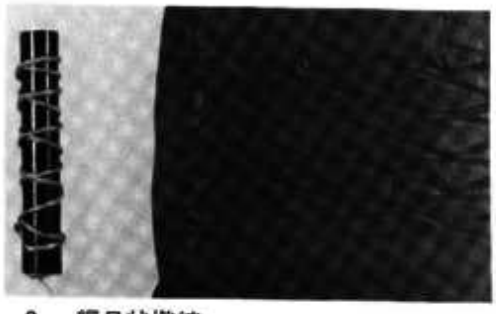
6. 附加条縄文



7. 撚　紋



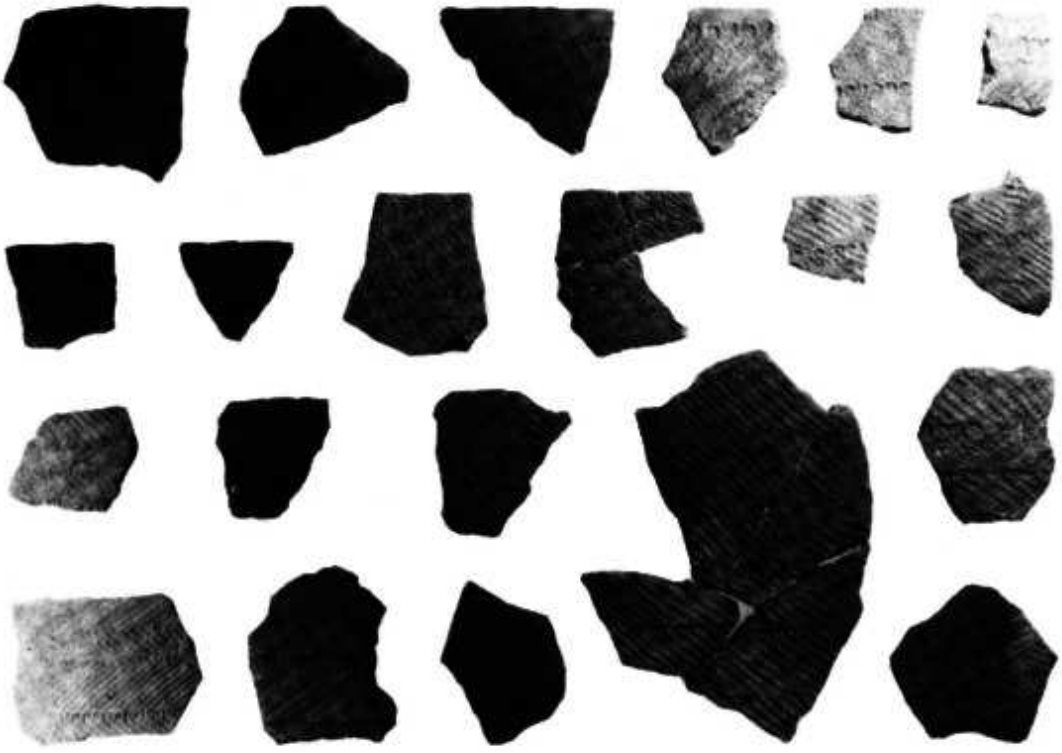
8. 木目状撚紋



9. 網目状撚紋

1. 縄文前期第1類土器

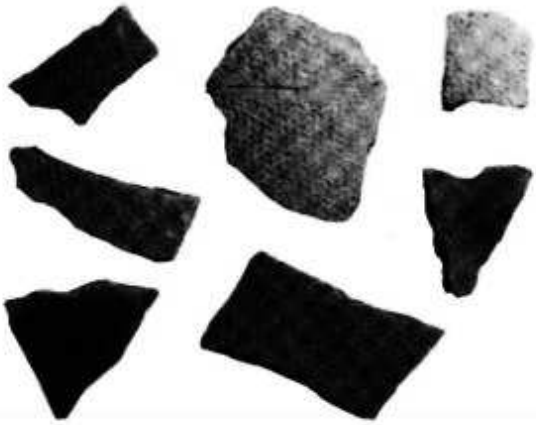
2. 縄文前期第2類土器(a種)



3. 縄文前期第2類土器(b種)

図版18

1. 縄文前期第２類土器（ｃ種）



2. 縄文前期第２類土器（ｄ種）

3. 縄文前期第２類土器（ｅ種）

4. 縄文前期第２類土器（ｆ～ｈ種）

5. 縄文中・後期の土器

Y−1−1

Y−1−4

Y−2−1

Y−2−4

Y−2−13

Y−2−14

弥生式土器(1)

Y−2−5

Y−2−16

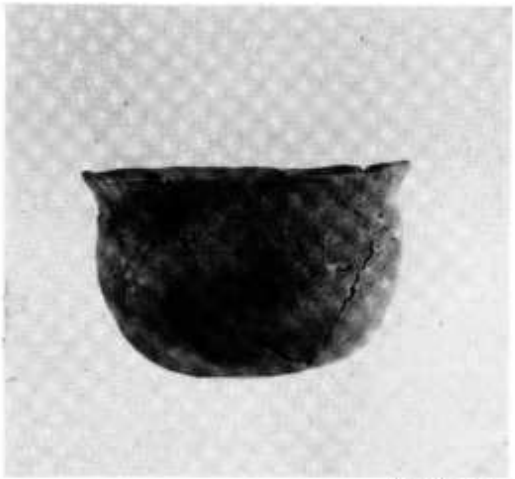
Y−3−2

Y−3−7

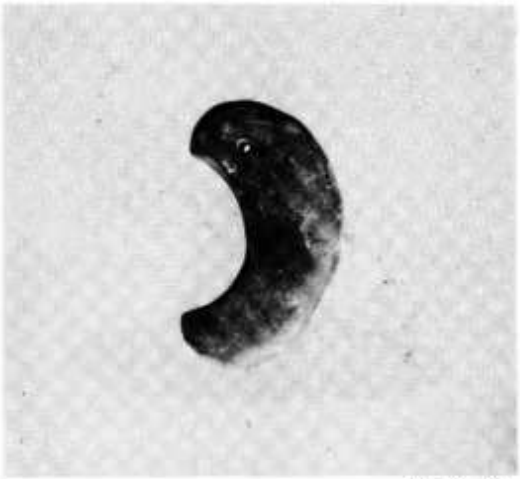
Y−3−8

Y−3−20

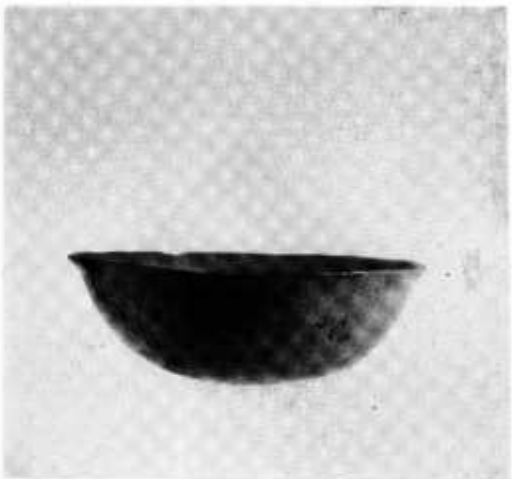
弥生式土器(2)



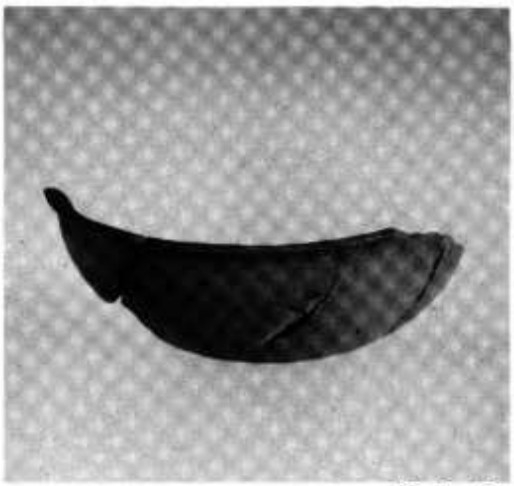
H−4−1



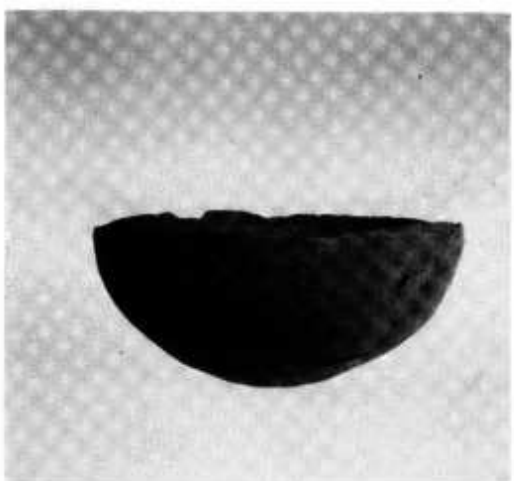
H−4−2



H−5−1



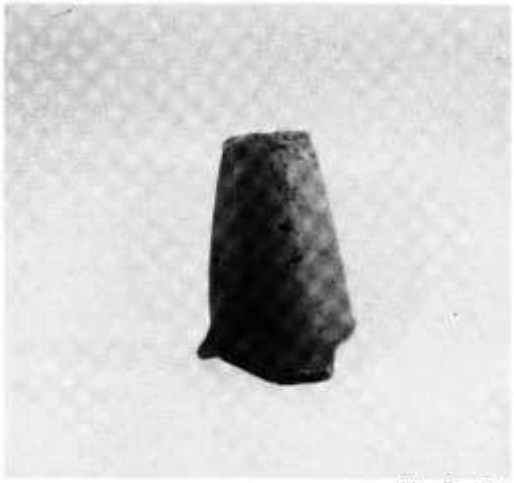
H−5−2



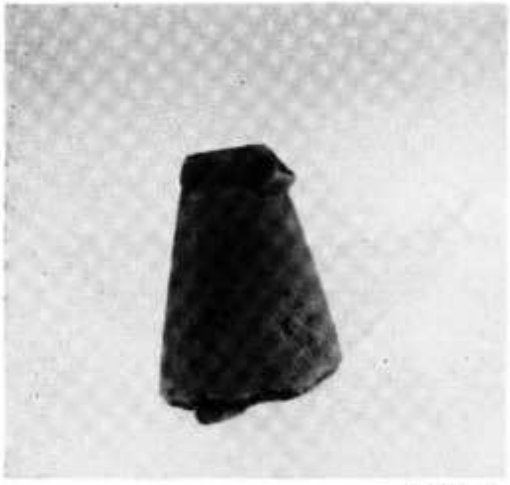
H−5−3

H−5−5

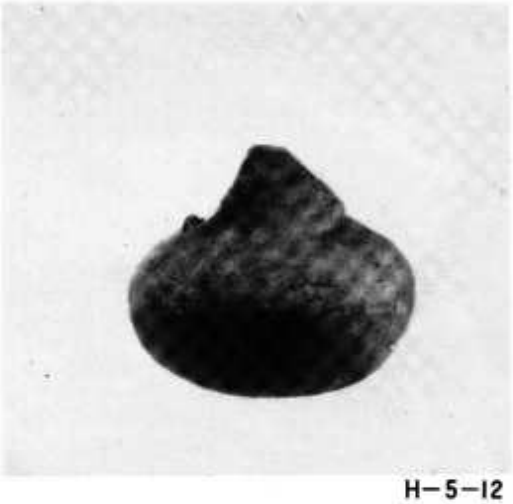
H−5−6



H−5−7

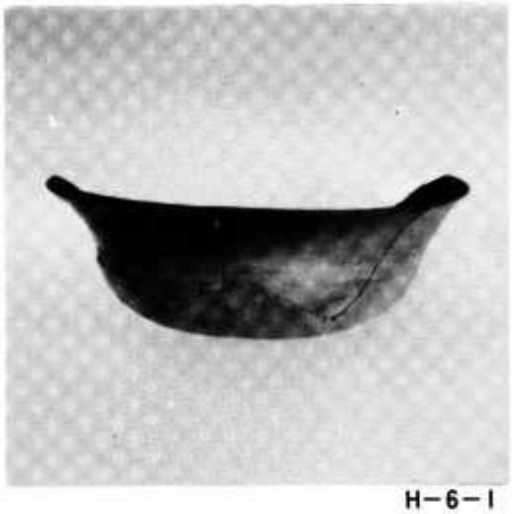


H−5−8



H−5−12

H−5−13



H−6−1

古墳時代の土器(1)

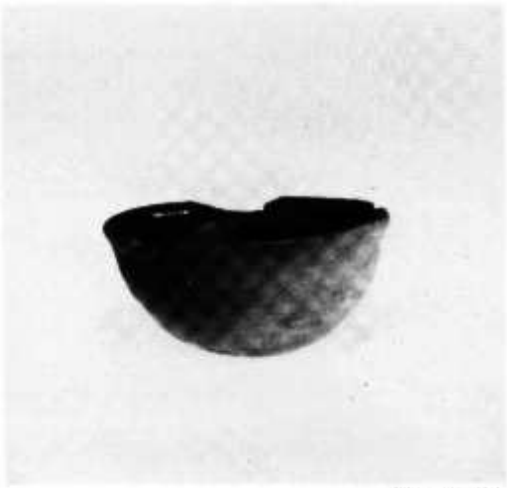
H－6－9

H－6－10

H－6－11

H－6－12

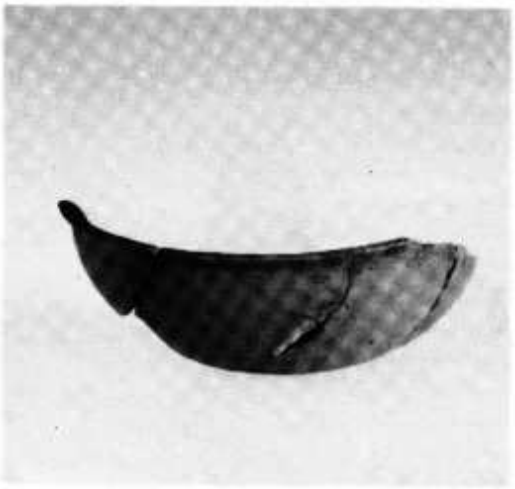
H－6－13



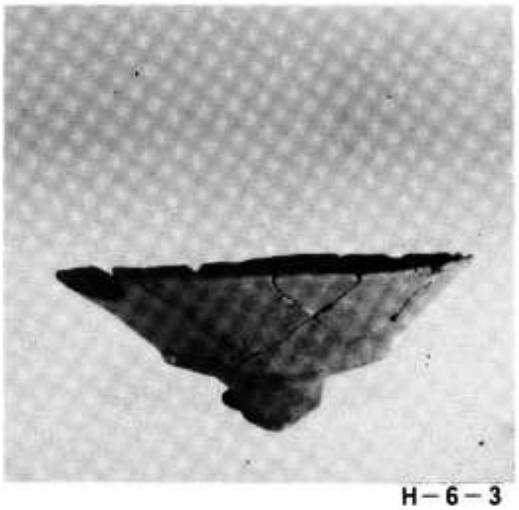
H－7－2

古墳時代の土器(2)

図版24

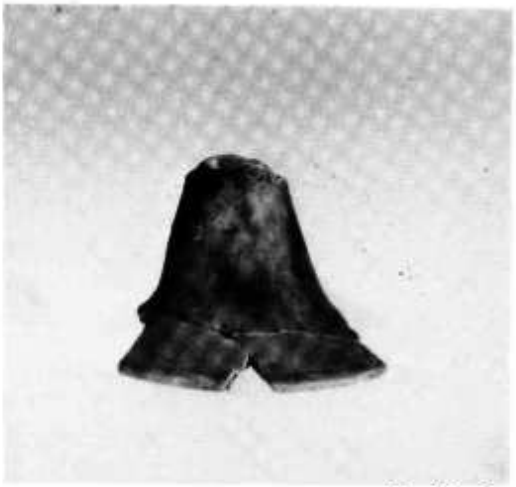


H－6－2



H－6－3

H－6－4



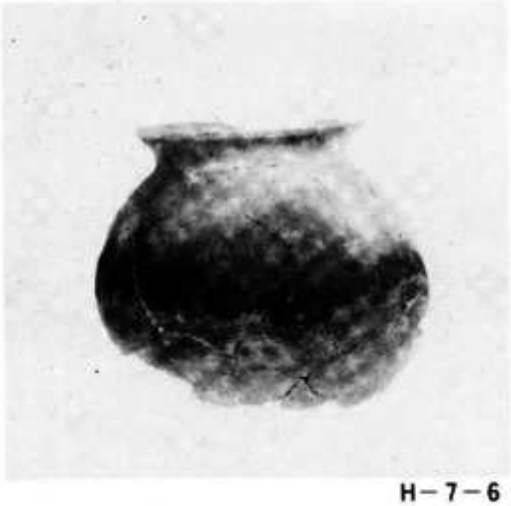
H－6－6

H－6－7

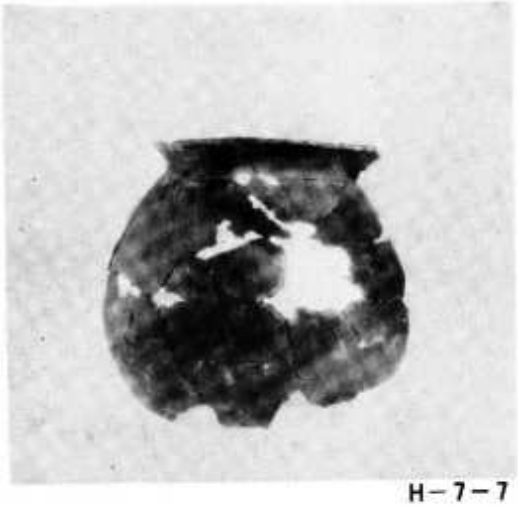
H－6－8

古墳時代の土器(3)

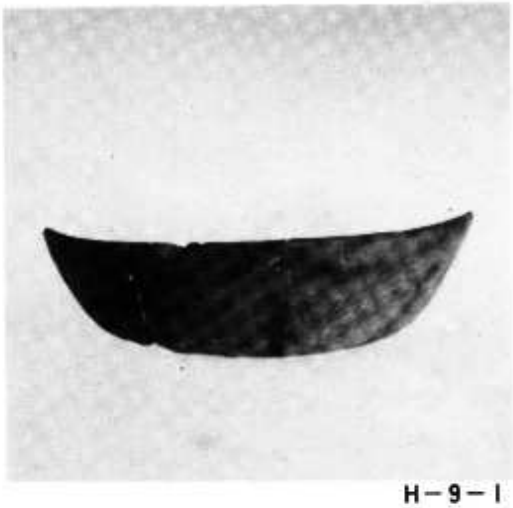
H－7－5



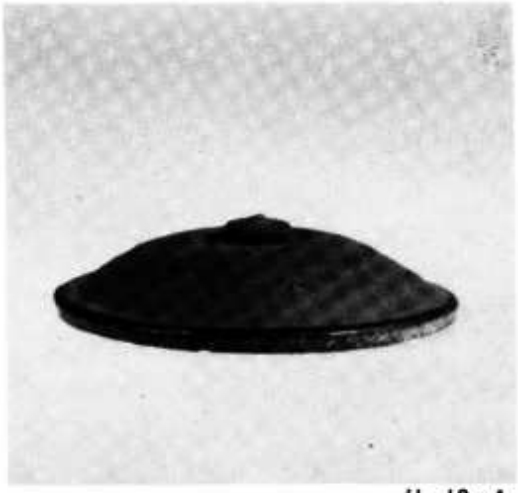
H－7－6



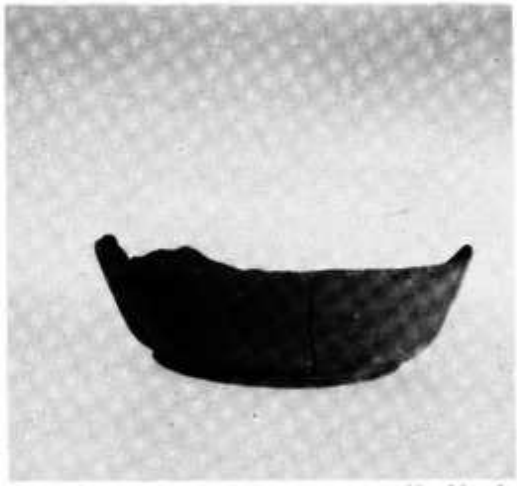
H－7－7



H－9－1



H－10－4



H－11－1

古墳・歴史時代の土器

昭和53年2月20日印刷
昭和53年2月25日発行

田草川尻遺跡 II

編　集　飯山市田草川尻遺跡調査団
発　行　飯山市教育委員会
長野県飯山市大字飯山1110-1
印　刷　三和印刷株式会社
長野県長野市川中島町1822-1